

相野古窯跡群

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XVIII)

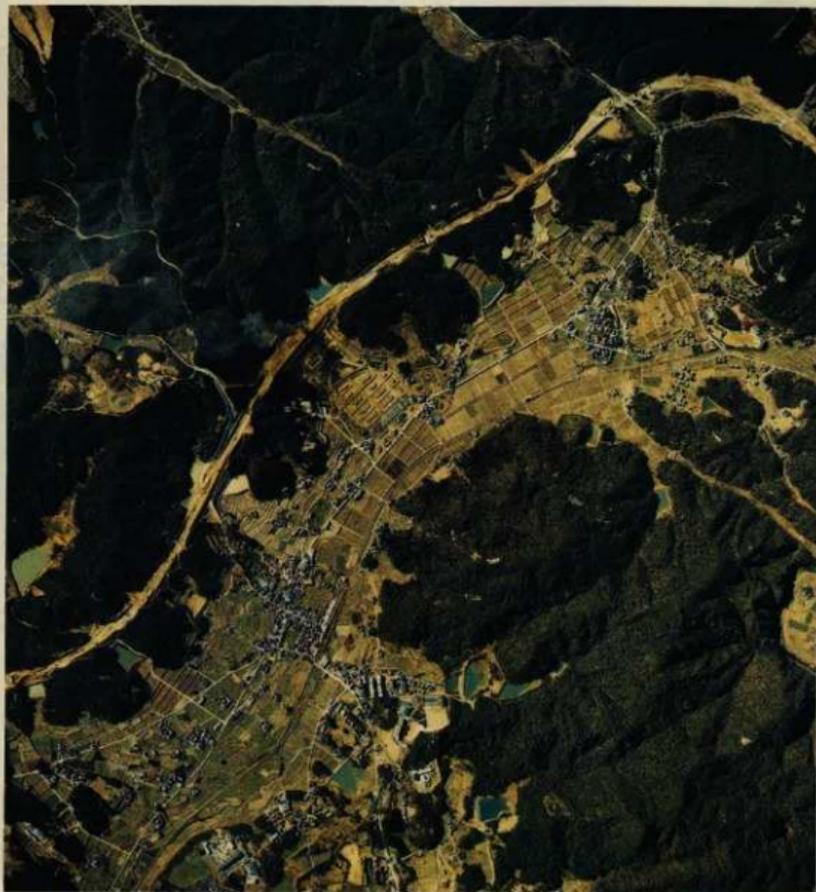
(本文編)

1992. 3

兵庫県教育委員会

相野窯跡群









1. 窯体全景(北より)



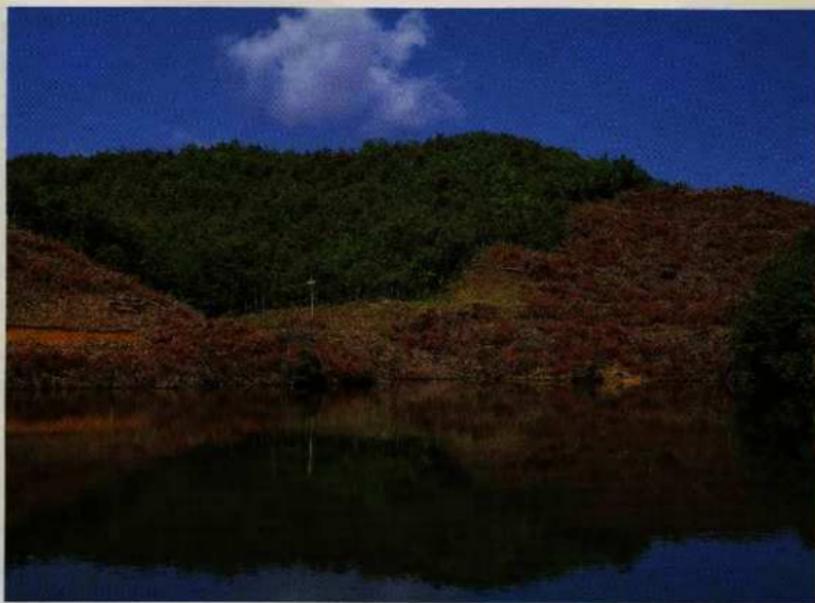
2. 出土須恵器



1. 調查區全景



2. 出土須惠器



1. 古城1・5号窑跡遠景



2. 古城5号窑跡出土須恵器



1. 窯体全景(東より)



2. 出土須恵器



1. 窯体全景(北より)



2. 出土須恵器



1. 窯体全景(南より)



2. 出土須恵器



1. 窯体全景(西より)



2. 出土須恵器



1. 窯体全景(南より)



2. 出土須恵器



1. 窯体全景(西より)



2. 出土須恵器



1. 窯体全景(北より)



2. 出土須恵器



1. 窯体全景(南より)



2. 出土須恵器

凡 例

1. 本書は、日本道路公団大阪支社が建設した近畿自動車道舞鶴線に係わる三田市相野地区に所在する平安時代の相野窯跡群の調査報告書である。
2. 相野窯跡群は、兵庫県教育委員会が日本道路公団大阪支社から委託を受け、昭和59年度から昭和61年度にかけて12箇所、11基（2箇所は灰原のみ）の須恵器窯跡を発掘調査した。
3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が受託し、埋蔵文化財調査係が担当した。調査した窯跡と年次と調査者は次のとおりである。
 - (1) 昭和59年度 ①萩ノ尾窯跡（岡田章一、渡辺 昇、別府洋二）
 - (2) 昭和60年度 ①西谷池1、2号窯跡（大平 茂、村上賢治）
②木戸窯跡（岡崎正雄、市橋重喜、中川 渉、菱田淳子）
 - (3) 昭和61年度 ①寄合谷窯跡（岡崎、山下史朗、山田清朝、山上雅弘）
②中池ノ内1号窯跡（岡崎、山上）
③向上・古城1、2号窯跡（岡崎、山下、山田、山上）
④古城1、2、5号窯跡（岡崎、山上）
⑤古城山1号窯跡（岡崎、山上）
4. 出土品整理作業は、昭和60年度冬から始め、三田市相野の遺跡発掘調査現場事務所、神戸市兵庫区荒田の兵庫県埋蔵文化財調査事務所、そして平成元年から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて行った。
5. 整理作業は整理普及課で行い、相野窯跡群の整理は岡崎を中心に①萩ノ尾窯跡は別府、②西谷池窯跡群は村上、③木戸窯跡は菱田、④寄合谷窯跡・向上・古城窯跡群は山田、④中池ノ内窯跡群・古城窯跡群は山上、⑤古城山1号窯跡は岡崎が、それぞれ編集担当として協議し、各調査員も協力して行った。
6. 整理普及課嘱託員のうち表貝冴子、松本 睦、伴悦子、前田陽子、石本淳子、森本貴子には、最後まで協力を戴いて、漸く報告書が刊行されるに至った。
7. 本書は、多くの窯跡の調査報告を相野窯跡群として1冊の報告書として成果をまとめた。特に、三田市域の平安時代中期の須恵器生産の一端を紹介できる報告になっておれば幸いである。
8. 本書の執筆は、調査担当者が以下の分組で主に行い、付載として自然科学分野から先生方の玉稿を掲載させて戴いた。

岡崎正雄 第1章、第2章、第4章1・2-1,2,4・3-1,2・4～7、第5章、第13章
中川 渉 第3章

西口和彦、西村 康 第4章3-3

大平 茂 第4章2-3

山上雅弘 第6章、第8章

山下史朗 第7章1-4、第10章1-2

山田清朝 第7章5-9、第10章3

村上賢治 第9章

別府洋二 第11章

菱田淳子 第12章

9. 発掘調査時においては、1)奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター研究指導部 西村康主任研究官(現発掘技術研究室長)・松井 章技官から地磁気探査の指導・協力を戴き、また探査結果については、西村 康氏が解析にあたり、西村・西口が第4章で記述している。2)富山大学理学部地球科学教室 広岡公夫教授をはじめ研究室の学生諸君から熱線留地磁気測定のを協力を戴き、解析の結果については付載としてまとめている。
10. 出土品整理作業時には、1)奈良教育大学 三辻利一教授に須恵器の胎土分析を通じ、相野窯跡群領域の設定をして戴き、今後の試料の産地同定基準資料を作って戴いた。2)嶋倉巳三郎先生には窯の燃料について、炭化材の樹種同定をお願いし、当時の植生復原を試みて戴いた。それぞれの成果については、付載としてまとめている。
11. 本書に報告した遺物のうち、須恵器は掲載出来なかった多くの須恵器とともに、明石市魚住町所在の収蔵庫(魚住分館)で保管している。また、写真・実測図ほか資料と炭化材のサンプルは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で収蔵・保管している。
12. 最後に、発掘調査時から報告書作成に至るまで、ずいふんと多くの方々にご指導・御助言を戴き、本書が刊行することができました。ここに機関名、芳名を列記し、お礼に替えて戴きます。

奈良国立文化財研究所、富山大学、奈良教育大学、京都大学文学部博物館、三田市教育委員会、兵庫県陶芸館、中世土器研究会、神戸市立博物館

西村 康、松井 章、広岡公夫、三辻利一、嶋倉巳三郎、吉村勝之、森定 尚、喜谷美宜、森田 稔、高島信之、山崎敏昭、石田陶春、市野弘之、二葉 滋、前川 要、中村 浩、菱田哲郎、西井逸男

目 次

第 1 章	はじめに	1
第 1 節	相野窯跡群の発見	1
第 2 節	相野窯跡群の須恵器の器種について	5
第 2 章	調査の経緯	9
第 1 節	近畿自動車道舞鶴線に伴う調査	9
第 2 節	相野窯跡群の調査経過	12
第 3 章	遺跡の環境	15
第 1 節	地理的環境	15
第 2 節	歴史的環境	17
第 4 章	遺跡の調査	21
第 1 節	分布調査	21
第 2 節	確認調査	22
1.	溜池に伴う確認調査	22
2.	美囊郡吉川町福吉地区確認調査・炭窯調査	23
3.	昭和60年度本線確認調査	25
4.	昭和61年度本線確認調査	27
第 3 節	地磁気探査	27
1.	昭和59年度地磁気探査	27
2.	昭和61年度地磁気探査	27
3.	地磁気探査について	28
第 4 節	本調査	37
第 5 節	熱残留磁気探査	51

第6節	遺物整理作業	52
第7節	分析鑑定調査	54
第5章	古城山1号窯跡の調査	55
第1節	調査の方法	55
1.	位置	55
2.	方法	55
第2節	遺構の調査	60
1.	概要	60
2.	窯体	60
3.	周溝	60
4.	灰原	60
第3節	遺物	65
1.	概要	65
2.	窯体内出土遺物	65
3.	周溝出土遺物	70
4.	灰原出土遺物	70
第4節	小 結	93
	古城山1号窯跡遺物観察表	96~102
第6章	古城窯跡群の調査	103
第1節	古城窯跡群の概要	103
第2節	古城1号窯跡の調査	107
1.	調査の方法	107
2.	遺構の調査	107
3.	遺 物	110
	古城1号窯跡遺物観察表	143~155
第3節	古城2号窯跡の調査	156
1.	位 置	156
2.	方法と経緯	156
3.	調査の結果	156

第4節	古城3・4号窯跡の調査	159
1.	概 要	159
2.	古城3号窯跡遺物	159
3.	古城4号窯跡遺物	160
	古城2・3・4号窯跡遺物観察表	161
第5節	古城5号窯跡の調査	162
1.	調査の方法	162
2.	遺構の調査	162
3.	遺 物	166
	古城5号窯跡遺物観察表	176-178
第6節	小 結	179
第 7 章	向上・古城窯跡群の調査	181
第1節	調査の方法	181
1.	位 置	181
2.	方 法	181
第2節	向上・古城1号窯跡の調査	184
1.	概 要	184
2.	窯 体	184
3.	周 溝	185
4.	灰 原	185
5.	そ の 他	185
第3節	向上・古城2号窯跡の調査	191
1.	概 要	192
2.	窯 体	193
3.	周 溝	194
4.	灰 原	194
5.	そ の 他	194
第4節	その他の遺構	194
1.	3号遺構	194
2.	4号遺構	197
第5節	向上・古城1号窯跡出土遺物	198

1.	概 要	198
2.	竈体内出土遺物	198
3.	灰原出土遺物	200
4.	周溝出土遺物	204
第6節	向上・古城2号竈跡出土遺物	223
1.	概 要	223
2.	竈体内出土遺物	223
3.	灰原出土遺物	224
4.	周溝出土遺物	225
第7節	3号遺構出土遺物	231
第8節	4号遺構出土遺物	231
第9節	小 結	233
1.	器種構成の検討	233
2.	小 結	240
	向上・古城1, 2号竈跡出土土器観察表	242~253

第 8 章 中池ノ内1号竈跡の調査 255

第1節	調査の方法	255
1.	位 置	255
2.	方 法	255
第2節	遺構の調査	259
1.	概 要	259
2.	竈 体	259
3.	周 溝	267
4.	灰 原	269
5.	炭 窯	270
第3節	遺 物	271
1.	概 要	271
2.	竈体内出土遺物	271
3.	焚口出土遺物	272
4.	周溝出土遺物	273
5.	灰原出土遺物	273

第4節 小 結	304
中池ノ内1号窯跡出土土器観察表	306~318
第 9 章 西谷池窯跡群の調査	319
第1節 調査の方法	319
1. 位 置	319
2. 方 法	319
第2節 西谷池1号窯跡の調査	324
1. 遺構の調査	324
2. 遺 物	333
3. 小 結	350
西谷池1号窯跡遺物観察表	351~357
第3節 西谷池2号窯跡の調査	358
1. 遺構の調査	358
2. 遺 物	365
3. 小 結	378
西谷池2号窯跡遺物観察表	379~385
第4節 小 結	386
第10章 寄合谷窯跡の調査	387
第1節 調査の方法	387
1. 位 置	387
2. 方 法	387
第2節 遺構の調査	388
1. 概 要	388
2. 窯 体	390
3. 周 溝	390
4. 灰 原	394
5. そ の 他	394
第3節 遺 物	395
1. 概 要	395

2. 窠体内出土遺物	395
3. 灰原出土遺物	396
4. 小 結	399
寄合谷窠跡遺物観察表	405~407
第 11 章 萩ノ尾窠跡の調査	409
第 1 節 調査の方法	409
1. 位 置	409
2. 方 法	409
第 2 節 遺構の調査	412
1. 概 要	412
2. 窠 体	412
3. 周 溝	412
4. 灰 原	415
5. その他の遺構	415
第 3 節 遺 物	416
1. 概 要	416
2. 窠体内出土遺物	416
3. 焚口出土遺物	418
4. 灰原出土遺物	418
5. ま と め	419
第 4 節 小 結	420
萩ノ尾窠跡遺物観察表	426~428
第 12 章 木戸窠跡の調査	429
第 1 節 調査の方法	429
1. 位 置	429
2. 方 法	429
第 2 節 遺構の調査	434
1. 概 要	434
2. 窠 体	434

3. 灰 原	436
4. 周 溝	436
第3節 遺 物	437
1. 概 要	437
2. 竈体内出土遺物	437
3. 燃焼室及び焚口部出土遺物	438
4. 周溝出土の遺物	438
5. 灰原出土及び表土出土の遺物	442
6. その他の地点出土の遺物	466
第4節 小 結	467
木戸竈跡遺物観察表	470~484
第13章 ま と め	485
第1節 相野竈跡群の須恵器について	485
1. 竈別の器種について	485
2. 竈別の器種組成について	487
3. 器種の消長	488
4. 法量について	491
5. ヘラ記号について	510
6. 相野竈跡群の須恵器生産の両期	514
7. 相野竈跡群と水ヶ下支群	514
8. 相野竈跡群の竈構造について	515
第2節 周辺の竈跡群と相野竈跡群について	517
第3節 小 結	524
付 載	
1. 三田市相野竈跡群出土の炭化材の樹種 嶋倉巳三郎	527
2. 相野竈跡群の須恵器の化学特性 三辻 利一	535
3. 三田市相野竈跡群の考古地磁気測定 広岡公夫、古村勝之、森定 尚	541

卷首図版目次

- 卷首図版 1 相野窯跡群の位置 (空中写真)
- 卷首図版 2 相野窯跡群と周辺の文化財
- 卷首図版 3 古城山 1 号窯跡
1. 窯体全景 (北より)
 2. 出土須恵器
- 卷首図版 4 古城 1 号窯跡
1. 調査区全景
 2. 出土須恵器
- 卷首図版 5 古城 5 号窯跡
1. 古城 1・5 号窯跡遠景
 2. 古城 5 号窯跡出土須恵器
- 卷首図版 6 向上・古城 1 号窯跡
1. 窯体全景 (東より)
 2. 出土須恵器
- 卷首図版 7 向上・古城 2 号窯跡
1. 窯体全景 (北より)
 2. 出土須恵器
- 卷首図版 8 中池ノ内 1 号窯跡
1. 窯体全景 (南より)
 2. 出土須恵器
- 卷首図版 9 西谷池 1 号窯跡
1. 窯体全景 (西より)
 2. 出土須恵器
- 卷首図版 10 西谷池 2 号窯跡
1. 窯体全景 (南より)
 2. 出土須恵器
- 卷首図版 11 寄合谷窯跡
1. 窯体全景 (西より)
 2. 出土須恵器
- 卷首図版 12 萩ノ尾窯跡
1. 窯体全景 (北より)
 2. 出土須恵器
- 卷首図版 13 木戸窯跡
1. 窯体全景 (南より)
 2. 出土須恵器

挿 図 目 次

挿図 1	相野窯跡群の位置	xx
挿図 2	三田市内須恵器窯跡群分布図	3
挿図 3	相野窯跡群分布図	4
挿図 4	須恵器器種分類図	8
挿図 5	近畿自動車道舞鶴線と調査遺跡分布図	11
挿図 6	地形分類図	16
挿図 7	周辺遺跡地図	18
挿図 8	昭和59年度調査位置図	22
挿図 9	No. 3 炭窯地形図	23
挿図 10	No. 3 炭窯実測図	24
挿図 11	昭和60年度調査位置図	26
挿図 12	昭和61年度調査位置図	27
挿図 13	大池・松池地区地磁気探査位置図	29
挿図 14	大池地区地磁気探査データ	30
挿図 15	松池地区地磁気探査データ	31
挿図 16	No.14地点地区地磁気探査位置図	32
挿図 17	No.14地点S地区地磁気探査データ	32
挿図 18	No.14地点N地区地磁気探査データ	33
挿図 19	古城1・2・3地区地磁気探査位置図	34
挿図 20	古城1地区地磁気探査探査データ	35
挿図 21	古城2地区地磁気探査探査データ	35
挿図 22	古城3地区地磁気探査探査データ	35
挿図 23	磁気探査風景写真	36
挿図 24	近畿自動車道舞鶴線と相野窯跡群の位置(1)	39
挿図 25	近畿自動車道舞鶴線と相野窯跡群の位置(2)	40
挿図 26	近畿自動車道舞鶴線と相野窯跡群の位置(3)	41
挿図 27	熱残留磁気探査風景	51
挿図 28	遺物整理作業風景	52
挿図 29	胎土分析領域図	54
挿図 30	古城山1号窯跡位置図	56

挿図 31	古城山1号窯跡全体図	57
挿図 32	古城山1号窯跡 窯体・周溝・灰原土層堆積状況図	58
挿図 33	古城山1号窯跡 窯体・周溝遺構図	59
挿図 34	古城山1号窯跡 窯体図	61・62
挿図 35	古城山1号窯跡 窯体床面断割り細部図	63
挿図 36	古城山1号窯跡 灰原谷部土層堆積状況図	64
挿図 37	古城山1号窯跡 窯体出土須恵器(1)	67
挿図 38	古城山1号窯跡 窯体出土須恵器(2)	68
挿図 39	古城山1号窯跡 窯体出土須恵器(3)	69
挿図 40	古城山1号窯跡 窯体出土須恵器(4)	70
挿図 41	古城山1号窯跡 周溝・灰原出土須恵器(1)	73
挿図 42	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(2)	74
挿図 43	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(3)	75
挿図 44	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(4)	76
挿図 45	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(5)	77
挿図 46	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(6)	78
挿図 47	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(7)	79
挿図 48	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(8)	80
挿図 49	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(9)	81
挿図 50	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(10)	82
挿図 51	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(11)	83
挿図 52	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(12)	84
挿図 53	古城山1号窯跡 周溝・灰原出土須恵器(13)	85
挿図 54	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(14)	86
挿図 55	古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(15)、窯道具	87
挿図 56	古城山1号窯跡 ヘラ記号拓影(1)	88
挿図 57	古城山1号窯跡 ヘラ記号拓影(2)	89
挿図 58	古城山1号窯跡 底部圧痕拓影(1)	90
挿図 59	古城山1号窯跡 底部圧痕拓影(2)	91
挿図 60	古城山1号窯跡 底部圧痕拓影(3)	92
挿図 61	古城山1号窯跡須恵器法量グラフ	94
挿図 62	古城窯跡群位置図	104
挿図 63	古城1・2号窯跡調査地区位置図	105

挿図 64	古城1号窯跡調査地区位置図	106
挿図 65	古城1号窯跡 灰原遺構図	108
挿図 66	古城1号窯跡 灰原土層堆積断面図	109
挿図 67	古城1号窯跡 灰原出土須恵器人形	111
挿図 68	古城1号窯跡 トレンチ出土須恵器	111
挿図 69	古城1号窯跡須恵器法量グラフ	113
挿図 70	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(1)	114
挿図 71	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(2)	115
挿図 72	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(3)	116
挿図 73	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(4)	117
挿図 74	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(5)	118
挿図 75	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(6)	119
挿図 76	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(7)	120
挿図 77	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(8)	121
挿図 78	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(9)	122
挿図 79	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(10)	123
挿図 80	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(11)	124
挿図 81	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(12)	125
挿図 82	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(13)	126
挿図 83	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(14)	127
挿図 84	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(15)	128
挿図 85	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(16)	129
挿図 86	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(17)	130
挿図 87	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(18)	131
挿図 88	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(19)	132
挿図 89	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(20)	133
挿図 90	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(21)	134
挿図 91	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(22)	135
挿図 92	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(23)	136
挿図 93	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(24)	137
挿図 94	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(25)	138
挿図 95	古城1号窯跡 灰原出土須恵器(26)	139
挿図 96	古城2号窯跡調査トレンチと土層堆積状況図	157

挿図 97	古城 2 号窯跡出土須恵器	158
挿図 98	古城 3・4 号窯跡出土須恵器	160
挿図 99	古城 5 号窯跡調査位置図	163
挿図 100	古城 5 号窯跡 窯体と灰原遺構図	164
挿図 101	古城 5 号窯跡 灰原土層堆積状況図	165
挿図 102	古城 5 号窯跡 須恵器法量グラフ	167
挿図 103	古城 5 号窯跡 灰原出土須恵器(1)	169
挿図 104	古城 5 号窯跡 灰原出土須恵器(2)	170
挿図 105	古城 5 号窯跡 灰原出土須恵器(3)	171
挿図 106	古城 5 号窯跡 灰原出土須恵器(4)	172
挿図 107	古城 5 号窯跡 灰原出土須恵器(5)	173
挿図 108	古城 5 号窯跡 灰原出土須恵器(6)	174
挿図 109	向上・古城窯跡群調査地区位置図	182
挿図 110	向上・古城窯跡群遺構全体図	183
挿図 111	向上・古城 1 号窯跡 窯体・周溝・灰原土層堆積状況図	185
挿図 112	向上・古城 1 号窯跡 窯体・周溝平面図	186
挿図 113	向上・古城 1 号窯跡 窯体・周溝断面図	187
挿図 114	向上・古城 1 号窯跡 窯体遺構図	189・190
挿図 115	向上・古城 2 号窯跡 窯体・周溝・灰原土層堆積状況図	191
挿図 116	向上・古城 2 号窯跡 窯体・周溝平面図	192
挿図 117	向上・古城 2 号窯跡 窯体・周溝断面図	193
挿図 118	向上・古城 2 号窯跡 窯体遺構図	195・196
挿図 119	向上・古城窯跡群 3 号遺構図	197
挿図 120	向上・古城窯跡群 4 号遺構図	197
挿図 121	向上・古城 1 号窯跡 須恵器法量グラフ	206
挿図 122	向上・古城 1 号窯跡 窯体内出土須恵器(1)	207
挿図 123	向上・古城 1 号窯跡 窯体内出土須恵器(2)	208
挿図 124	向上・古城 1 号窯跡 灰原出土須恵器(1)	209
挿図 125	向上・古城 1 号窯跡 灰原出土須恵器(2)	210
挿図 126	向上・古城 1 号窯跡 灰原出土須恵器(3)	211
挿図 127	向上・古城 1 号窯跡 灰原出土須恵器(4)	212
挿図 128	向上・古城 1 号窯跡 灰原出土須恵器(5)	213
挿図 129	向上・古城 1 号窯跡 灰原出土須恵器(6)	214

挿図130	向上・古城1号窯跡	灰原出土須恵器(7)	215
挿図131	向上・古城1号窯跡	灰原出土須恵器(8)	216
挿図132	向上・古城1号窯跡	灰原出土須恵器(9)	217
挿図133	向上・古城1号窯跡	灰原出土須恵器(10)	218
挿図134	向上・古城1号窯跡	灰原出土須恵器(11)	219
挿図135	向上・古城1号窯跡	灰原出土須恵器(12)	220
挿図136	向上・古城1号窯跡	周溝内出土須恵器(1)	221
挿図137	向上・古城1号窯跡	周溝内出土須恵器(2)	222
挿図138	向上・古城1号窯跡	周溝内出土須恵器(3)	223
挿図139	向上・古城2号窯跡	須恵器法量グラフ	226
挿図140	向上・古城2号窯跡	窯体内出土須恵器	227
挿図141	向上・古城2号窯跡	灰原出土須恵器(1)	228
挿図142	向上・古城2号窯跡	灰原出土須恵器(2)	229
挿図143	向上・古城2号窯跡	周溝内出土須恵器	230
挿図144	向上・古城窯跡群	4号遺構出土須恵器	232
挿図145	向上・古城窯跡群	3号遺構出土須恵器	233
挿図146	向上・古城窯跡群	出土須恵器の接合関係	234
挿図147	向上・古城1号窯跡	出土須恵器の器種構成	237
挿図148	向上・古城2号窯跡	出土須恵器の器種構成	239
挿図149	中池ノ内窯跡群位置図		256
挿図150	中池ノ内1号窯跡	確認調査トレンチ断面図	257
挿図151	中池ノ内1号窯跡	調査位置図	258
挿図152	中池ノ内1号窯跡	炭窯遺構全体図	259
挿図153	中池ノ内1号窯跡	窯体・周溝・灰原土層堆積状況図	260
挿図154	中池ノ内1号窯跡	遺構全体図	261
挿図155	中池ノ内1号窯跡	窯体・周溝遺構図	262
挿図156	中池ノ内1号窯跡	窯体・周溝断面図	263
挿図157	中池ノ内1号窯跡	窯体前庭部遺構図	264
挿図158	中池ノ内1号窯跡	窯体遺構図	265・266
挿図159	中池ノ内1号窯跡	周溝内土壌遺構図	267
挿図160	中池ノ内窯跡群	炭窯遺構図	268
挿図161	中池ノ内窯跡群	炭窯出土土器	269
挿図162	調査風景写真		269

挿図163	中池ノ内1号窯跡須恵器法量グラフ	273
挿図164	中池ノ内1号窯跡 窯体内出土須恵器(1)	274
挿図165	中池ノ内1号窯跡 窯体内出土須恵器(2)	275
挿図166	中池ノ内1号窯跡 窯体内出土須恵器(3)	276
挿図167	中池ノ内1号窯跡 窯体内出土須恵器(4)	277
挿図168	中池ノ内1号窯跡 焚口出土須恵器(1)	278
挿図169	中池ノ内1号窯跡 焚口出土須恵器(2)	279
挿図170	中池ノ内1号窯跡 焚口出土須恵器(3)	280
挿図171	中池ノ内1号窯跡 焚口出土須恵器(4)	281
挿図172	中池ノ内1号窯跡 周溝出土須恵器(1)	282
挿図173	中池ノ内1号窯跡 周溝出土須恵器(2)	283
挿図174	中池ノ内1号窯跡 周溝出土須恵器(3)	284
挿図175	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(1)	285
挿図176	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(2)	286
挿図177	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(3)	287
挿図178	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(4)	288
挿図179	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(5)	289
挿図180	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(6)	290
挿図181	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(7)	291
挿図182	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(8)	292
挿図183	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(9)	293
挿図184	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(10)	294
挿図185	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(11)	295
挿図186	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(12)	296
挿図187	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(13)	297
挿図188	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(14)	298
挿図189	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(15)	299
挿図190	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(16)	300
挿図191	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(17)	301
挿図192	中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(18)	302
挿図193	西谷池窯跡群位置図	320
挿図194	西谷池1号窯跡 調査前地形測量図	322
挿図195	西谷池1号窯跡 調査後地形測量図	323

挿図196	西谷池1号窯跡	遺構全体図	325
挿図197	西谷池1号窯跡	窯体・周溝・灰原土層堆積状況図	326
挿図198	西谷池1号窯跡	窯体遺構図	327
挿図199	西谷池1号窯跡	遺物の出土状況	329
挿図200	西谷池1号窯跡	谷部土層堆積状況図	330
挿図201	西谷池1号窯跡	炭窯遺構図	331
挿図202	西谷池1号窯跡	窯体内出土須恵器(1)	332
挿図203	西谷池1号窯跡	窯体内出土須恵器(2)	334
挿図204	西谷池1号窯跡	窯体内出土須恵器(3)	336
挿図205	西谷池1号窯跡	窯体内出土須恵器(4)	337
挿図206	西谷池1号窯跡	窯体内出土須恵器(5)	338
挿図207	西谷池1号窯跡	灰原出土須恵器(1)	339
挿図208	西谷池1号窯跡	灰原出土須恵器(2)	340
挿図209	西谷池1号窯跡	灰原出土須恵器(3)	341
挿図210	西谷池1号窯跡	灰原出土須恵器(4)	343
挿図211	西谷池1号窯跡	周溝・平坦面上出土須恵器	344
挿図212	西谷池1号窯跡	谷部出土須恵器(1)	346
挿図213	西谷池1号窯跡	谷部出土須恵器(2)	348
挿図214	西谷池1号窯跡	谷部出土須恵器(3)	349
挿図215	西谷池1号窯跡	須恵器法量グラフ	350
挿図216	西谷池2号窯跡	調査前地形測量図	359
挿図217	西谷池2号窯跡	調査後地形測量図	360
挿図218	西谷池2号窯跡	窯体・周溝・灰原土層堆積状況図	361
挿図219	西谷池2号窯跡	窯体遺構図	373
挿図220	西谷池2号窯跡	焚口部遺物出土状況	364
挿図221	西谷池2号窯跡	窯体内床面出土須恵器(1)	366
挿図222	西谷池2号窯跡	窯体内床面出土須恵器(2)	367
挿図223	西谷池2号窯跡	窯体内出土須恵器(1)	369
挿図224	西谷池2号窯跡	窯体内出土須恵器(2)	370
挿図225	西谷池2号窯跡	窯体内出土須恵器(3)	372
挿図226	西谷池2号窯跡	窯体内出土須恵器(4)	373
挿図227	西谷池2号窯跡	灰原出土須恵器(1)	374
挿図228	西谷池2号窯跡	灰原出土須恵器(2)	376

挿図229	西谷池2号窯跡 灰原出土須恵器(3)	377
挿図230	西谷池2号窯跡須恵器法量グラフ	378
挿図231	寄合谷窯跡調査地区位置図	388
挿図232	寄合谷窯跡遺構全体図	389
挿図233	寄合谷窯跡竈体・周溝・灰原土層堆積状況図	391
挿図234	寄合谷窯跡 竈体・周溝遺構図	392
挿図235	寄合谷窯跡 竈体遺構図	393
挿図236	寄合谷窯跡 竈体内土層堆積状況細部図	394
挿図237	寄合谷窯跡須恵器法量グラフ	399
挿図238	寄合谷窯跡 竈体内床面直上出土須恵器	400
挿図239	寄合谷窯跡 竈体内出土須恵器	401
挿図240	寄合谷窯跡 灰原出土須恵器(1)	402
挿図241	寄合谷窯跡 灰原出土須恵器(2)	403
挿図242	寄合谷窯跡 灰原出土須恵器(3)	404
挿図243	萩ノ尾窯跡調査地区位置図	411
挿図244	萩ノ尾窯跡遺構全体図	413
挿図245	萩ノ尾窯跡竈体遺構図	414
挿図246	萩ノ尾窯跡土壌土層断面図	415
挿図247	萩ノ尾窯跡須恵器法量グラフ	420
挿図248	萩ノ尾窯跡 竈体内出土須恵器(1)	422
挿図249	萩ノ尾窯跡 竈体内出土須恵器(2)	423
挿図250	萩ノ尾窯跡 竈体内出土須恵器(3)	424
挿図251	萩ノ尾窯跡 灰原出土須恵器	425
挿図252	木戸窯跡調査地区位置図	430
挿図253	木戸窯跡遺構全体図	431
挿図254	木戸窯跡竈体・周溝・灰原土層堆積状況図	432
挿図255	木戸窯跡 竈体・周溝遺構図	433
挿図256	木戸窯跡 竈体遺構図	435
挿図257	木戸窯跡 竈体焚口部須恵器出土状況図	436
挿図258	木戸窯跡 竈体焚口部・燃焼室出土須恵器	438
挿図259	木戸窯跡 竈体内出土須恵器	439
挿図260	木戸窯跡 竈体焚口出土須恵器	440
挿図261	木戸窯跡 周溝出土須恵器	441

挿図262	木戸窯跡須恵器法量グラフ	442
挿図263	木戸窯跡 灰原出土須恵器(1)	444
挿図264	木戸窯跡 灰原出土須恵器(2)	445
挿図265	木戸窯跡 灰原出土須恵器(3)	446
挿図266	木戸窯跡 灰原出土須恵器(4)	447
挿図267	木戸窯跡 灰原出土須恵器(5)	448
挿図268	木戸窯跡 灰原出土須恵器(6)	449
挿図269	木戸窯跡 灰原出土須恵器(7)	450
挿図270	木戸窯跡 灰原出土須恵器(8)	451
挿図271	木戸窯跡 灰原出土須恵器(9)	452
挿図272	木戸窯跡 灰原出土須恵器(10)	453
挿図273	木戸窯跡 表土出土須恵器(1)	454
挿図274	木戸窯跡 表土出土須恵器(2)	455
挿図275	木戸窯跡 灰原・表土出土須恵器(1)	458
挿図276	木戸窯跡 灰原・表土出土須恵器(2)	459
挿図277	木戸窯跡 灰原・表土出土須恵器(3)	460
挿図278	木戸窯跡 灰原・表土出土須恵器(4)	461
挿図279	木戸窯跡 灰原・表土出土須恵器(5)	462
挿図280	木戸窯跡 灰原・表土出土須恵器(6)	463
挿図281	木戸窯跡 灰原・表土出土須恵器(7)	464
挿図282	木戸窯跡 その他の地点出土の須恵器	466
挿図283	木戸窯跡 底部圧痕拓影	468
挿図284	木戸窯跡 ヘラ記号拓影	469
挿図285	相野窯跡群窯別器種組成図	489
挿図286	相野窯跡群窯別器種清長図	491
挿図287	杯A法量(1)	492
挿図288	杯A法量(2)	493
挿図289	杯B法量	494
挿図290	皿法量	495
挿図291	蓋法量	495
挿図292	碗A法量(1)	496
挿図293	碗A法量(2)	497
挿図294	碗A法量(3)	498

挿図295	碗B法量(1)	499
挿図296	碗B法量(2)	500
挿図297	碗B法量(3)	501
挿図298	碗C法量(1)	502
挿図299	碗C法量(2)	503
挿図300	碗C法量(3)	504
挿図301	碗D法量	505
挿図302	杯A・皿・蓋の法量領域	507
挿図303	杯B・碗A・碗Bの法量領域	508
挿図304	碗C・碗Dの法量領域	509
挿図305	へら記号の消長図	513
挿図306	相野窯跡群と周辺の窯跡群分布図	518
挿図307	周辺窯跡群の器種消長図	519
挿図308	鎌窯跡群須恵器器種組成グラフ	521
挿図309	相野窯跡群と周辺窯跡群の小型器種組成グラフ	522
挿図310	相野窯跡群と支群	523

表 目 次

表 1	近畿自動車道舞鶴線三田工事区埋藏文化財調査遺跡一覽表	9
表 2	相野窯跡群発掘調査工程表	14
表 3	周辺遺跡地名表	19
表 4	昭和60年度確認調査一覽表	25
表 5	古城山 1 号窯跡出土土器觀察表	96~102
表 6	古城 1 号窯跡出土土器觀察表	143~155
表 7	古城 2 号窯跡出土土器觀察表	161
表 8	古城 3 号窯跡出土土器觀察表	161
表 9	古城 4 号窯跡出土土器觀察表	161
表 10	古城 5 号窯跡出土土器觀察表	176~178
表 11	向上・古城 1 号窯跡出土器種一覽表	236
表 12	向上・古城 2 号窯跡出土器種一覽表	238
表 13	向上・古城 1 号窯跡窯体内出土土器觀察表	242
表 14	向上・古城 1 号窯跡灰原出土土器觀察表	243~248
表 15	向上・古城 1 号窯跡周溝出土土器觀察表	249
表 16	向上・古城 2 号窯跡窯体内出土土器觀察表	250
表 17	向上・古城 2 号窯跡灰原出土土器觀察表	250・251
表 18	向上・古城 2 号窯跡周溝出土土器觀察表	252
表 19	3 号遺構出土土器觀察表	253
表 20	4 号遺構出土土器觀察表	253
表 21	中池ノ内 1 号窯跡出土土器觀察表	306~318
表 22	西谷池 1 号窯跡出土土器觀察表	351~357
表 23	西谷池 2 号窯跡出土土器觀察表	379~385
表 24	寄合谷窯跡窯体床面直上出土土器觀察表	405
表 25	寄合谷窯跡窯体内埋土内出土土器觀察表	405
表 26	寄合谷窯跡灰原出土土器觀察表	406・407
表 27	萩ノ尾窯跡出土土器觀察表	426~428
表 28	木戸窯跡出土土器觀察表	470~484
表 29	相野窯跡群 窯別須惠器器種組成一覽表	486
表 30	相野窯跡群ヘラ記号集成表	511・512

表31	水ヶ下支群の須恵器の器種	515
表32	相野窯跡群窯体一覧表	516



挿図1 相野窯跡群の位置

第1章 はじめに

第1節 相野窯跡群の発見

兵庫県三田市相野地域は田撰津国の北西端に位置し、「日本六大古窯」丹波焼発祥の地（現在の多紀郡今田町）三本峠と近く、平安時代中期の須恵器生産が平安時代末の中世陶器成立と深く関わっていると考えられてきており、窯業生産の研究が盛んに進められていた。

中でも、所謂杉本コレクションの丹波焼収蔵品の中に三田市花折採集の須恵器があり、相野須恵器窯跡群の存在が報告されている。須恵器は蓋杯・壺などで平安時代中期を考えるものであった。相野荘園の谷の奥でも須恵器片が採集されていることから、当初、相野須恵器窯跡群は相野川東の丘陵に位置すると考えられていた。

一方、西の古城山山麓周辺に窯跡の灰層が露出しており、採集資料などから古城山周辺にも須恵器窯跡が広がっていることが判っていた。そして、西相野地区のほ場整備工事と宅地開発工事に伴い2箇所須恵器を採集し、窯跡の存在を確認した（西相野A・B窯跡）²²ことから、相野の須恵器窯跡群の調査に期待される事が大きかった。

なお、三田地域の須恵器生産については、「青野ダム」末地区の報告の中で歴史の変遷が考察されているが、ここでは末古窯跡群・平方古窯跡群・木器古窯跡群・相野古窯跡群・見比古窯跡群について少しふれてみることにする²³。

■末古窯跡群（18基）

〔位置〕青野川流域……末の集落を中心

5世紀末から郡塚窯跡から須恵器生産を開始し、奈良時代から平安時代にかけて最盛期を迎え貝谷窯跡で須恵器生産を止め、10世紀に入ると一旦須恵器生産が途絶え、12世紀末に井ノ方窯跡で生産が開始されるが、中世須恵器の生産となり椀・皿・鉢を主として生産する。

■平方古窯跡群（3基）

〔位置〕

6世紀後半から須恵器生産を開始し、6世紀代で操業を止める。

■木器古窯跡群（4基）

〔位置〕三田市東部羽東川流域

奈良時代から平安時代にかけて4基の窯で須恵器生産がされている。

■相野古窯跡群（29基）

〔位置〕三田市西部相野川流域……相野集落を中心

北の地区に蓋杯・壺・鉢・瓶等種類の豊富な古代須恵器生産の名残りを止め、糸切り・施釉

陶器の模倣から新器種の生産に影響された須恵器窯跡が多く展開し、薪を求めて南へ窯場を移動し、下相野の木戸窯跡で椀・杯（皿）を中心に須恵器生産を終了している。

末古窯跡群からの陶工の移動を考えるものか、官の窯業生産が律令制の崩壊と機をいつに、私的荘園経済のなかで新たな土地で操業が開始されたものか俄に判断しかねるが、操業停止も神出窯を代表する東播系須恵器窯跡群の成立を待たずに行われることは不思議である。

■見比古窯跡群（3基？）

〔位置〕三田市北東部見比峠

末古窯跡群の井ノ方窯跡と同じ器種を生産する窯跡群で12世紀末から13世紀初頭にかけて操業されている。

ところで、丹波焼の相野周辺の操業は現在のところ、近世になって初めて播鉢専業の連房式登り窯が漸く操業を開始する。例えば高ヶ尾窯跡・相野釜屋窯跡・下相野釜屋窯跡・四辻窯跡などがある。下相野釜屋窯跡の物原の一部が昭和60年度に調査され、17世紀前半から18世紀後半にかけて長い操業が認められた。ただ、この摂津地域への丹波焼の窯場の拡散は17世紀第1四半期で、各地域（西脇市鹿野窯跡や水上郡大部谷窯跡と春日町大路窯跡など）とはほぼ同じである。ただ、丹波で中世室町時代の窯場が多く発見されず、製品は多く出土しており、早い時期の窯場の拡散を摂津地域へも考えられないだろうかと言う疑問がある。そこで、丹波焼の胎土分析等を手掛かりに推測は試みてはいるが、現在まだ解決にいたっておらず⁴⁾、古丹波成立への視点を含めた平安時代相野須恵器窯跡群の調査ともども期待されるものが大きい。

〔註〕

- 1) 藪内 清徳 『立杭窯の研究—技術・生活・人間』 恒里社 1955
杉本 捷夫 『改訂 丹波の古窯』 兵庫県陶芸館 1969
中西 通 『古丹波』 丹波古陶館 1971
河原 正彦 『丹波』 『陶磁体系』 9巻 平凡社 1975
橋崎 彰一 『丹波』 『日本陶磁全集』 11 中央公論社 1977
大槻 伸 『丹波とその周辺』 『日本やきもの集成』 7 近畿11
- 2) 兵庫県教育委員会、三田市教育委員会の調査
- 3) 吉田 昇 『青野ダム周辺における須恵器生産について』 『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)』 兵庫県教育委員会 1988
- 4) 岡崎 正雄・三辻 利一他 『中尾城跡』 兵庫県教育委員会 1989

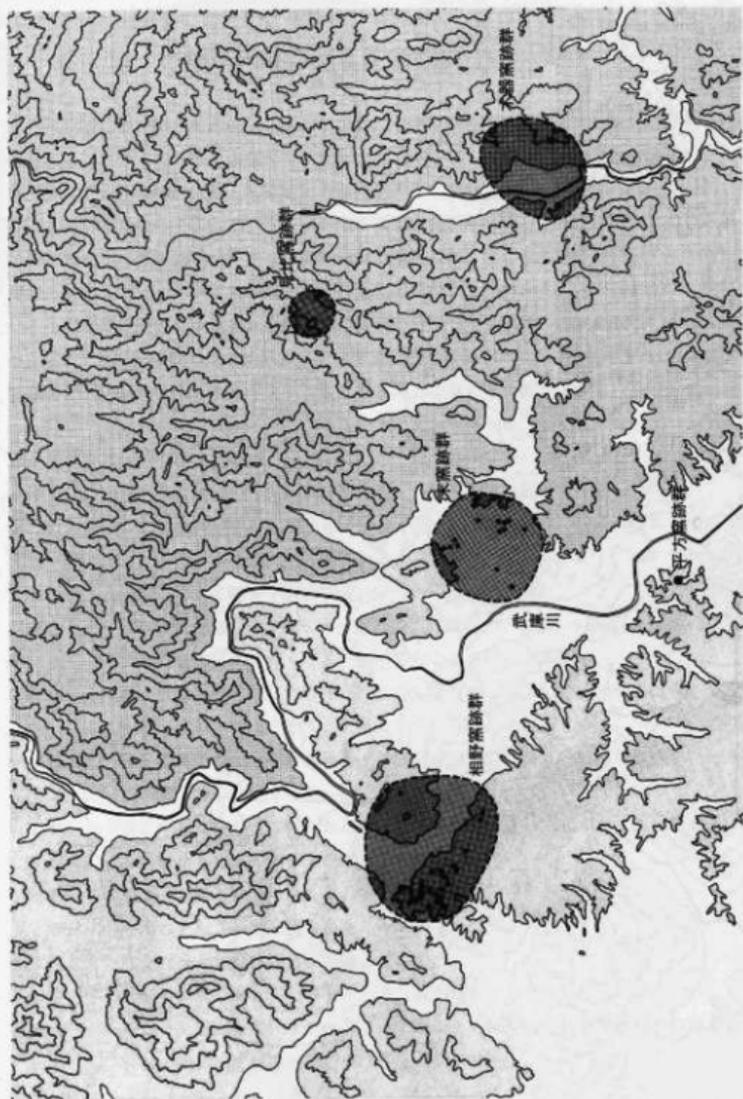


插图 2 三田市内須賀器諸群分布图

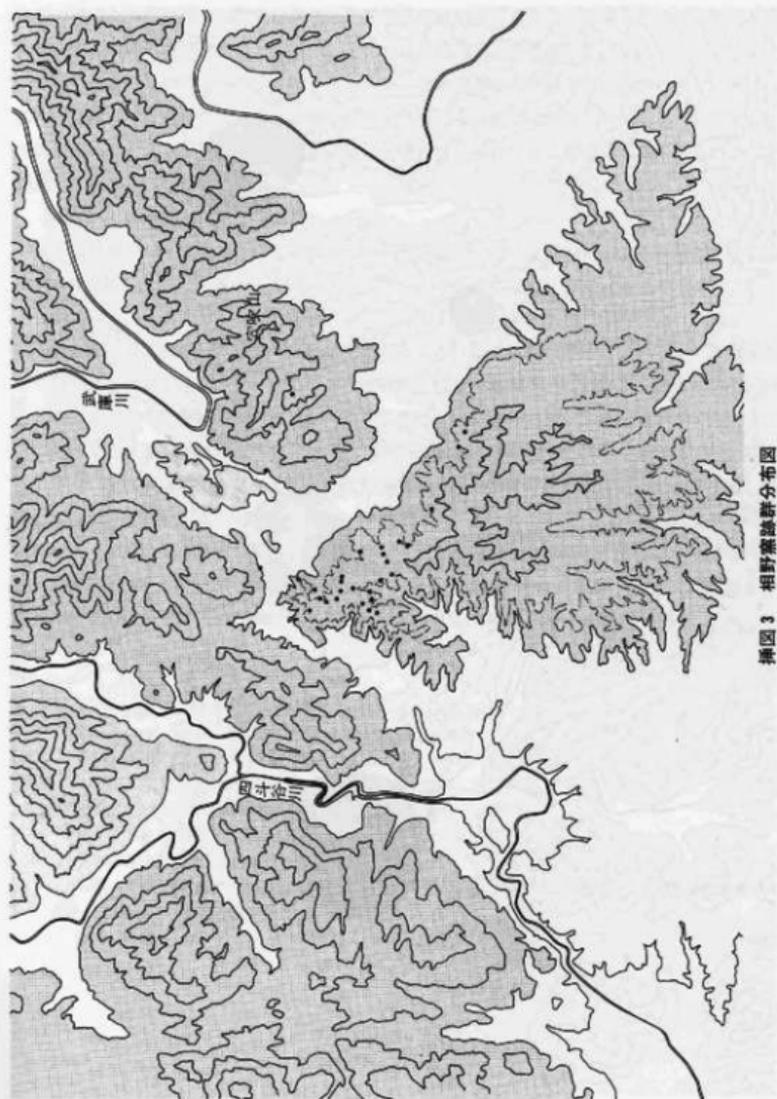


图 3 三河地区地形图

第2節 相野窯跡群の須恵器の器種について

三田地域は摂津国の北西隅に位置しており、中でも末地区では古墳時代5世紀末葉から須恵器を生産している。6世紀末葉から7世紀にかけては末・西野上地区の窯跡が知られている。奈良時代から平安時代は末・木器地区の窯跡がある。末地区の須恵器生産の現在の所、9世紀をもって終焉するとされている。末の須恵器生産を継承するかのように相野地区での須恵器生産が9世紀末葉から開始され、11世紀初頭で現在の所、生産を止める。続いて末・見比地区で須恵器生産を行うのは12世紀末葉から13世紀初頭にかけてである。

ここで相野窯跡群で生産される須恵器の器種形態について分類の基準を示すことにする。但し、相野窯跡群は平安時代9世紀末葉から操業を開始し、11世紀初頭で終焉すると考えており、器種の形態消長と法量の変化を念頭に入れた分類となることを断っておく。

1. 器種分類

須恵器の器種は奈良・平安時代前期を通じて、供膳・貯蔵の形態で分類している。

相野窯跡群では、供膳形態として杯A・杯B・蓋・皿・椀があり、貯蔵形態として壺・鉢・平瓶・甕・羽釜、そしてその他に碗・形像がある。

ここで、各器種について細分をおこなう。

杯A……………本来は底が平らで、皿と比べると器高が高く、かつ皿より器高/口径指数が高い。

新しく皿と区別が無くなり、底の形などが多様化する。

杯B……………杯Aに輪高台が貼り付けられた形で、高台の高さは0.5~0.6cmで椀Aより低く直線的に立つ。椀Aの出現とともに、この器種は消滅していく。

蓋A……………杯Bの蓋で合わせて使われる。つまみが消失しており、器高が低い。杯Bの器種の消滅とともに無くなる。

蓋B……………壺Cの蓋で合わせて使われる。つまみを持ち、直口に合うように器高が高い。

皿A……………杯Aと比べ器高の低いもので、平底である。

皿B……………端反り口縁で高台のつくもので、高台の形で細分する。

皿B1…平高台をもち緑釉陶器を模倣したもの。

皿B2…輪高台をもち灰釉陶器を模倣したもの。

皿C……………耳皿で平高台をもち、新しくなると高台が低くなる。

椀A……………新しく、杯Bと交代するかのように出現する椀で、皿B2の端反り口縁をもつ。

杯Bと異なって輪高台は1.0~1.2cmと高い。

椀B……………平高台をもつ椀。平高台の形状が多様である。

- 碗C………体部に沈線が施される碗で、奈良時代からの稜碗の系統を引くもので、11世紀の東播系須恵器碗に継承される器種である。沈線碗とも言われる。
- 碗C 1…平高台をもつ。へら切りの底である。底の作り方が多様化する。
- 碗C 2…糸切り高台をもつ。相野窯跡群の須恵器の内、轆轤からの切り離しに回転糸切り手法が見られるのはこの器種のみで、早くなくなる。
- 碗C 3…輪高台をもつ。
- 碗D………体部に貼り付け突帯をもつ碗で、奈良時代からの稜碗の系統を引くもの。
- 碗D 1…平高台をもつ。
- 碗D 2…輪高台をもつ。
- 壺A………体部に耳の付かない壺で、完形に復原する資料がない。
- 壺A 1…丸胴のもの。
- 壺A 2…水瓶のように頸部が長いもの。
- 壺B………体部に耳が付き、双耳壺といえるもの。
- 壺B 1…体部に沈線・突帯がない長胴のもの。
- 壺B 2…体部に沈線が1、2条あり、そこに耳を付ける長胴のもの。
- 壺B 3…体部に1条の突帯と1、2条の沈線があり、そこに耳を付ける長胴のもの
- 壺B 4…体部に2条の突帯があり、そこに耳を付ける長胴のもの。
- 体部のタタキ整形をナデ調整で丁寧に消すこと(a)が、普通であるがタタキを残したままのもの(b)があり、壺B 4 a・壺B 4 bとして区別する。
- 壺B 5…体部に2条の突帯があり、丸胴のもの。
- 壺C………直口の短頸壺で体部の調整で細分する。
- 壺C 1…体部が丸いもので、タタキを丁寧に消すもの(a)と、タタキを残したままのもの(b)があり、壺C 1 a・壺C 1 bとして区別する。
- 壺C 2…体部が丸いもので、2条の突帯があり、タタキを残すもの。
- 平瓶………器高の低い体部に広口が片側に寄って付き、把手が付くもの。
- 鉢………口の広い鉢で2形態ある。
- 鉢A…輪高台でくの字に口が開く形で、片口のもの。
- 鉢B…底が丸く、鉄鉢形のもの。
- 甕………丸底のもの。
- 小型甕………土師器甕を模倣した小型のもの。
- 羽釜………丸底で口縁のやや下がった位置に銜を付けたもの。まれに輪高台の付くものがある。
- 碗………風字碗で脚が2本付くが、脚が独創的なものもある。

塑像………人形の習作かもしれないもの。

2. 須恵器の整形と調整技法

器種分類のところでその分類の基準に使用しているが、須恵器の整形及び調整の技法が、相野窯跡群出土須恵器の特徴となっている。

小型の製品は轆轤水挽整形からナデ調整で仕上げ、ヘラを用いて轆轤の回転力で切り離すことを特徴としている（杯A・碗B）。少し乾燥させ、輪高台を貼りつける（杯B・碗A・碗C・碗D・皿）。ナデ調整で仕上げる際に底見込みを一方の指ナデ仕上げをするものがある。

ナデ………皮や布を用い、轆轤のを利用した回転ナデと指で仕上げる指ナデがある。

中型の製品は胴部を轆轤水挽整形からナデ調整で仕上げ、口頭部と接合する（壺）。

また、轆轤を用いてタタキ技法で粘土を伸ばし、積み上げ整形と轆轤整形を使用することがある（壺B4b）。

大型の製品は胴部は分割してつくる。粘土紐をタタキ整形で伸ばし、積み上げる。底は最後にタタキ伸ばし整形を施す。

3. ヘラ記号とヘラ書

小型の杯A・杯B・碗A・碗B・碗C・皿と中型の壺にヘラによる記号と字や絵がみられる。記号としたのは字や絵と違うもので、複数の個体に共通するものをヘラ記号とした。字や絵をヘラ書とした。

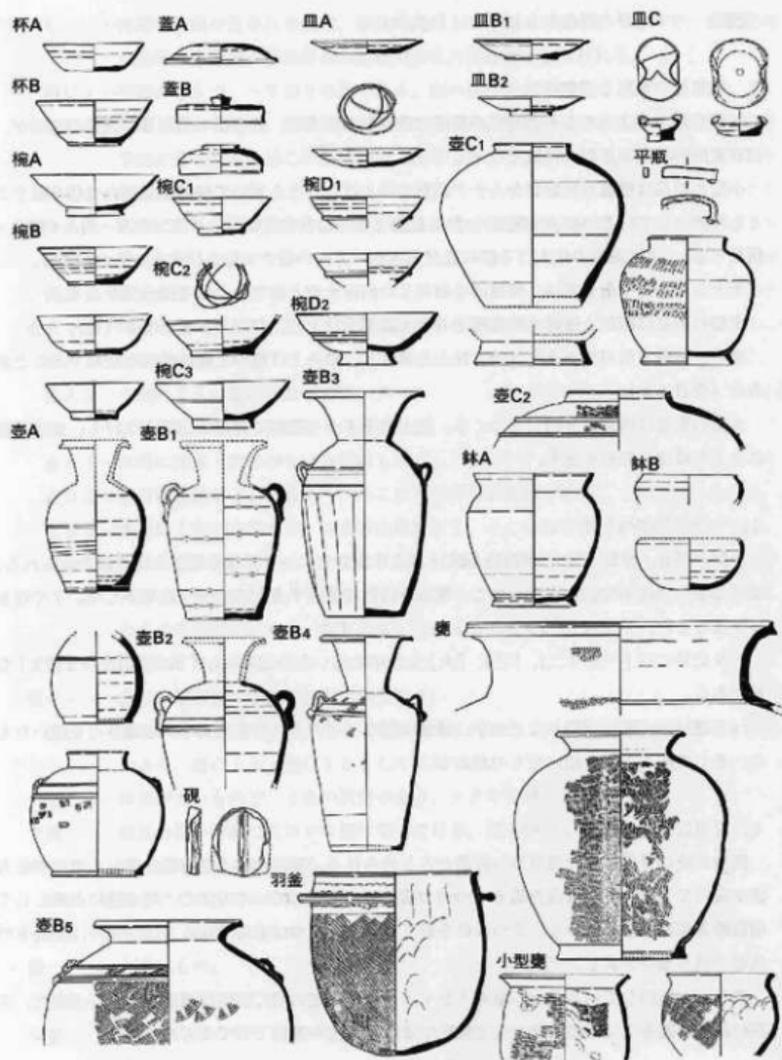
ヘラ記号には「一」、「二」、「三」、「大」など字に近いものと「×」、「渦文」、「Σ」、「雷文」などがある。

ヘラ書には「田」、「用」などの字、緑釉陶器などにみられる花卉文やお地藏さんを描いたもの、そして蛙?などを描いたものがある。

4. 窯焼成と須恵器

窯焼成時に付加された須恵器の特徴がみとめられる。窯詰め時の須恵器を重ねて焼成する方法が復元できる。1つは須恵器を一つずつ藁で包んで重ねていく方法で、焼成後に火礫として備前焼き等に現在も伝わる。2つは砂を敷き重ねる。3つは直に重ねる方法があり、重焼きの状態に残る場合がある。

窯は床が傾斜しているため、重焼きをするために床との間に割れた須恵器片、石、また、完形の杯Aの底を上にして焼台として使用するなど工夫が遺物としてみられる。



挿圖 4 須惠器器種分類圖

第2章 調査の経緯

第1節 近畿自動車道舞鶴線に伴う調査

昭和52年度に計画路線が発表された近畿自動車道舞鶴線は、兵庫県下の1市5町45kmを通過する。日本道路公団と県教育委員会が協議を重ね、昭和54年度に三田地域の全線分布調査を開始した(美囊郡吉川町吉川J C～三田市日出坂峠)。一部路線の発表が遅れた吉川町と三田市の一部は、昭和55年度に分布調査を補完して終了した。三田市域は須恵器窯跡他16箇所、吉川町域は炭窯(近世以降5箇所)を調査の対象とした。

最終的に確認調査・全面調査した遺跡は29箇所のにほり、古墳2箇所・須恵器窯跡12箇所・山城跡1基・炭窯3箇所を発掘することになった。

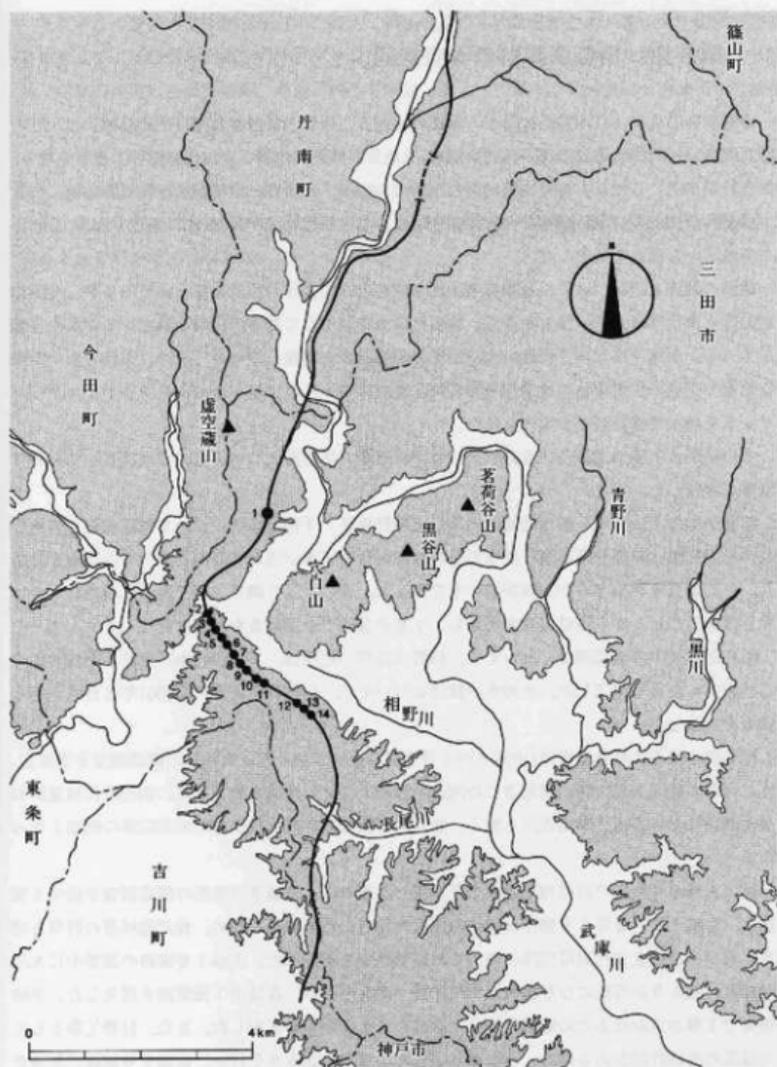
表1 近畿自動車道舞鶴線 三田工事区埋蔵文化財調査遺跡一覧表

番号	遺跡名称	所在地	分布調査番号	確認調査番号	遺跡種類	時代	全面調査
1		三田市西相野	S54 A	Na7(S60)	散布地		
2		三田市西相野	S54 B	Na8(S60)	散布地		
3	古城1号窯跡	三田市西相野	S54 C	Na9(S61)	窯跡	平安	S61-㉑
4		三田市西相野	S54 D	Na10(S60)	散布地		
5		三田市西相野	S54 E	Na11(S61)	散布地		
6		三田市西相野	S54 F	Na12(S60)	散布地		
7		三田市西相野	S54 G	Na13(S60)	散布地		
8	中池ノ1号内窯跡	三田市上相野	S54 H	Na14(S60)	窯跡	平安	S61-㉒
9	西谷池1号窯跡	三田市上相野	S54 I	Na15(S60)	窯跡	平安	S60-㉓
10		三田市上相野	S54 J	Na16(S60)	散布地		
11		三田市下相野	S54 K	Na17(S60)	散布地		
12	萩ノ尾窯跡	三田市下相野	S54 L	Na18(S59)	窯跡	平安	S59-㉔
13		三田市下相野	S54 M	Na19(S60)	散布地		
14	中尾城跡	三田市下相野	S54 N	Na20	山城	室町	S61-㉕
15		三田市上内神	S54 O	Na21	散布地		
16		三田市上内神	S54 P	Na22	散布地		
17		吉川町福吉	S55 Q	Na1	炭窯	江戸	
18		吉川町福吉	S55 R	Na2	炭窯	江戸	S59
19		吉川町福吉	S55 S	Na3	炭窯	江戸	S59
20		吉川町福吉	S55 T	Na4	炭窯	江戸	

番号	遺跡名称	所在地	分布調査番号	確認調査番号	遺跡種類	時代	全面調査
2 1		吉川町福吉	S55 U	No5(S60)	墓跡	江戸	
2 2	高川古墳群	三田市藍本	[追加]	STA160(S60)	古墳	古墳	S60-①
2 3		三田市藍本	[追加]	藍西(S60)	散布地		S60
2 4	西谷池 2号竈跡	三田市上相野	[付帯工事]	(S60)	竈跡	平安	S60-③
2 5	下相野釜屋竈跡	三田市下相野	[付帯工事]		竈跡	江戸	S60
2 6		三田市下相野	[付帯工事]	尾崎池(S60)	散布地		
2 7	木戸竈跡	三田市下相野	[追加]		竈跡	平安	S60-⑬
2 8	寄合谷竈跡	三田市上相野	[追加]	STA65+60	竈跡	平安	S61-⑩
2 9	向上・古城 1号竈跡	三田市西相野	[追加]		竈跡	平安	S61-⑤
3 0	向上・古城 2号竈跡	三田市西相野	[追加]		竈跡	平安	S61-⑥
3 1	古城 2号竈跡	三田市西相野	[付帯工事]		竈跡	平安	S61
3 2	古城 5号竈跡	三田市西相野	[付帯工事]		竈跡	平安	S61-④
3 3	古城山 1号竈跡	三田市大川瀬	[追加]		竈跡	平安	S61-②

【参考文献】

1. 兵庫県文化財調査報告書第67冊
 「中尾城跡」 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 1989
2. 兵庫県文化財調査報告書 第97冊
 「高川古墳群」 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 1991



挿図5 近畿自動車道舞鶴線と調査道跡分布図

第2節 相野窯跡群の調査経過

分布調査の成果と日本道路公団との協議の過程で、相野古窯跡群の存在する全域に渡っての確認調査は一斉にすることが不可能なため、土地買収計画の進展と立木伐採計画の遂行を睨み、調査計画が立てられた。相野古窯跡群の三田市大川瀬・西相野・上相野・下相野各地域に位置する窯跡が調査の対象となるが、昭和59年になって上相野地区が纏まって調査が可能となり、この地区から調査を開始した。

窯跡の調査方法について、遺物分布状況と地形をみて窯体の位置を探るのであるが、今回は奈良国立文化財研究所の協力を得て、地磁気探査法を利用して窯体の位置を確定する作業を実施している。中池ノ内窯跡と松池・大池地区の確認調査を実施している。また、遺物分布が希薄な地点や窯場の作業場他の遺構が考えられる地点については、幅1mのトレンチか2×2mグリッドを組んで確認調査が始められた。

その結果、工事用道路及び道路改良で急がれる萩ノ尾窯跡については、全面調査を昭和59年度冬に実施した。

昭和60年に入ってから西相野地区の南、上相野地区・下相野地区について確認調査を実施した。その結果、ほ場整備事業と併せて池の改修が付帯工事が急がれる西谷池の全面調査を計画し、冬に調査を実施するが、西谷池の水を落とした後の立入り調査で別な地点に須恵器・窯体片を採集したことから確認調査を実施し、2基の窯跡で全面調査を同時に行った。

昭和59・60年の確認調査においても、相野窯跡群の範囲は、下相野の木戸窯跡が南限であることをあらためて確認した。その木戸窯跡については、昭和60年度末の昭和61年2月過ぎから調査を実施した。

昭和61年は春に寄合谷窯跡・中池ノ内1号窯跡の全面調査と古城窯跡他の確認調査を実施し、夏には春の確認調査で新に発見された向上・古城1、2号窯跡を調査した。西相野古城窯跡の全面調査については工事用道路も無く、また未買収地区が北に広がるため秋以降の調査となった。

秋に古城1号窯跡の灰原の全面調査を実施した折りに、古城2号窯跡の確認調査を併せて実施し、古城1号・2号とも窯体は隣接の国有林地内に考えられるため、神戸営林署の許可を得て、再び奈良国立文化財研究所の協力で地磁気探査を実施した。古城1号窯跡の調査中に大川瀬地区の立入りが可能になり機械立木伐採後、踏査を行い、古城山1後窯跡を発見した。不時発見で工事が急がれるため協議を行い、継続して全面調査を実施した。また、付帯工事として古城池の改修計画があるため、水が落とされた時点で、立入りをを行い、古城5号窯跡の灰原を発見した。これも急ぐため全面調査を冬に行った。

それぞれの窯跡の窯体調査が済んだ時点で窯場操業の年代測定のため、富山大学広岡研究室に依頼して、熱残留磁気測定のスAMPLINGを行った。昭和60年度は木戸窯跡、西谷池1号窯跡、昭和61年度は寄合谷窯跡、中池ノ内1号窯跡、向上・古城1、2号窯跡と古城山1号窯跡でスAMPLINGを行った。

調査が終了した窯跡については、保存ができず壊されたが、窯体調査が範囲外で残された窯跡と分布調査で新に路線外に見つかった窯跡は現況保存されている。

更に隣接する大川瀬地区の開発計画に伴い、水ケ下窯跡群の発掘調査が三田市教育委員会で実施され資料が増えつつある。

第3章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

遺跡の位置する三田市西北部は、中央を武庫川が北西から南東方向に貫流し、北を険しい丹波山地に遮られる。丹波山地は標高400～600mの山地で、地質は流紋岩類の溶結凝灰岩類や溶岩から成っている。これらの岩類は白亜期後期の有馬層群と判断され、丹波山地以南にも基盤層として広く分布している。この山塊からは武庫川・青野川・羽束川などが流れ出て、山麓部には水河期に形成された緩斜面である、鏡層面が分布する。

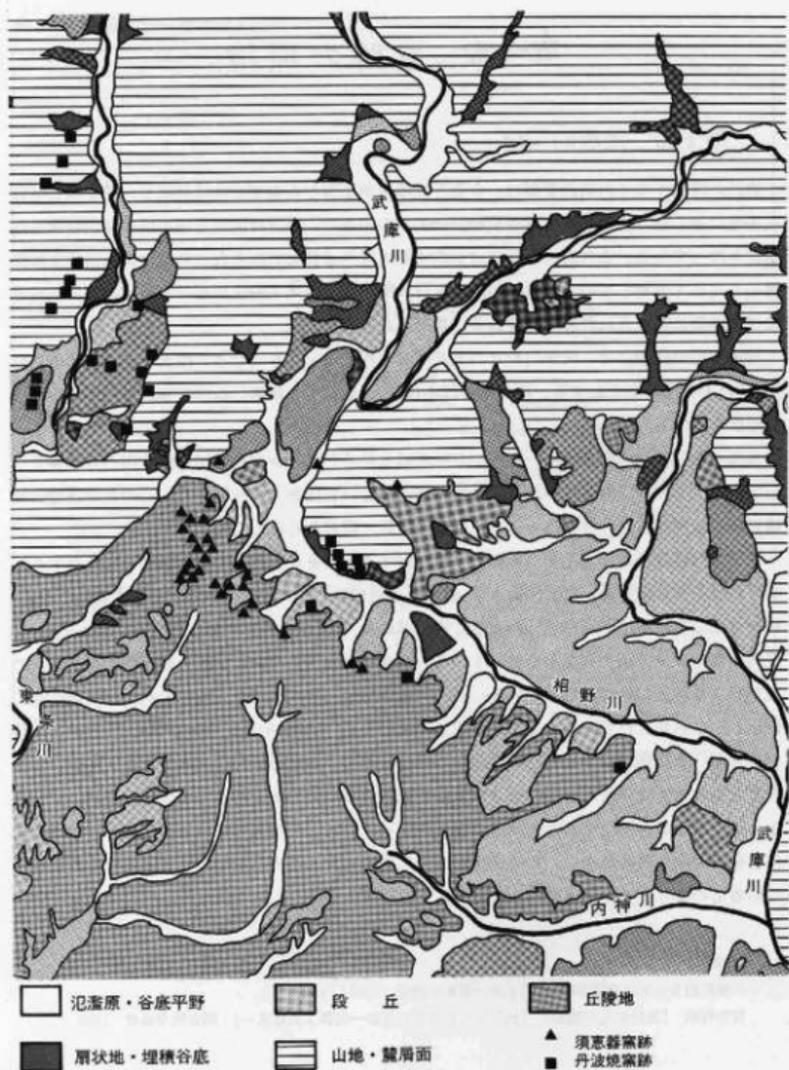
丹波山地の南側には、武庫川やその支流である相野川・青野川などの浸食によって形成された長坂・末段丘群が存在する。段丘面の標高は200m前後で、地質は流紋岩類および中新世の神戸層群から成る。

長坂・末段丘群の南西端は、相野から赤松峠を結んだラインが武庫川と加古川の分水界となっている。この分水界より西側は比較的起伏の少ない丘陵部となっている。この吉川丘陵は東播丘陵の東端を占め、地質は主に神戸層群の砂岩・礫岩から成っている。

さて相野古窯跡群は、三田市西相野・上相野・下相野を中心とした相野川流域に所在する。相野川は現在武庫川の一支流であるが、藍本庄と西相野の間に谷中分水界が存在することから、以前はここを武庫川が流れていたと考えられている。相野川の両岸には河岸段丘がよく発達し、現河床から5～25mの比高差を保っている。段丘が形成されたあと開析が進んだ結果、多数の支谷が入り込んだ地形を呈している。この開析谷によって刻まれた丘陵の斜面が、須恵器窯の用地として利用されている。窯跡の標高は西相野1・2号窯跡や花折窯跡が若干低く200m前後であるが、その他はおおよそ220～240mの間に収まる。窯跡の分布は武庫川水系に向かって開放した谷に多く見られもの、ホッ下支群が東桑川の支流である湯谷川の支谷に展開しているように、分水界を越えて加古川水系にまで広がっていることが判っている。同様の地形は、北は西相野の大川瀬断層から、南は内神川の間に認められるため、窯跡の分布範囲は現在知られているものより拡大する可能性がある。

【参考文献】

- 兵庫県都市住宅部政策課編集 『土地分類基本調査 三田』 1985
青木智哉 『遺跡周辺の地形』 『兵庫第三田市清口遺跡—北摂工業地区—』 財古代学協会 1986



挿図6 地形分類図

第2節 歴史的環境

相野古窯跡群が存在する三田市西北部は、従来それほど多くの遺跡が知られている地域ではなかった。しかしここ10数年の間に北摂ニュータウン北地区（テクノパーク）建設事業、近畿自動車道舞鶴線建設事業および圃場整備事業などに伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、地域の様相が次第に明らかになりつつある。

まず旧石器時代の遺跡としては、相野川右岸の丘陵上に立地する溝口遺跡があり、調査の結果、瀬戸内地方と丹波地方のどちらにも属さない特異な石器群が検出されている。同遺跡からは縄文時代の石鏃・楔形石器も出土しており、キャンプサイト的な性格が推定されている¹¹⁾。

弥生時代の遺跡はあまり明確に調査された例はないが、藍本庄遺跡から多量のサヌカイトの剥片が出土しており¹²⁾、付近に集落の存在が考えられる。

古墳時代は後期になってから小規模な古墳群が形成されるようである。調査された古墳は高川古墳群・東家地古墳などごく僅かではあるが、高川1号墳から金銅装鈴、同2号墳から銀象嵌大刀が出土する¹³⁾など、重要な発見がなされている。いずれの古墳も横穴式石室を主体部としており、この地域の古墳の大部分も同様であると考えられる。また田中・一ノ坪遺跡や東本庄・溝ノ上遺跡では、6世紀末～7世紀にかけての掘立柱建物跡などが見つかっている。

古代から中世には藍荘などの荘園が置かれ、圃場整備以前には相野・藍本付近に水田条里をよく観察することができた。藍岡山城主の藍氏は、藍荘の荘官を代々務めたと言われており、中尾城跡もその一族の森鼻氏との関係を言及されている城の一つである¹⁴⁾。

次に相野古窯跡群に関連して、窯業生産の流れを概観する。三田市域では古くから窯業生産がおこり、特に武庫川左岸の支流である青野川流域の末の辺りは、地名の「スエ」が示すように、三田盆地における須恵器生産の一中心地であった。これまでに18基以上の存在が確認されており、そのうちの15基が兵庫県教育委員会によって発掘調査されている¹⁵⁾。その中で最も古い郡塚1号窯跡は中村福年の1期後半にまで遡り、県下でも最古の窯跡の一つである。末古窯跡群の操業がピークを迎えるのは8世紀後半～9世紀初頭の頃で、調査された15基のうち12基までがこの時期に含まれる。次に続く貝谷窯跡は9世紀末～10世紀初頭のもので、ちょうど相野古窯跡群の操業時期と重なる点が注目される。最も新しい井ノ方窯跡は12世紀末～13世紀初頭のもので、すでに操業の中心が東播磨地方に移っている時期にも三田盆地で土器が焼かれていたことを示している。また平井遺跡、溝ノ尾遺跡、溝向遺跡、井ノ方遺跡などは窯業生産に従事した工人の集落と考えられ、そこでは6世紀後半～13世紀前半の各時期の遺構・遺物が出土していることから、窯体の見つからない時期にも須恵器生産は継続していたと考えられる。従って、実際の窯跡の基数は、確認できているものの数倍に達するものと思われる。

武庫川左岸にはこの他にも、塩ヶ谷窯跡、木器窯跡、見比窯跡など小規模な窯跡群が点在し



挿図7 周辺遺跡地図

建設省国土地理院発行2万5千分の1地形図(「谷川」「篠山」「比延」「藍本」)

表3 周辺遺跡地名表

《須恵器窯跡》		《集落跡》	
1. 西相野1号窯跡	三田市西相野	56. 上相野・山ノ口遺跡	三田市上相野
2. 西相野2号窯跡	〃 西相野	57. 上相野・石代遺跡	〃 上相野
3. 古城山1号窯跡	〃 大川瀬	58. 溝口遺跡	〃 下相野
4. 古城1号窯跡	〃 西相野	59. 貝谷遺跡	〃 長坂
5. 古城2号窯跡	〃 西相野	60. 藍本庄遺跡	〃 藍本
6. 古城3号窯跡	〃 西相野	61. 四ツ辻・堂ノ西遺跡	〃 四ツ辻
7. 古城4号窯跡	〃 西相野	62. 東本庄・溝ノ上遺跡	〃 東本庄
8. 古城5号窯跡	〃 西相野	63. 田中・一ノ坪遺跡	〃 東本庄
9. 向上・古城1号窯跡	〃 西相野	64. 田中・五ノ坪遺跡	〃 東本庄
10. 向上・古城2号窯跡	〃 西相野	65. 井ノ草・宮ノ谷遺跡	〃 井ノ草
11. 水ッ下1号窯跡	〃 大川瀬	66. 井根口遺跡	今田町上小野原
12. 水ッ下2号窯跡	〃 大川瀬	67. 有安遺跡	〃 上小野原
13. 水ッ下3号窯跡	〃 大川瀬	《主な城館跡》	
14. 水ッ下4号窯跡	〃 大川瀬	68. 古城砦跡	三田市西相野
15. 水ッ下5号窯跡	〃 大川瀬	69. 相野・丸山砦跡	〃 西相野
16. 水ッ下6号窯跡	〃 大川瀬	70. 中尾城跡	〃 下相野
17. 水ッ下7号窯跡	〃 大川瀬	71. 溝口城跡	〃 下相野
18. 水ッ下8号窯跡	〃 大川瀬	72. 殿元城跡	〃 溝口
19. 木本谷窯跡	〃 上相野	73. 藍岡山城跡	〃 藍本
20. 中池ノ内1号窯跡	〃 上相野	74. 曲り城跡	〃 藍本
21. 中池ノ内2号窯跡	〃 上相野	75. 藍丸山砦跡	〃 藍本日出版
22. 中池ノ内3号窯跡	〃 上相野	76. 月ヶ谷遺跡	〃 四ツ辻
23. 西谷池1号窯跡	〃 上相野	77. 穴口城跡	〃 東本庄勝谷
24. 西谷池2号窯跡	〃 上相野	78. 黒谷城跡	〃 東本庄
25. 寄合谷窯跡	〃 上相野	79. 本庄丸山城跡	〃 東本庄
26. 森ノ尾1号窯跡	〃 上相野	80. 烏山城跡	〃 井ノ草
27. 木戸窯跡	〃 下相野	81. 一長右衛門屋敷跡	〃 大川瀬
28. 花折窯跡	〃 西相野	82. 油井城跡	丹南町油井
29. 相野荘園窯跡	〃 四ツ辻	《主な古墳群》	
《丹波焼窯跡》		83. 霧が尾古墳群	三田市上相野
30. 上相野釜屋窯跡	三田市上相野	84. 嵯峨古墳群	〃 上相野
31. 下相野釜屋窯跡	〃 下相野	85. 権現浦古墳群	〃 四ツ辻
32. 上相野・霧が尾遺跡	〃 上相野	86. 権現浦東古墳	〃 四ツ辻
33. 霧が尾西1号窯跡	〃 上相野	87. 月ヶ谷古墳群	〃 四ツ辻
34. 霧が尾西2号窯跡	〃 上相野	88. 高川古墳群	〃 藍本
35. 霧が尾東窯跡	〃 上相野	89. 大蔵谷古墳群	〃 東本庄
36. 上相野窯跡	〃 上相野	90. 黒谷古墳群	〃 東本庄
37. 貝谷窯跡	〃 長坂	91. 沢山古墳群	〃 東本庄
38. 床谷窯跡	今田町東庄	92. 蛙の森古墳群	今田町上小野原
39. 金床窯跡	〃 東庄	93. 油井古墳群	丹南町油井
40. 三本峠北窯跡	〃 東庄	《主な社寺(跡)》	
41. 三本峠南窯跡	〃 東庄	94. 四ツ辻・権現浦遺跡	三田市四ツ辻
42. 源兵衛山窯跡	〃 釜屋	95. 善寿寺跡	〃 下相野
43. 太郎三郎窯跡	〃 釜屋	96. 虚空藏寺跡	〃 藍本
44. 稻荷山窯跡	〃 釜屋	97. 酒瀨神社	〃 藍本
45. 釜屋北窯跡	〃 釜屋	98. 住吉神社	〃 大川瀬
46. 釜屋中窯跡	〃 釜屋	99. 蛙の宮住吉神社	今田町上小野原
47. 釜屋南窯跡	〃 釜屋	100. 長林寺跡	〃 上小野原
48. 上立杭北窯跡	〃 上立杭	101. 浄土寺跡	〃 下小野原
49. 上立杭本窯跡	〃 上立杭	102. 東光寺跡	〃 下小野原
50. 上立杭南窯跡	〃 上立杭	103. 相田寺跡	〃 下小野原
51. 下立杭北窯跡	〃 下立杭	104. 中蔵寺跡	〃 下立杭
52. 下立杭中窯跡	〃 下立杭		
53. 下立杭南窯跡	〃 釜屋		
54. 南下立杭窯跡	〃 釜屋		
55. 古市焼窯跡	丹南町不米坂		

ている。青野川の谷の出口に位置する塩ヶ谷窯跡は7世紀前半、羽東川流域に広がる木器窯跡は9世紀前半、黒川の支流である栗田川右岸に位置する見比窯跡は13世紀前半の年代が与えられている⁹⁾。

一方、武庫川右岸では、三田市街を見下ろす貴志の丘陵上に平方窯跡群があり、6世紀末の窯跡が3基発掘され、同時に工人の作業場・集落・古墳群もセットで調査された¹⁰⁾。

末古窯跡群が衰えてくる10世紀頃に操業が始まるのが相野古窯跡群である。10～11世紀代を中心として、窯跡がこれまでに29基見つかっている。今回そのうちの11基が発掘調査されたほか、三田市教育委員会によっても水ヶ下支群のうちの5基が調査されている。しかしここでは窯跡に伴うような工人の集落は見つかっておらず、僅かに上相野・山ノ口遺跡で平安時代～鎌倉時代の柱穴や土坑が調査されている程度である¹¹⁾。

相野古窯跡群が衰退したあと、須恵器生産の主力はいわゆる東播系須恵器古窯跡群と呼ばれる美濃川流域の宿原・久留美古窯跡群、明石川流域の神出古窯跡群などに移ってゆき、三田盆地では先述の井ノ方窯跡、見比窯跡などが知られているに過ぎない。

この動きとは別に、西相野から峠をひとつ越えた現在の今田町の山合いに丹波焼が成立する。この地域は古代から住吉神社領小野原荘に含まれていて、上小野原には「蛙ノ宮」として有名な住吉神社が祀られている。成立当初の窯跡は四斗谷川左岸の東庄・釜屋にあり、発掘調査された三本峠北窯跡を始めとする諸窯跡が知られている。初期の丹波焼は東海地方の常滑焼の影響を強く受けており、須恵器から隔絶した発展を遂げている。この時期の丹波焼は先頃発掘調査された井根口遺跡・有安遺跡¹²⁾などから出土しており、消費地における資料も年々増加しつつある。

近世に入ると丹波焼の窯は四斗谷川右岸の釜屋や上立杭・下立杭の辺りに作られるようになり、さらに三田側の相野付近、不來坂を越えた古市・篠山方面へと広がりを見せるようになる。そして現在に至るまで丹波立杭焼は「六古窯」の一つとして窯業生産の伝統を受け継いでいる。

【註】(1) 前古代学協会 『兵庫県三田市溝口遺跡—北摂工業地区—』 1986

(2) 三田市教育委員会 山崎敏明氏より御教示いただいた。

(3) 兵庫県教育委員会 『高川古墳群』 1991

(4) 兵庫県教育委員会 『中尾城跡』 1989

(5) 兵庫県教育委員会 『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)』 1987

兵庫県教育委員会 『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』 1988

(6) 吉田 昇 『青野ダム周辺における須恵器生産について』 『青野ダム(2)』(前掲)。なお塩ヶ谷窯跡は東山窯として紹介されている。

(7) 深井明比古・鎌宮 正 『兵庫県平方遺跡』 『日本考古学年報40(1987年度版)』 1989

(8) 三田市教育委員会 高島信之氏より御教示いただいた。

(9) 兵庫県教育委員会 『井根口遺跡発掘調査報告書』 1990

第4章 遺跡の調査

第1節 分布調査

日本道路公団近畿自動車道舞鶴線計画に際して、兵庫県教育委員会は文化庁と協議しながら、計画路線にあたる地区について周知の遺跡及び遺跡の周知徹底を計るために、遺跡詳細分布調査を計画した。計画路線全線について一度に実施することは、日本道路公団と地元協議の中で種々の条件が整はず、実施できる範囲で早急に実施することとなり、昭和54年度から社会教育・文化財課が調査を開始した。

①昭和54年度分布調査

〔調査期間〕昭和55年3月4・5日

〔調査場所〕三田市西相野～上内神間（三田インター除く）6.5km

〔調査員〕岡崎正雄・岡田章一・水口富夫・深井明比古・渡辺昇

〔調査結果〕A～O地点、須恵器窯跡・窯跡(?)4箇所、遺物散布地9箇所、城跡・城跡(?)2箇所の計15遺跡を確認した。

②昭和55年度分布調査

〔調査期間〕昭和55年4月9・10・11日

〔調査場所〕三田上内神～美濃郡吉川町金会間2.7km

〔調査員〕榎本誠一・松下勝・西口和彦・小川良太・吉田昇・加古千恵子・岡田章一・森内秀造・水口富夫・深井明比古・渡辺昇

〔調査結果〕Q～U地点、炭窯3箇所、石組遺構1箇所、火葬場1箇所の計5箇所を確認した。

③以上、2年次に亘って遺跡詳細分布調査を種々の制約の中で実施したが、未踏査箇所を含め昭和59・60・61年度遺跡確認調査時に補足分布調査を実施した。

第2節 確認調査

1. 溜池改修に伴う確認調査

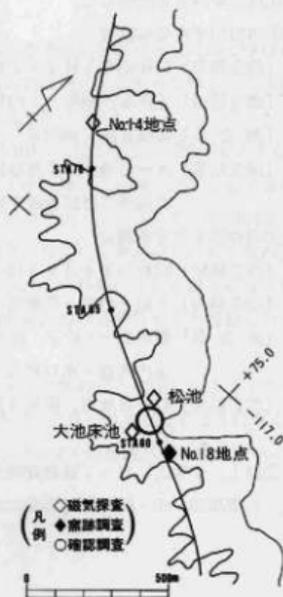
〔調査期間〕 昭和59年11月7日～12月20日

〔調査場所〕 三田市上相野 大池・松池・新池他

〔調査員〕 西口和彦・山田清朝

〔調査補助員〕 小谷五郎・小谷義雄

昭和55年4月実施分布調査のNo.17地点と昭和59年11月1日～5日に溜池改修対象地域に分布調査を実施した。須恵器窯跡の存在を確認するために、奈良国立文化財研究所の協力を得て西村 康主任研究官の指導のもとに①大池周辺地区、②松池周辺地区、③No.14地点南斜面、④No.14地点北斜面の4箇所を磁気探査を実施した。探査結果を参考として①大池周辺地区、②床池周辺地区、③松池周辺地区の3箇所でもトレンチ及びグリッドを設定して確認調査を行った。大池周辺地区ではサヌカイト石炭他少量の遺物が発見されたが、遺構は見つからず、工事を慎重に実施される旨の指示に止まった。なお、第3節地磁気探査において詳しく述べる。



挿図8 昭和59年度調査位置図

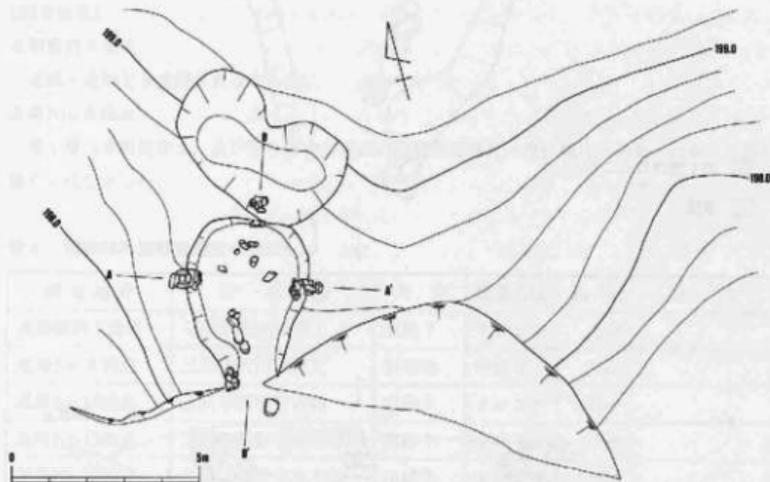
2. 美濃郡古川町福吉地区確認調査・炭窯調査

〔調査期間〕 昭和60年2月4～8日

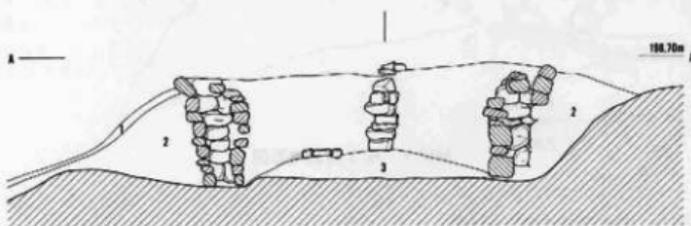
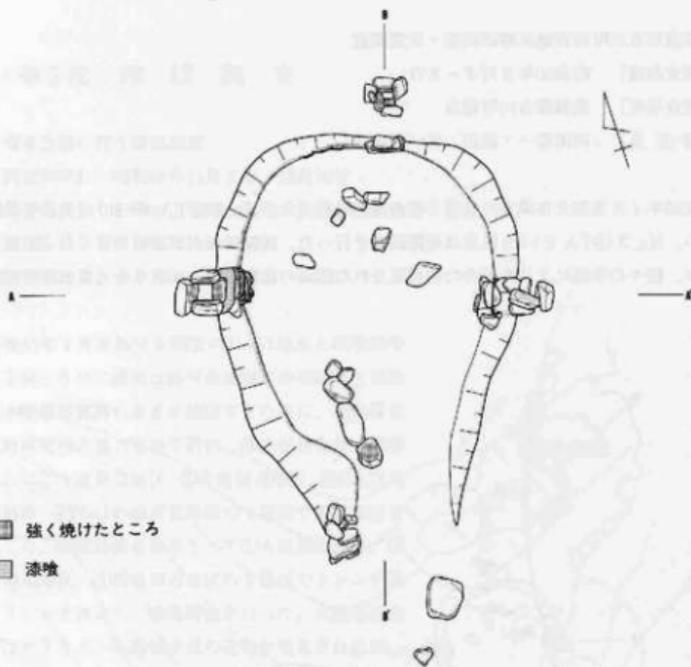
〔調査場所〕 美濃郡古川町福吉

〔調査員〕 岡田章一・渡辺 昇・別府洋二

昭和55年4月実施分布調査の炭窯2基の調査を行った。No.2 (STA 6+80)炭窯は写真撮影を行い、No.3 (STA 5+00)炭窯は発掘調査を行った。詳細は渡辺が原稿を書くべく用意していたが、種々の事情により未稿のため用意された図面のみを掲載し、取り合えずの体裁を整える。



挿図9 No.3炭窯地形図



- 1. 表土
- 2. 黄褐色土
- 3. 暗赤褐色土

挿図10 No.3 炭窯実測図



3. 昭和60年度本線確認調査

昭和60年度近畿自動車道舞鶴線の確認調査は、昭和60年10月16日から61年3月末の期間に実施した。但し、この期間には確認調査で検出した西谷池1号窯跡・2号窯跡の他、下相野近世丹波窯跡の全面調査も行っているため、確認調査に要した実働日数は30日間である。

調査地点は、美濃郡吉川町から三田市藍本間の本線部分と、本線にかかる溜池の改修部分(挿図14)であり、調査地点地名・調査面積等は一覧表の通りである。

調査方法は地点の内容により、散布地は坪掘り調査、窯跡・中世墓及び山城の可能性がある地点はトレンチ調査とした。なお、当該地区には末木谷という字名等、須恵器窯が予想される地点が多く、その地点では物原を探そうと考えて、トレンチとは別に一部重機を使用したり、1m間隔ごとに50cm幅を掘り下げることも行っている。

(調査結果)

近舞藍西6地点

遺構・遺物とも確認されなかった。

近舞No.8地点

第1層(水田耕作土)及び第2層中に数点の近世陶磁器片・丹波焼片を発見したが、遺構は認められなかった。

表4 昭和60年度確認調査一覧表

調査地点	所在地	内容	調査方法	面積	備考
近舞藍西6地点	三田市藍本字橋上	窯跡?	トレンチ	6㎡	
近舞No.8地点	三田市大川瀬戸尻	散布地	坪掘り	24㎡	
近舞No.10地点	三田市西相野古城	窯跡?	トレンチ	109㎡	
近舞No.12地点	三田下相野字末木谷	窯跡?	トレンチ	46㎡	
近舞No.13地点	三田下相野字末木谷	山城?	トレンチ	120㎡	
近舞No.15地点	三田上相野字西谷	窯跡	トレンチ	427㎡	西谷池窯2基
近舞No.16地点	三田上相野字西谷	散布地	坪掘り	108㎡	
近舞No.18地点	三田上相野字萩ノ尾	窯跡?	トレンチ	10㎡	
近舞尾崎池地点	三田下相野字釜屋	中世墓?	トレンチ	43㎡	
工事用道路下相野	三田下相野字釜屋	窯跡	トレンチ	55㎡	下相野近世窯
近舞No.19地点	三田下相野字釜屋	山城?	トレンチ	170㎡	
近舞No.5地点	美濃郡吉川町福吉	中世墓?	トレンチ	67㎡	

4. 昭和61年度本線確認調査

新しく発見されたSTA.65+60地点（寄合谷竈跡）、地磁気探査が実施された中池ノ内1号竈跡、散布地No.11地点とNo.9地点（古城1号竈跡）では遺跡の範囲を確定するために、確認調査（トレンチ）を実施した。散布地No.11地点の調査時に改めて周辺の分布調査を行い、竈跡が考えられる地区に追加の確認調査（トレンチ）を行い、向上・古城1、2号竈跡を発見した。

また、古城1号竈跡の調査時に、周辺の分布調査を追加し、古城2～4号竈跡の灰原を発見した。古城2号竈跡については付帯工事が計画されているため確認調査（トレンチ）を実施した。

いづれも、調査については各竈跡調査の章で詳しく述べている。



第3節 地磁気探査

挿図12 昭和61年度調査位置図

1. 昭和59年度地磁気探査

昭和59年度大池地区周辺他の溜池改修工事に先立ち、須恵器竈跡の存在が考えられるため奈良国立文化財研究所の協力のもとに地磁気探査を実施した。特に、本線No.14地点で竈跡を示す探査結果が出て、昭和61年度に発掘調査を実施し、中池ノ内1号竈跡と命名した。

2. 昭和61年度地磁気探査

昭和54年度の分布調査時に確認された古城1号竈跡は、本線から竈体部分が外れ、保存されることになった。しかし、竈体の保存のために隣接の国有地について、神戸営林署の協力を得て地磁気探査を行った。前回と同じく、奈良国立文化財研究所の協力で実施した。本線の関連工事地区に改めて、分布調査を併行して実施しており、古城2・3・4号竈跡が考えられたので、合計3箇所についても地磁気探査を行った。

3. 地磁気探査について

はじめに

今回、調査対象とした地域内では、先の分布調査によって遺跡と確認した地点のいずれにも須恵器の散布が認められていた。散布箇所は現状が池となっているその内部斜面や、丘陵斜面であるところから、集落遺跡ではなく窯跡が存在する可能性が大きいと考えられた。そこで、事前に窯跡の存在地点や基敷を特定するために、磁気探査を採用することにした。

磁気探査を実施した箇所は、三田市上相野の大池や松池の山側斜面周辺、近畿自動車道本線 No.14地点の丘陵南北両斜面や同市西相野古城地区である。この内前者の大池や松池地区は溜池改修工事のために、また後者のNo.14地点と古城地区は自動車道建設工事に伴う事前の遺跡確認を目的として実施したものである。

磁気探査を採用したのは、窯跡や炉跡のように高熱を受けた遺構は熱残留磁気^{*}を帯びているため、周囲と比較すると強い磁気を示す箇所として、見いだすことができるからである。強い磁気を示す地点を知るには地磁気を測るが、考古学に活用されている方法には2種類ある。全磁力を測る方法と、垂直成分の差分をとるものとのことである。ここでは、2台連動法による全磁力測定法を採用した。2台連動法では、1台を定点として固定しておき、他の1台が測定区内を移動して、測点毎に読み取りをするが、このとき両方の装置ともに同時に等しい両のノイズを受けることを前提としている。

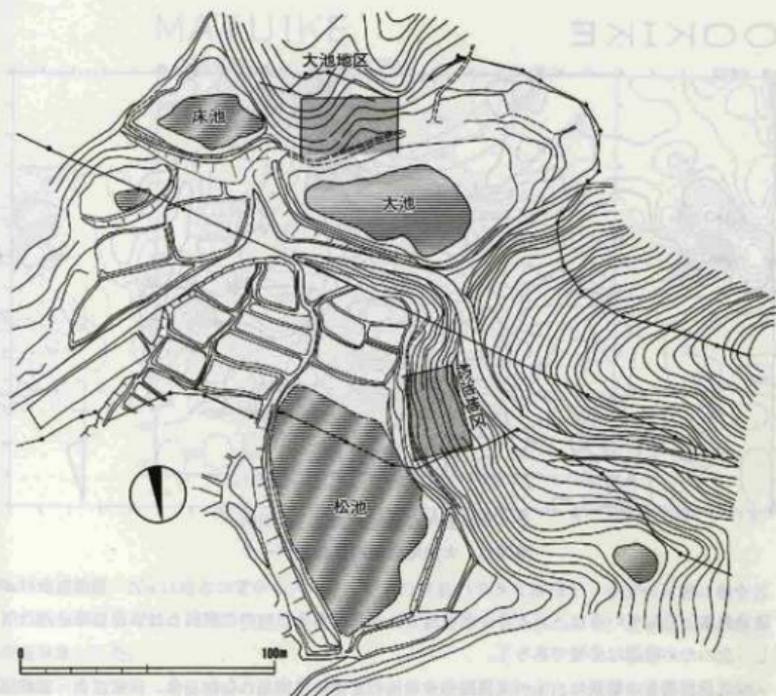
本遺跡群における測定では、2台の磁力計はコードによって連結して、移動点がスイッチを押せば、両者が同時に作動するようにした。観測者は手書きによって記録した。No.14地点と古城は2m間隔の読み取りである。したがって、結果を示す磁気強度分布図(定点と移動点の観測差)に示される外郭線上の一日盛りは、大池と松池は1mで、No.14地点と古城は2m間隔である。

使用した装置はカナダのバリンジャーリサーチ社製のプロトン磁力計GM122型であるが、古城地区においては同じカナダのGEMシステム社製GSM-8型プロトン磁力計を使用した。いずれも測定精度は1ガンマである。

探査結果

大池地区 県道上相野吉川線の南で大池の南山側斜面である。地形は南から北へゆるやかに下がり、池の汀線となる。東西25m、南北14mの測定区を設定した。周辺は既に伐採が終わり大きな木々は片付けられていたが、随所に焚火の跡が残っていた。

大きな数値の変化ではないが、一見、双極子磁場^{*}が多数認められる。その中でbとc点は正負で約30ガンマの違いが見られる。確認調査が必要な箇所と判断される。a地点は非常に強い



挿図13 大池・松池地区地磁気探査位置図

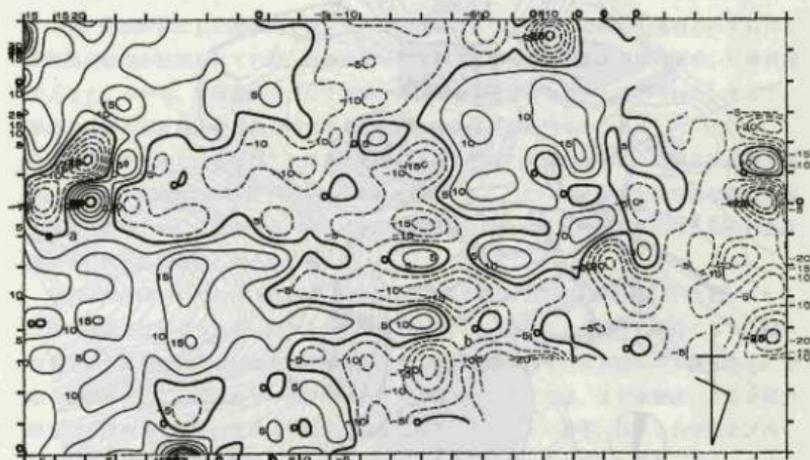
＊熱残留磁気

土や粘土には鉄の粒子が含まれ、鉄は強い磁気を帯びている。土中では、その帯磁の方向はばらばらであるが、ある一定温度（キュリー温度 770℃）以上に加熱されると磁気が消滅してしまう。次に冷却する過程で改めて地磁気の極の方向とその強さに応じて、再び磁気を帯びる。この熱効果によって得た磁気のことをいう。

＊双極子磁場 (Dipole)

窟が存在する地点を境とし周囲の数値と比べ相対的に、磁北に沿い北側に低い数値、南側に高い数値が対峙する。登窯の場合には、その規模に応じ等高線に直角に現れる。

OOKIKE



挿図14 大池地区地磁気探査データ

磁気異常を呈しているが、正と負が南北逆であり規模も小さいので窯跡とは推定し難い。ただし、念のため確認は必要であろう。

確認発掘調査の結果は、すべて窯跡やその他の遺構は検出されなかった。探査によって表現された磁気異常の多くは、伐採後の焚火によるものと考えられる。

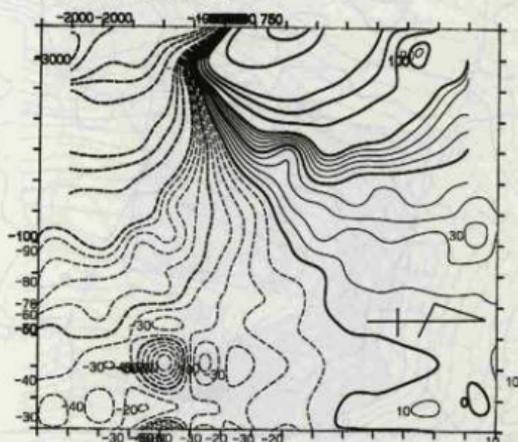
松池地区 松池の西山側斜面で、県道上相野吉川線より約20mほど東に離れた箇所である。

探査区の上の道路上に大型トレーラーが放置されていた。探査前よりこのトレーラーによる影響が予想されたが、まさに測定結果は、それを裏付けたものとなった。探査範囲は南北15m、東西13mである。

西辺の中央部が一番高く、北から南西にかけて数値は低くなる。これはトレーラーから発せられる磁気の影響を現しているものと考えられる。東南隅から北に4～5m地点に磁気異常が認められるが、極端な数値変化で窯跡とは考えられない。

松池地区における磁気探査は、外部による磁場のため解析不可能である。近距離に強度の磁気を発生する物体があれば、磁気探査が出来ない証明である。窯跡の確認のためには、発掘しか手段がない。

MATUIKE

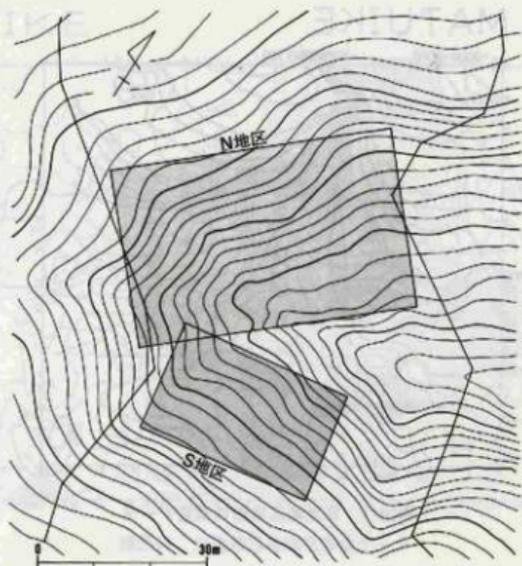


挿図15 松池地区地磁気探査データ

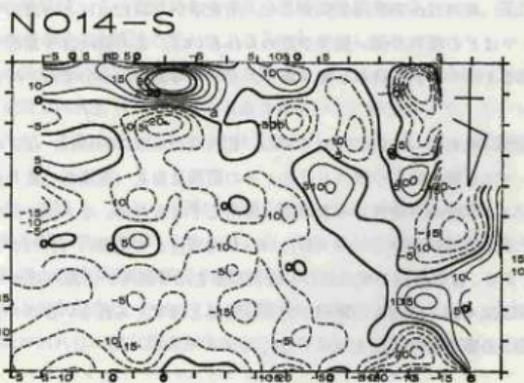
No.14地点地区 No.14地点は東から入り込んできた谷筋の尽きる箇所、谷道の両側に須恵器片の散布が認められた。窯の位置は両側にひろがる斜面と推定されたので、北と南の両斜面を探査対象とした。

南斜面 南北20m、東西32mの範囲を探査した。南東隅から約12mほどの箇所、東西約8mの範囲に約30ガンマほどの磁気の強い箇所が認められる(a)。この箇所は等高線に並行しているため、窯跡とは考えにくい。確認の必要がある。その他の箇所については、特に顕著な異常は認められない。

北斜面 探査範囲は南北32m、東西50mである。北西隅から東に約10m、南に約4mの箇所に周辺より20ガンマほど強い地点が認められる。その範囲は南北(等高線に直角)に約8mほど広がっている(A)。窯跡の可能性が非常に強い箇所と考えられる。さらに、約8mほど東にもやや磁気異常を示す箇所が認められる(B)。A・B両地点とも窯跡の可能性があり、確認調査が必要な箇所である。探査範囲の南辺部にも磁気異常を示す箇所が二箇所認められる。ただし、その異常は非常に強く約4m四方の範囲であり、窯跡とは考えられないがその他の遺構の可能性もあり、確認は必要な箇所である(a・b)。

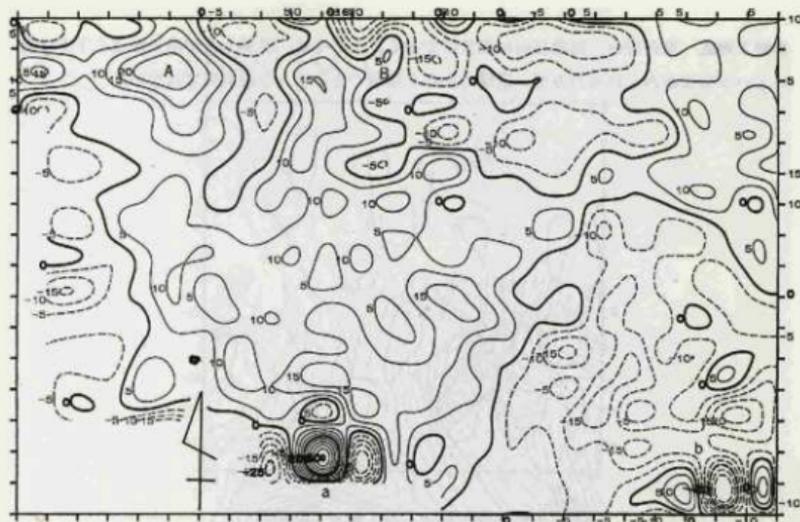


挿図16 No.14地点地区地磁気探査位置図



挿図17 No.14地点S地区地磁気探査データ

NO14-N



挿図18 No.14地点N地区地磁気探査データ

古城1地区 東西南北ともに24mの正方形の測定区である。結果を見ると、測定区のほぼ中央に周辺より約20ガンマ近く磁気の強い部分が、北西から南東へ長さ6m程である(A)。通常北側にとまなう磁気の弱い部分が顕著ではないものの、ここに窠体が存在すると考えた。この存在方向は、ちょうど等高線に直交する形にある。磁気異常の程度が小さいこと幅が広いところから、窠体は深い位置にあるかまたは残存状態が悪いのではないと思われる。

今あげた地点の北約8mにも同程度の磁気異常がある(B)。しかし、異常の範囲が外へ及んでいて全体の規模が不明な点と、磁気の弱い部分が北側にとまわないうところから、窠体である可能性は小さいと見られた。しかし、遺構の有無を確認しておく必要があると考えた。

なお、測定区の南東隅に近い部分には、磁気異常の範囲は2m前後の円形と狭いものの、完結した異常分布を示すものが2箇所ある(a)。窠体である可能性は小さいが、別の遺構が存在する可能性があり、やはり何らかの確認の手段を執った方がよい地点と考る。

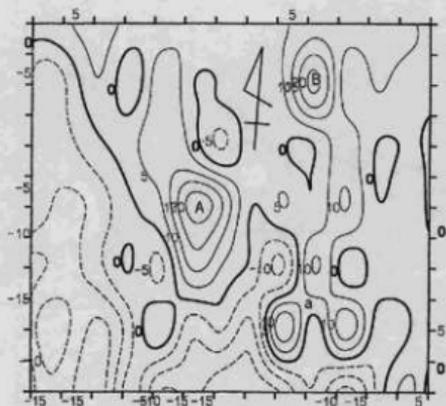
古城2地区 東西20m、南北18mに設定した測定区である。ここには、窠体に起因するような顕著な磁気異常はない。しかし、測定区の西南端には周囲より15ガンマほど磁気を示す部分がある(a)。異常の範囲が測定区外へ及んでいて、全体の規模・形態が不明なため正確な判断ができないが、遺構の有無を確認しておいた方がよい地点と見られた。

古城3地区 東西12m、南北16mの測量区である。ここでは、斜面上方が磁気が強く下方は弱いという分布がみられるのみで、遺構の存在を指摘できるような磁気異常はない。



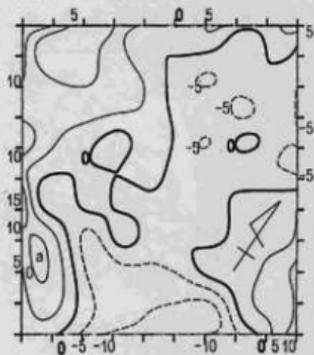
挿図19 古城1・2・3地区地磁気探査位置図

KOJYO 1



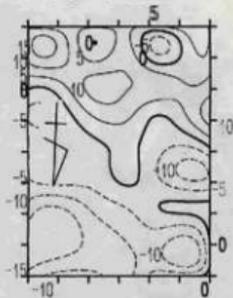
挿図20 古城1地区磁気探査データ

KOJYO 2



挿図21 古城2地区磁気探査データ

KOJYO 3



挿図22 古城3地区磁気探査データ

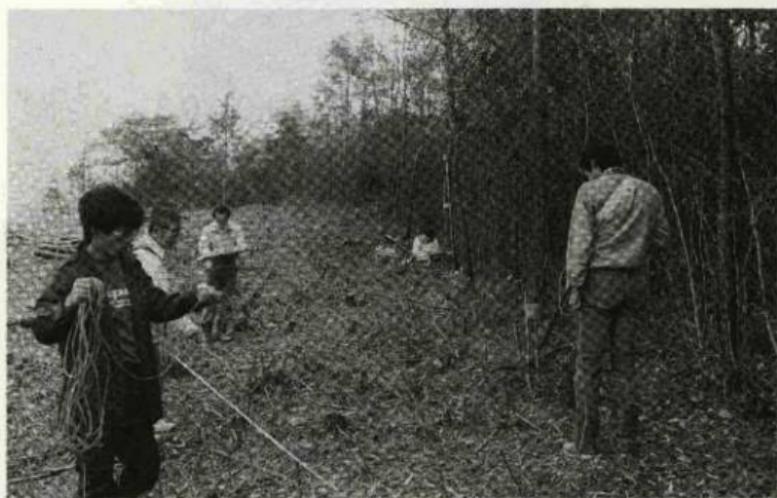
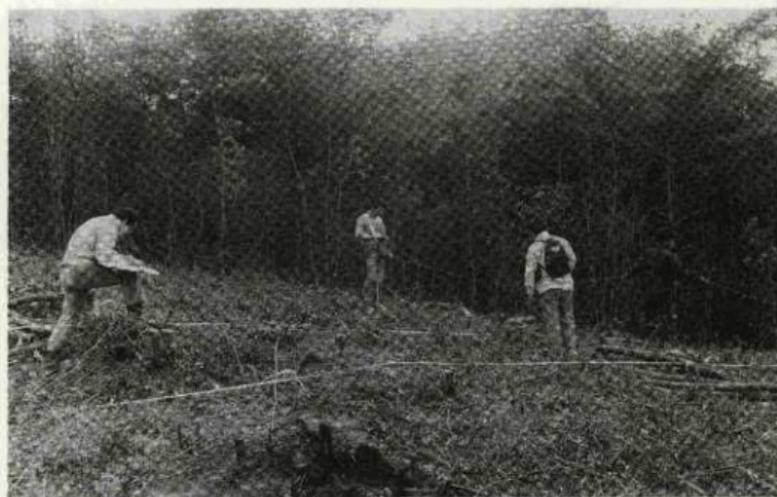


插图23 磁气探查風景写真 (大池周辺地区)

第4節 本 調 査

昭和59年から61年の3箇年に亘って、8群11基の窯跡の調査を実施した。
なお、調査は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 埋蔵文化財係が担当した。

(1) 昭和59年度の調査

①萩ノ尾窯跡の調査

〔調査場所〕 三田市上相野字萩ノ尾

〔調査期間〕 昭和59年2月14日～3月8日

〔調査担当〕 岡田章一・渡辺 昇・別府洋二

(2) 昭和60年度の調査

①西谷池1・2号窯跡

〔調査場所〕 三田市上相野字西谷

〔調査期間〕 昭和60年2月14日～3月8日

〔調査担当〕 大平 茂・村上賢治

〔作業委託〕 榊染川組

〔調査協力〕 国際航業㈱

②木戸窯跡

〔調査場所〕 三田市下相野字木戸

〔調査期間〕 昭和60年2月14日～3月8日

〔調査担当〕 岡崎正雄・市橋重喜・中川 渉・菱田淳子

(調査補助員) 奥野和宏・水嶋正稔・福勢千鶴子・畑 智幸・村上根二

〔作業委託〕 榊染川組

(3) 昭和61年度の調査

①寄合谷窯跡

〔調査場所〕 三田市上相野字寄合谷

〔調査期間〕 昭和61年5月14日～6月12日

〔調査担当〕 山下史朗・山田清朝

(調査補助員) 奥野和宏・水嶋正稔・橋本智子・西本寿子

〔作業委託〕 榊染川組

〔航空写真撮影委託〕 国際航業㈱

②中池ノ内窯跡

〔調査場所〕三田市上相野字中池ノ内

(調査補助員) 奥野和宏・水嶋正稔

〔調査期間〕昭和61年5月7日～7月1日

〔調査担当〕岡崎正雄・山上雅弘

(調査補助員) 奥野和宏・水嶋正稔・橋本智子・西本寿子

〔作業委託〕榊染川組

〔航空写真撮影委託〕国際航業㈱

③向上・古城1, 2号窯跡

〔調査場所〕三田市上相野

〔調査期間〕昭和61年5月14日～7月30日

〔調査担当〕山下史朗・山田清朝

(調査補助員) 奥野和宏・水嶋正稔・橋本智子・西本寿子

〔作業委託〕榊染川組

〔航空写真撮影委託〕国際航業㈱

④古城1・5号窯跡

〔調査場所〕三田市西相野字古城

〔調査期間〕昭和61年5月14日～11月27日

〔調査担当〕岡崎正雄・山上雅弘

(調査補助員) 奥野和宏・水嶋正稔・橋本智子・西本寿子

〔作業委託〕榊染川組

〔航空写真撮影委託〕国際航業㈱

⑤古城山1号窯跡

〔調査場所〕三田市大川瀬字手立ノ北

〔調査期間〕昭和61年10月27日～11月27日

〔調査担当〕岡崎正雄・山上雅弘

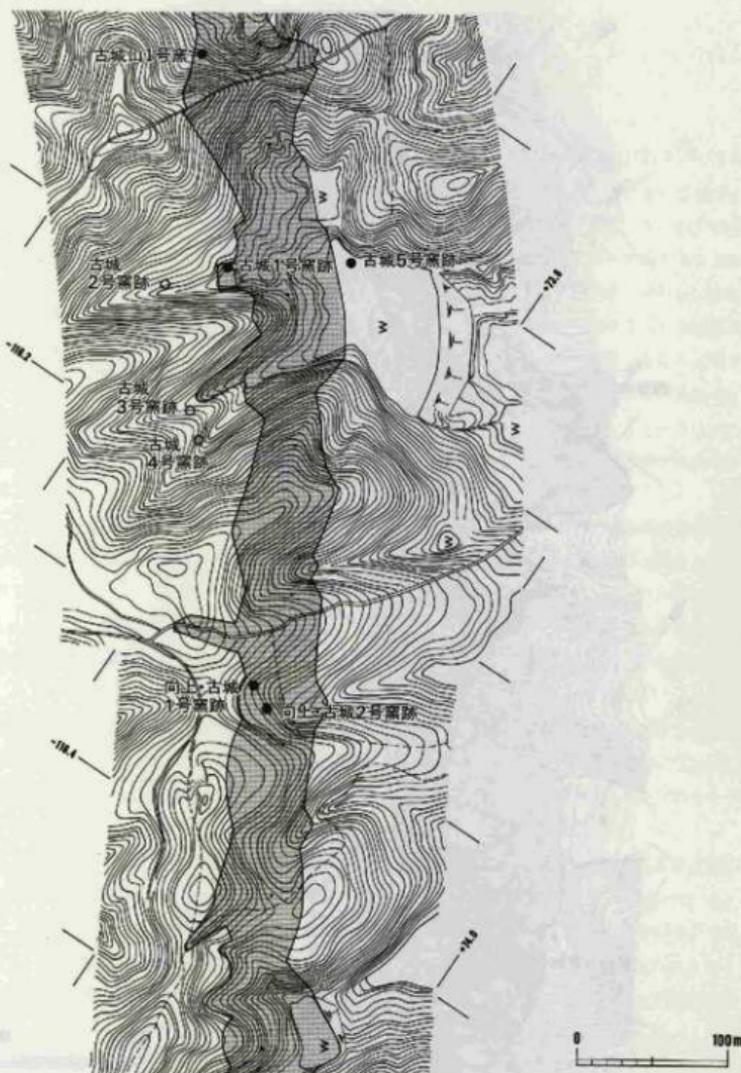
(調査補助員) 奥野和宏・水嶋正稔・橋本智子・西本寿子

〔作業委託〕榊染川組

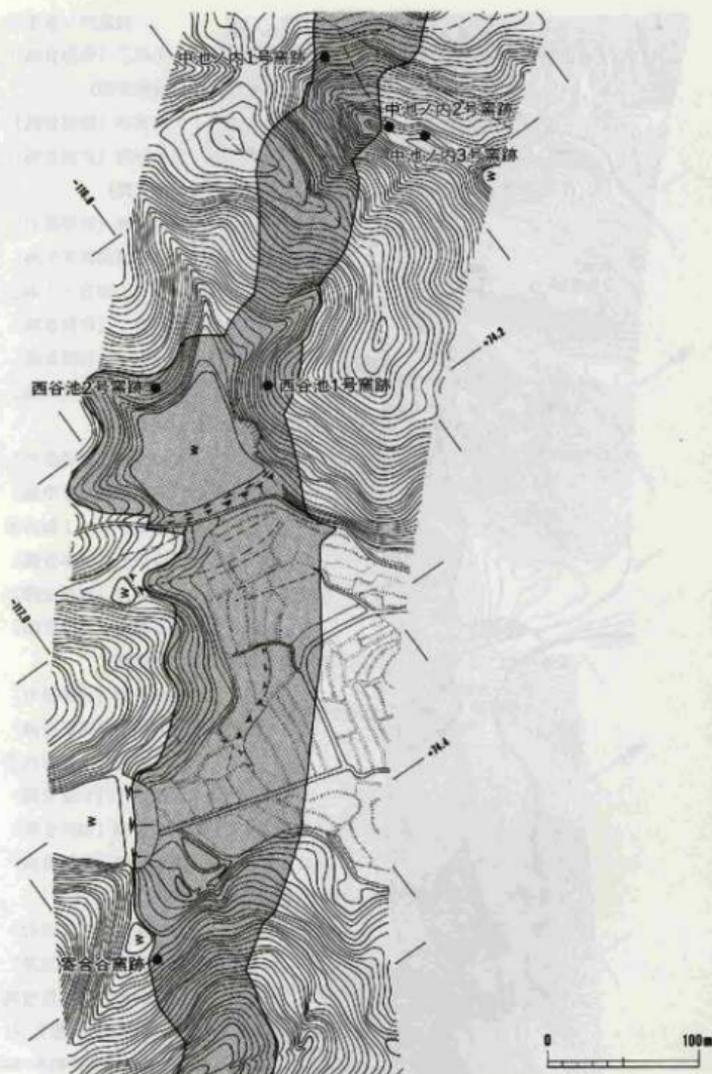
〔航空写真撮影委託〕国際航業㈱

(4) 相野窯跡群の他の調査としては

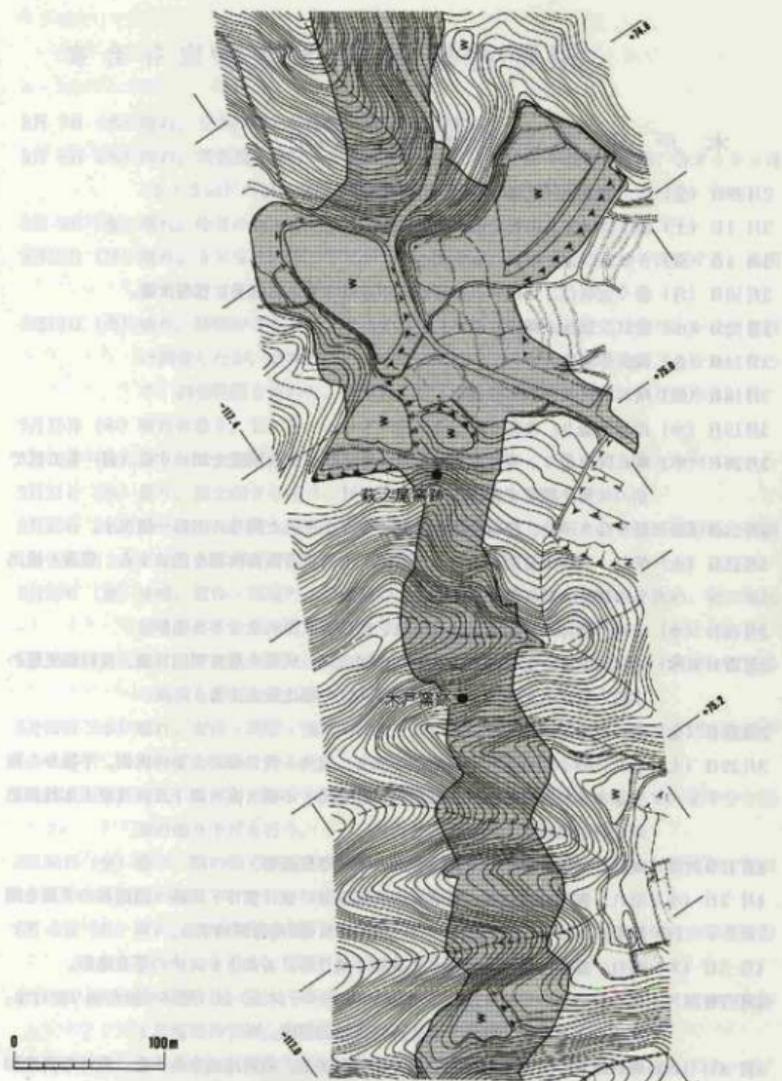
- 1) 美濃郡吉川町福吉地区炭窯の調査(昭和59年度)
- 2) 三田市下相野釜屋丹波焼窯跡の調査(昭和60年度)がある。



挿図24 近畿自動車道舞鶴線と相野窟跡群の位置(1)



挿図25 近畿自動車道舞鶴線と相野窯跡群の位置(2)



挿図26 近畿自動車道舞鶴線と相野窟跡群の位置(3)

相野古窯跡群日誌抄

木戸窯跡 (昭和61年2月28日～4月9日)

- 2月28日 (金) 雪。調査地区縄張りと掘削の打合せ。
- 3月1日 (土) 曇り時々雪。積雪のため作業中止。
- 3月4日 (火) ～8日 (土) 晴れ。表土剥ぎ。
- 3月10日 (月) 曇り後晴れ。市橋職員が播磨大中遺跡調査から現場に復帰する。
- 3月12日 (水) 晴れ。窯体が明瞭になった。
- 3月14日 (金) 雨。作業中止。
- 3月18日 (火) 晴れ時々曇り。写真撮影。
- 3月19日 (水) 雨時々曇り。作業中止。
- 3月20日 (木) 晴れ時々曇り。窯体を6区、灰原を4区に分け調査を開始する。H・L0区で別の灰層を確認する。
- 3月24日 (月) 曇り時々晴れ。窯体2区・6区で掻き出された椀等の土器一括出土。
- 3月25日 (火) 晴れ。窯体土層断面スナップ写真。土層縦断面実測を開始する。周溝を検出し、灰原と共に掘り下げる。
- 3月26日 (水) 晴れ。窯体土層縦断面図完成。窯体・灰原の全景写真撮影。
- 3月27日 (木) 晴れ。窯体・焚口部横断土層断面図実測。灰原土層断面図実測。焚口部上層の土器の写真撮影。窯体の土層観察用畦を順次除去する。
- 3月28日 (金) 雨。図面のチェック。
- 3月29日 (土) 曇り一時小雨後晴れ。灰原の畦除去。窯体・焚口部の土器の実測。午後から陶芸家の市野氏・二葉氏、京都大学の菱田・不破・高・森下氏、及び土木技術史研究者の北垣氏の来跡があった。
- 3月31日 (月) 晴れ。遺物を取上げて清掃をし、全景写真撮影。
- 4月2日 (水) 晴れ。窯体の清掃後、写真撮影。割り付け後、窯体・周溝・前庭部の実測を開始する。谷部に幅2mのトレンチを設け、掘削を開始する。
- 4月3日 (木) 晴れ。窯体の再写真撮影し、実測を続ける。谷部トレンチの写真撮影。
- 4月7日 (月) 曇り後晴れ一時吹雪。窯体・周溝のエレベーション後、窯体の断ち割りを行う。窯体の写真撮影。谷部トレンチの土層図完成。
- 4月8日 (火) 晴れ後曇り。体床面の断ち割り土層図実測。最終床面を除去し、窯体写真撮影
- 4月9日 (水) 曇り後雨。窯体第1次床面の実測。煙道部の断ち割り後の写真と図を完成。

寄合谷窯跡 (昭和61年5月7日～6月12日)

- 5月7日(水) 晴れ。立木伐採と掃除後、調査地区杭打ち。
- 5月8日(木) 晴れ。調査地区杭打ちと地区毎にテープを張る。平板測量開始。各メッシュ毎(5×5m)の遺物表面採集頻度をみて調査計画を立てる。
- 5月9日(金) 晴れ。昨日の続きを行う。状況写真を撮影する。
- 5月12日(月) 晴れ。5×5mメッシュをグリッドと呼び、その単位で遺物を採集する。山田職員本日より参加。
- 5月13日(火) 晴れ。窯体が予測される地点の北側2箇所に、幅1m長さ10mのトレンチを設け調査したが、遺物が無く土層断面観察でも窯跡の痕跡を確認しえなかった。調査範囲を狭めた。午後からD4～6区表土層の除去に取り掛かる。
- 5月15日(木) 晴れ後曇り。E・F(4～7)区の表土剥ぎ。
- 5月16日(金) 曇り。表土剥ぎを続け、窯体の位置がほぼ6ライン上にのることが判った。
- 5月21日(水) 曇り。表土剥ぎを続け、H6区で灰層の範囲を確認する。
- 5月22日(木) 曇り後晴れ。表土剥ぎを完了し、土層観察用畦を残した全景写真撮影後、実測し畦を取り外す。
- 5月23日(金) 快晴。窯体・灰原の上面確認の全景写真撮影後、窯の主軸線を決め、新に地区割りを行う。窯体の規模は水平長約4m、幅約1.1mを計る。
- 5月26日(月) 曇り後晴れ。窯体・灰原の調査を開始する。窯体南の周溝で炭・窯壁・須恵器の集積を確認する。
- 5月27日(水) 晴れ。窯体・灰原・周溝の調査を続ける。窯体内は床面まで掘り下げるが深さはわずか30cmを計る。
- 5月28日(水) 晴れ。窯体の南半分を掘り下げ写真撮影後、実測を開始する。更に北半分と灰原の掘り下げも行う。
- 5月30日(金) 曇り。朝の雨で作業員が来ず、窯体内縦断土層観察用畦の除去と燃焼部・焚口部の掘り下げを行うに留まった。
- 6月2日(月) 晴れ。窯体内縦断土層観察用畦の除去を完了し、横断土層観察用畦の写真撮影後、実測を行う。周溝と灰原の掘り下げを続ける。
- 6月3日(火) 曇り後晴れ。窯体内の崩落した天井部を取り除き床面を検出する。窯体内横断土層断面の実測。周溝と灰原の掘り下げを続ける。
- 6月4日(水) 曇り後晴れ。窯体内の二次体積の土器を取上げ、周溝と灰原の掘り下げが完了した時点で全景写真撮影を行う。

- 6月 5日 (木) 曇り。窯体の実測を開始する。周溝・灰原の上層観察用畦の写真及び実測を開始する。
- 6月 6日 (金) 曇り後雨。周溝・灰原の上層観察用畦の実測と除去を行い、窯体の平面図を作成させ、遺構掘り上げ後の全景写真を用意するも雨のため中止となる。
- 6月 9日 (月) 晴れ。窯体床面直上の土器を取り上げる。清掃後、全体写真を撮影する。
- 6月10日 (火) 晴れ。周溝の平面図完成。
- 6月11日 (水) 晴れ。窯体の断ち割りを行い、焚口部の状況から複次の窯の使用が認められる。
- 6月12日 (木) 晴れ。窯体断ち割りの断面を観察し、3枚の床面の可能性を確認した。写真撮影後、実測を行った。
- 6月12日 (金) 晴れ。窯体第1次床面を検出し、写真撮影後、平面図を作成。また、窯体断ち割り断面図の作成。本日をもって調査を完了する。奈文研の西村 康氏が見学。

中池ノ内窯跡 (昭和61年5月7日～7月1日)

- 5月 7日 (水) 晴れ。立木伐採。
- 5月 8日 (木) 晴れ。立木伐採と全景写真撮影。
- 5月 9日 (金) 晴れ。伐採の片付けを行い、調査地区杭を打ち終わる。平板測量を開始する。調査地区の東端に確認トレンチを設定する(第1トレンチ)。
- 5月12日 (月) 晴れ。5×5mメッシュ毎にテープを張り、グリッドを設定する。グリッド毎に遺物表面採集を行う。窯跡と灰原の広がりを予測することが出来た。第1トレンチでは須恵器細片が出土したのみであった。
- 5月13日 (火) 晴れ。周辺谷筋の分布調査を行い、2箇所須恵器が集中する地点を確認し、中池ノ内窯跡群として、発掘調査窯を中池ノ内1号窯と命名し、路線外の東は2号・3号と呼ぶことにした。調査杭の高さをもとめる作業を行い、235～242mの標高を求めた。調査区の南斜面に昭和59年度地磁気探査を実施した箇所に第2トレンチを設定し、調査するが遺物もなく、上層に変化が見られなかった。第1・2トレンチの調査結果から調査地区を限定するが出来た。
- 5月14日 (水) 雨。作業中止。No.9地点で公団と立会いを行い、露頭した灰層と計画路線との位置を確認し、調査方法を検討した。
- 5月15日 (木) 晴れ。第1・2トレンチの土層断面図作成。午後から中池ノ内窯跡から北のNo.9・11地点の調査を開始する。調査地点への踏査時に2箇所須恵器を発見、後日発掘調査することとなる向上古城1・2号窯と古城2号窯の始まりであった。No.9地点で2本のトレンチを設け調査を開始する。表土下の砂層から須恵

器が大量に出土した。

5月21日(水) 曇り一時晴れ。No.11地点でトレンチ調査を行うが遺構・遺物無く、北の谷部で先週に須恵器を発見した地点で遺物の広がりを確認した。No.9地点でトレンチの土層断面の実測と平板測量を実施した。

5月22日(木) 曇り後晴れ。No.9地点では地形測量後、灰層の広がりを抑える。No.11地点で実測を開始する。No.11地点北の谷部の立木伐採後の状況を整理し、地表面を観察出来るようすと、須恵器が大量に採集出来た。この地点を向上・古城窯跡と仮称する。

5月23日(金) 晴れ。No.11地点は実測を完了する。向上・古城窯跡は4本のトレンチを設け調査を開始する。2箇所で灰層の広がりを検出し、2基の窯跡の存在を考えた。須恵器は豊富である。

5月26日(月) 曇り。向上・古城窯跡はトレンチの実測と写真撮影を完了する。中池ノ内窯跡は表土剥ぎを開始する。

5月27日(火) 晴れ。窯体は地磁気探査した箇所より上に延びて検出されはじめ、灰原は下方に広く広がるのが早くも判明した。

5月28日(水) 曇り。昨日の調査結果から、調査区を広げることにしAラインまでグリッドを拡張した。

5月30日(金) 曇り後雨。作業中止。寄合谷窯の手伝い。

6月2日(月) 曇り。灰原C・D2区の検出。調査区の西端に須恵器の散布を認め、西に窯跡が存在しそうである。

6月3日(火) 曇り後晴れ。E・F区の表土剥ぎ。

6月4日(水) 晴れ。表土剥ぎを完了し、全景写真撮影。土層観察用畦C・Dラインで土層断面図を作成。

6月5日(木) 曇り。3ライン縦断土層観察用畦を実測後、畦を除去し全景写真撮影。窯体上面の写真撮影を完了。灰原の広がりの中に純灰層はC～E2区を占める。

6月6日(金) 曇り後雨。窯体の主軸線を決め、割り付けを行う。H2・3区で炭窯を発見。

6月9日(月) 晴れ。灰原の割り付け行い掘り始める。窯体内の調査を開始する。炭窯の出土状況写真を撮影する。

6月10日(火) 快晴。窯体内の調査を続ける。灰原と炭窯の調査も続け、炭窯は清掃後に全景写真撮影を行い、平面実測ののち西半分を断ち切る。

6月12日(木) 快晴。窯体・焚口部の調査を続ける。また周溝を検出する。炭窯の完備状況を写真撮影。実測のための割り付けを開始する。

6月14日(土) 快晴。炭窯の実測。

- 6月16日(月)曇り後雨。炭窯の図面の完成。午後作業を中止し、遺物整理を行う。
- 6月17日(火)雨。作業中止。遺物整理。
- 6月18日(水)曇り後晴れ。窯体・灰原の上層観察用畦の実測を行う。周溝の検出に努める。
- 6月19日(木)曇り後晴れ。窯体内の土層観察用畦の実測を順次行い、清掃・写真撮影の繰り返しを行う。周溝の検出を続ける。炭窯は断ち割りを行い、床下の溝等の様子を把握した。
- 6月20日(金)曇り時々晴れ。周溝の検出を完了し、窯体内の精査も完了させる。炭窯実測。
- 6月23日(月)雨。本日子定のヘリコプターによる空中写真撮影は延期する。
- 6月25日(水)曇り後雨。やっとヘリコプターによる空中写真撮影を行う。
- 6月26日(木)曇り後晴れ。窯体の実測・周溝の土器出土土壌の実測及び周溝の実測を続ける。
- 6月27日(金)曇り後晴れ。窯体の土器の取上げ後、窯体の清掃を行い、写真撮影。
- 6月28日(土)曇り後雨。窯体の断ち割りを行い、焚口部で造り直しを観察する。午後作業を中止する。
- 6月30日(月)曇り時々雨。窯体の断ち割りの断面実測。平面図の補正を行う。炭窯の図面を完了させる。午後、富山大学広岡公夫先生と学生2人により、寄合谷窯跡と中池ノ内窯跡で熱残留地磁気測定のためのサンプリングを行った。
- 7月1日(火)晴れ。窯体の断ち割りの断面実測と床面の再確認を済ませる。

向上・古城窯跡(昭和61年6月18日～7月30日)

- 6月18日(水)曇り後晴れ。向上古城窯跡の調査前の地形測量を行う。また、寄合谷窯跡の調査後の地形測量も完了させる。
- 6月19日(木)晴れ。調査地区を設定し写真撮影を行う。ヘルコン他機材を現場に搬入する。
- 6月20日(金)晴れ。5×5mグリッドで分区し、表土を剥ぐことから作業を開始する。地表下約10cmで窯体を確認し、窯が西に延びるため調査区を境界線まで広げる。
- 6月23日(月)・24日(火)雨。
- 6月25日(水)曇り後雨。表土層の掘り下げ。午前中にヘリコプターによる空中写真撮影。
- 6月26日(木)晴れ。表土層の掘り下げ。土層観察畦の写真撮影。
- 7月1日(火)晴れ。1号窯の上面検出状況の全景写真撮影。
- 7月2日(水)曇り後晴れ。1号窯は主軸線に基づいて窯体・灰原の分区割り付けを行う。2号窯は窯体・灰原の上面検出状況の全景写真撮影を行う。
- 7月3日(木)晴れ。1号窯は窯体・灰原・周溝の掘り下げを開始する。窯体は残存状況が良く深さが約50cmを計る。2号窯は窯体の主軸線を決め、窯体・灰原・周溝の分

区割り付けを行う。

7月4日(金) 晴れ。1号窯は窯体・灰原・周溝の掘り下げを行い、窯体内の縦断土層観察用畦の断面写真撮影を行った。2号窯は窯体内の掘り下げを開始する。

7月5日(土) 曇り後雨。1号窯は窯体内の縦断土層断面図実測。周溝・灰原の掘り下げを続ける。2号窯は窯体内の掘り下げを続け、周溝の掘り下げも行う。

7月8日(火) 曇り。1号窯は周溝・灰原を掘り下げ、灰原縦断土層図を作成。2号窯は窯体内の縦断土層観察用畦の写真撮影後、実測を開始する。周溝・灰原の掘り下げを行う。

7月9日(水) 曇り後雨。1・2号とも周溝・灰原を掘り下げを続ける。

7月10日(木)・7月11日(金) 雨。作業中止。

7月14日(月) 曇り後雨。1号窯は窯体内縦断土層観察用畦を除去し、横断土層観察用畦を残して窯体の全景写真を撮影。灰原・窯体横断土層観察用畦を写真撮影後、実測を開始する。2号窯は周溝・灰原を掘り下げを続ける。

7月15日(火) 曇り後雨。断続的な雨のため作業を中止。

7月16日(水) 曇り後雨。1号窯は窯体横断土層断面図作成。2号窯は周溝・灰原を掘り下げる。

7月17日(木) 曇り。1号窯は窯体横断土層断面図作成と写真撮影。2号窯は周溝・灰原を掘り下げる。

7月18日(金) 晴れ。2号窯は周溝・灰原の土層観察用畦を残した状況の全景写真撮影。

7月23日(水) 曇り。1号窯は全景写真撮影。2号窯は土層断面図作成。

7月24日(木) 晴れ。2号窯は土層断面図作成ののち、畦を除去して全景写真撮影。そして1・2号窯の全景写真撮影を完了する。

7月28日(月) 晴れ。1・2号窯とも窯体の断ち割りを行い、写真撮影。2号窯は周溝の平面図作成。

7月29日(火) 晴れ。1・2号窯とも窯体断ち割り断面図を作成する。1号窯は周溝の平面図作成。

7月30日(水) 晴れ。富山大学広岡公夫先生と学生により熱残留地磁気測定のスAMPLINGを行った。本日で向上・古城窯跡の発掘作業を終了する。

古城1～5号窯跡、古城山1号窯跡

(昭和61年10月15日～11月27日)

- 10月15日(水) 晴れ時々曇り。工事用道路が古城池まで完成したため、発掘機材を搬入して本日から作業を開始する。既に設定していた調査区に沿って表土剥ぎを始め、C-3・4区から須恵器を多量に検出する。古城池から北については公団と土地所有者との用地交渉が遅れていたため未踏査であったが、解決しているため分布調査を行い、古城山北斜面で立木伐採の重機痕に窯跡の灰原を発見した。古城山1号窯跡と名付ける。工事中の不時発見として、調査が必要である。
- 10月16日(木) 晴れ一時俄雨。表土剥ぎを完了し、土層図作成を開始する。昨日発見した古城山1号窯の灰原の露頭断面の土層図を作成する。
- 10月17日(金) 曇り時々雨。全景写真を撮影し、ベルトコンベアーを設置し直す。
- 10月18日(土) 曇り時々雨。土層観察用畦を除去し、再び全景写真撮影を行う。灰原の流れに沿って地区割りを変更してから、灰層を掘り始める。
- 10月20日(月) 晴れ時々曇り。灰層の掘削を続け、人形を発見する。古城山1号窯は公団と立会いを行い、緊急調査をすることになる。公団側が急ぐため、灰原の広がる谷部の堆積の暑い箇所については、公団の重機で表土を午後から除去し始める。
- 10月21日(火) 晴れ時々曇り。古城1号窯は灰層を掘りあげる。遺物量は土嚢袋30を数えた。古城山1号窯は谷の南に窯体が残っていた。
- 10月22日(水) 雨。作業中止。出土遺物の整理作業。
- 10月23日(木) 曇り。古城1号窯は清掃後、写真撮影を行い、灰原土層断面図作成。分布調査で発見した古城2号窯についても調査をする事になり、幅1m、長さ15mのトレンチを設定した。2・3区で窯壁と須恵器小片を多く発見するも、灰層が薄く窯体は工事地区からかなり外れることが判明した。
- 10月24日(金) 晴れ。古城1号窯は土層観察用畦を除去し、清掃後写真撮影。灰層の再検討をする。古城2号窯は掘削を続ける。
- 10月27日(月) 曇り時々晴れ。古城2号窯は北へ10m・東へ3m拡張し灰層の流れを確認した。古城山1号窯は20×12mの240㎡を調査範囲とした。伐採と表土の掃除と灰層断面の掃除をし、全景写真撮影を行う。地区割り後、表土剥ぎから作業を開始する。
- 10月28日(火) 曇り。古城1号窯は露頭断面の遺物サンプリングを行い、下層を再精査する。調査地区の西にトレンチを設け念押し調査をするが、窯跡は存在しなかった。調査を終了する。古城2号窯はトレンチの清掃を行い、写真撮影後土層図を作

成して終わる。古城山1号窯はベルトコンベアー他の機材を搬入し、表土剥ぎを続け窯体検出を続ける。

- 10月30日(木) 曇り。古城山1号窯は窯体を検出する。幅1.6m、長さ7mの斜距離を計り、急傾斜に立地する。
- 10月31日(金) 快晴。古城山1号窯は窯体検出状況の写真撮影。
- 11月4日(火) 曇り後晴れ。古城山1号窯は窯体を分区して掘り下げを開始する。窯体天井部分の落下がみられ、壁の立ち上がりは25cm前後を計る。焚口部近くに須恵器が多い。周溝も掘り下げを開始する。
- 11月5日(水) 晴れ。古城山1号窯は土層観察用畦を残して写真撮影。窯体の焚口近くで床の張り替えが観察される。
- 11月6日(木) 晴れ。窯体・周溝の土層図作成開始。谷の灰原も分区して掘削を開始する。
- 11月7日(金) 曇り。窯体内の畦を除去し始める。
- 11月10日(月) 晴れ。窯体内の畦を除去し、窯体の清掃。灰原は土層観察用畦を写真撮影し、実測を行う。灰原から大型の椀、双耳壺が出土する。
- 11月11日(火) 曇り時々雨。灰原土層図実測。古城池の北汀で灰層と須恵器を多量に発見し、古城5号窯跡と仮称する。
- 11月12日(水) 晴れ時々曇り。古城山1号窯は窯体実測のため割り付け、実測を開始する。灰原を確認するため北及び谷部を拡張して掘削する。
- 11月13日(木) 曇り後雨。古城山1号窯は窯体実測を完了。谷部の灰層はトレンチを拡張し掘り下げる。古城5号窯は地形測量を行う。午後、雨のため作業を中止する。
- 11月14日(金) 曇り。古城山1号窯は窯体を断ち割り、床の状況を観察し、写真撮影を行う。
- 11月15日(土) 雨後曇り。作業を中止する。
- 11月17日(月) 曇り後晴れ。古城山1号窯は全景写真撮影を完了。古城5号窯へ機材を移動する。
- 11月18日(火) 曇り後晴れ。古城山1号窯は窯体断ち割り断面図の作成。第1次床面を検出する。古城5号窯は調査を開始し、表土を剥いで灰層の広がりを探む。
- 11月19日(水) 晴れ。古城山1号窯は実測を完了する。床塗り混めの土器を取り上げる。古城5号窯は窯体検出に努めるが受熱部分が僅かに判るのみであった。写真撮影後地区割りを行い、灰層を掘り下げる。
- 11月20日(木) 晴れ。古城5号窯は灰層が50~60cmと深く部分的に砂を被っており、ゆっくりと掘り下げる。窯体の復原に努める。
- 11月21日(金) 晴れ。古城5号窯は土層観察用畦を残し全景写真撮影後、土層図作成。
- 11月25日(火) 雨。作業中止。図面整理。
- 11月26日(水) 曇り後にわか雨。古城5号窯は灰層の検討をし、畦を除去する。

11月27日(木) 晴れ。全景写真撮影後、平板測量で調査を完了する。

以上、相野窟跡群の発掘調査を全て完了する。

第5節 熱残留磁気探査

考古遺物における年代と対峙できる窯跡の熱残留磁気探査を富山大学理学部、地球科学研究室の広岡公夫教授に依頼し、昭和60年度の調査から実施した。合計7基の窯跡の床・壁から現地においてサンプリングし、富山大学で分析をして戴いた。分析結果は付載で紹介している。

なお、探査を行った年度と窯跡は以下のような結果が出ている。

(1) 昭和60年度熱残留磁気探査データ

①木戸窯跡 A.D.1000±20 年

②西谷池1号窯跡 A.D. 960±50 年

(2) 昭和61年度熱残留磁気探査データ

①寄合谷窯跡 A.D. 980±30 年

②中池ノ内窯跡 A.D.1010±20 年

③向上・古城1号窯跡 A.D. 730±30 年○ A.D. 950±50年

④向上・古城2号窯跡 A.D. 770±10 年○ A.D. 900±30年

⑤古城山1号窯跡 A.D.1100±100 年○ A.D. 920年頃(A.D. 710~1200)

〔西南日本考古地磁気水年変化曲線による〕〔北陸水年変化曲線による〕



挿図27 熱残留磁気探査風景

第6節 遺物整理作業

発掘調査年次がそれぞれ異なり、遺物整理作業も個々進めていたが報告書を1冊に纏めるにあたり、整理方法を統一することにした。但し、①昭和60年度調査の西谷池1・2号窯跡、木戸窯跡においては現地事務所の一部整理が先行していた。②萩ノ尾窯跡は昭和61年に一度整理をしていた。そこで、平成元年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が独立したことを機会に整理作業工程を整備した。

整理作業工程のうち、遺物の水洗いは現地で済ませていたが、ネーミング作業から接合については明石市所在の魚住分館で実施した。遺物量が非常に多いために、窯毎でも出土した遺構、地区に分け徐々に整理を始めた。遺構とは窯体・灰原・周溝・土坑・炭窯・工房跡などである。地区は調査時点で殆どの窯が5mメッシュを組んで調査しているのもので、その地区割りで表土・灰層などの整理作業を行った。それぞれの個体を以下に設定した器種（杯A・杯B・皿・蓋・碗A・碗B・碗C・鉢・平瓶・甕・羽釜等）に分類し、再度接合した。各器種で垂みのないものを彩を復元できるものをⅠとし、破片でも彩が復元できるものをⅡとし、破片・細片と区別した。時間が無いので全てに亘っての個体識別は行っていない。資料化は不十分となっており、限界を認める。分類Ⅰのものを極力図化を計り、器種で破片しか無いものは追加で資料化した。遺物の実測は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行い、実測後、窯毎の器種の特徴を示すものを復原し、写真撮影を行った。写真は平成元年には古田カメラ、平成2年にはスタジオに作業委託し、横山俊介氏・阿部幸八郎氏が撮影を担当した。

遺物実測・写真撮影後、遺構も含めて報告書編集作業に入り、レイアウト・トレースを完了させ、平成3年度に原稿を整えて本書の刊行に至った。



挿図28 遺物整理作業風景

出土品整理作業の組織

■昭和60年度の調査

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係

現地発掘調査事務所において作業を開始する（西谷池1・2号窯跡、木戸窯跡）。

■昭和61年度の調査

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係

①現地発掘調査事務所において作業を続ける（寄合谷窯跡、中池ノ内1号窯跡他）。

②兵庫県埋蔵文化財調査事務所（荒田事務所）において萩ノ尾窯跡の整理作業を行う。

■昭和62年度の調査

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係

魚住分館（明石市魚住町所在）で整理担当がネーミングを開始する。

■昭和63年度の調査

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係

魚住分館（明石市魚住町所在）で整理担当がネーミングを続行する。

■平成元年度の調査

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 整理普及課で整理作業を継続する。

整理担当（岡崎）

〔嘱託員〕松本 睦・新浪良子・宮田麻子・和田寿佐子・中田明美・西原真知代
光澤鈴子・米澤礼子・伊藤ミネ子・川上啓子・衣笠雅美・長谷川洋子

■平成2年度の調査

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 整理普及課で整理作業を継続する。

整理担当（岡崎）

〔嘱託員〕松本 睦・井川佳子・吉川京子・和田寿佐子／正田善治・若山純子

■平成3年度の調査

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 整理普及課で整理作業を継続する。

整理担当（岡崎）

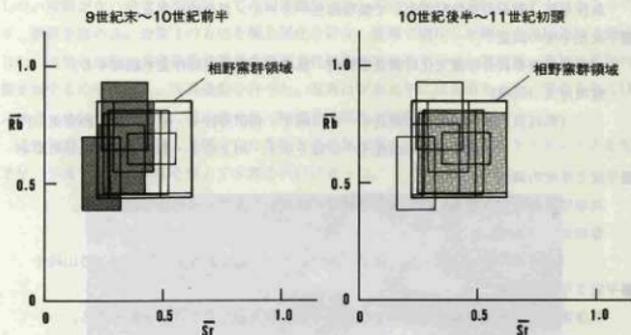
〔嘱託員〕松本 睦・伴 悦子・前田陽子・石本純子・森本貴子・表貝芽子
松村 馨・木村淑子・飯田泰子・若山純子・坂本裕美・斎藤海子子
／蔵 幾子

第7節 分析鑑定調査

発掘調査時に実施した地磁気探査、熱残留磁気探査の他、出土須恵器の胎土分析から産地同定基準資料化（奈良教育大学 三辻利一教授）と窯出土の燃料・炭化材の樹種同定（鳴倉巳三郎先生）について、調査依頼した。

須恵器の胎土分析からRb-Srから相野領域を設定して戴いた。三田市内・北神戸周辺・丹波地区出土の平安時代須恵器の産地同定を積極的にする基準資料となる。今年、報告の三田市川除・藤ノ木遺跡ではその分析が報告されている。

窯の燃料の樹種同定結果から、現在「三田松茸」の産地・アカマツ林は少なくとも、平安時代にはなく、窯場の燃料として1次林（スギ・カシ林）が消費された後の2次林であった。



挿図29 胎土分析領域図

第5章 古城山1号窯跡の調査

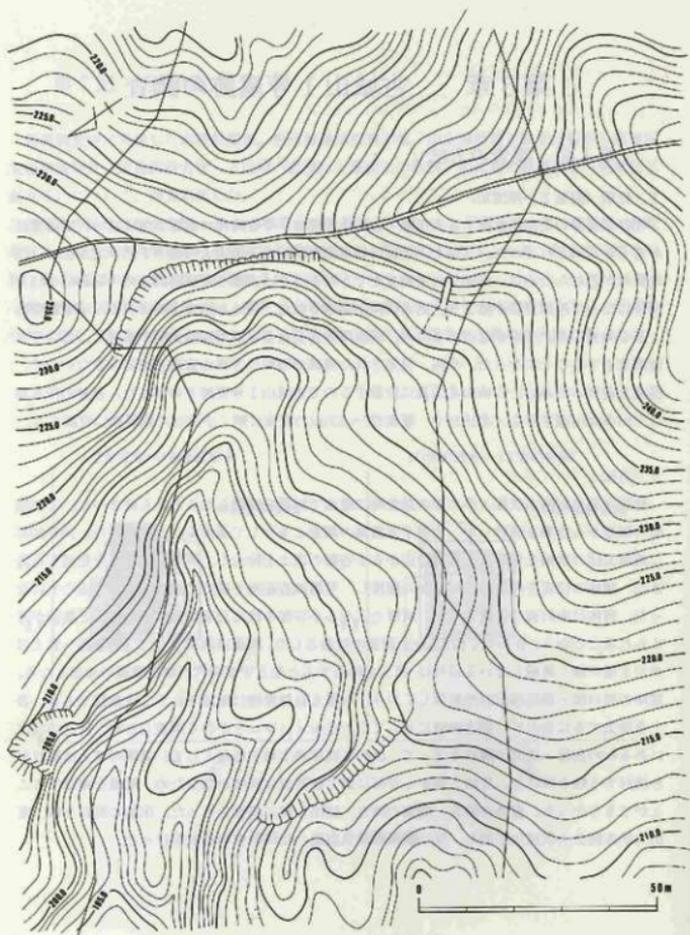
第1節 調査の方法

1. 位置 (図版2、挿図30)

相野窯跡群の北部に位置する大川瀬・古城山周辺は、平安時代の須恵器焼成窯の古城山窯跡が古くから知られていた。しかし、近畿自動車道舞鶴線の三田市大川瀬字手立ノ北地区は、用地買収が遅れたために、詳細な分布調査ができなかった。古城1号窯跡調査時の昭和61年10月15日になって用地交渉が纏まり、樹木伐採が開始された。現地を踏査するに及んで須恵器窯跡1基を発見した。工事が急がれるため、兵庫県教育委員会と日本道路公団が協議し、急いで全面調査をすることになった。今回、発見された窯跡が周知の古城山窯跡と確認できないので、混乱を避けるために、古城山北山麓に位置するので古城山1号窯跡と命名した。窯跡の所在地は三田市大川瀬字手立ノ北1634で、標高227~231mの北東に開く小支谷の南斜面に位置する。

2. 方法

窯跡の発見が樹木伐採工事の際の踏査時に崖面で灰層を確認したことから始まった。この崖面の精査から作業を開始した。古城1号窯跡の調査と並行して進めることになった。10月20日に道路公団の重機を使って、灰層の広がる小谷部の表土を除去し、灰層の拡がりを探した。また、窯体の位置を灰層の広がりから類推し、発掘調査範囲を絞って調査を実施することになった。窯体は南斜面に位置するが、灰層の広がる小谷部を挟んだ北斜面に作業場など施設が考えられることから、合わせて約335m²を調査の対象とした。斜面は約38°と急で、小谷部へ表土ほかの土層が深く堆積している以外は、表土を除去すると殆ど平安時代の窯場操業の地面となる。窯体の焚口部・前庭部が自然崩落しており、灰層も自然堆積は確認されず二次堆積である。表土を除去するに当たり、調査面積に対して5×5mメッシュをかけて調査したが、前述の状況にあるため窯体・周溝の検出をまって、改めて窯体の主軸を基軸として、遺構の埋土堆積状況を検討する畦を設けた。窯体主軸から谷部に繋ぐ縦断面は斜度が急なため、堆積を確認することができなかった。窯体の調査、周溝の調査、煙出し部の調査を行った。床面の断割り後、富山大学広岡公夫教授に依頼し、窯の熱残留磁気測定のための資料採取を行った。



挿圖30 古城山1号窟跡位置図

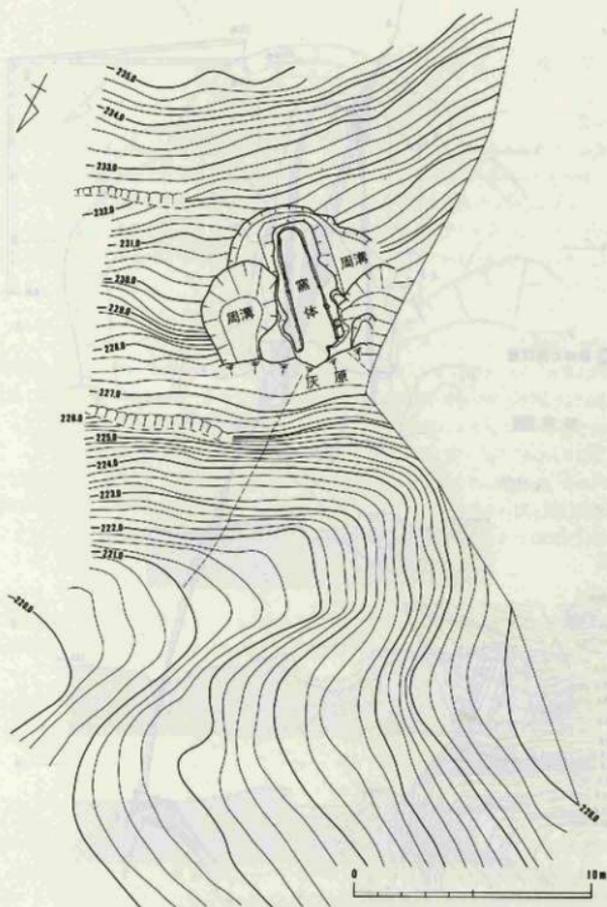
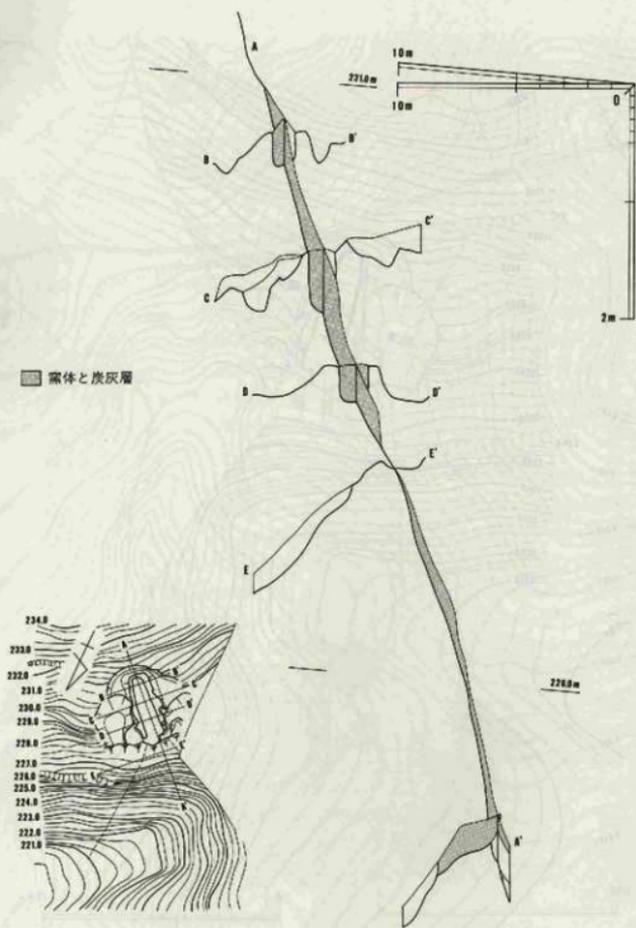
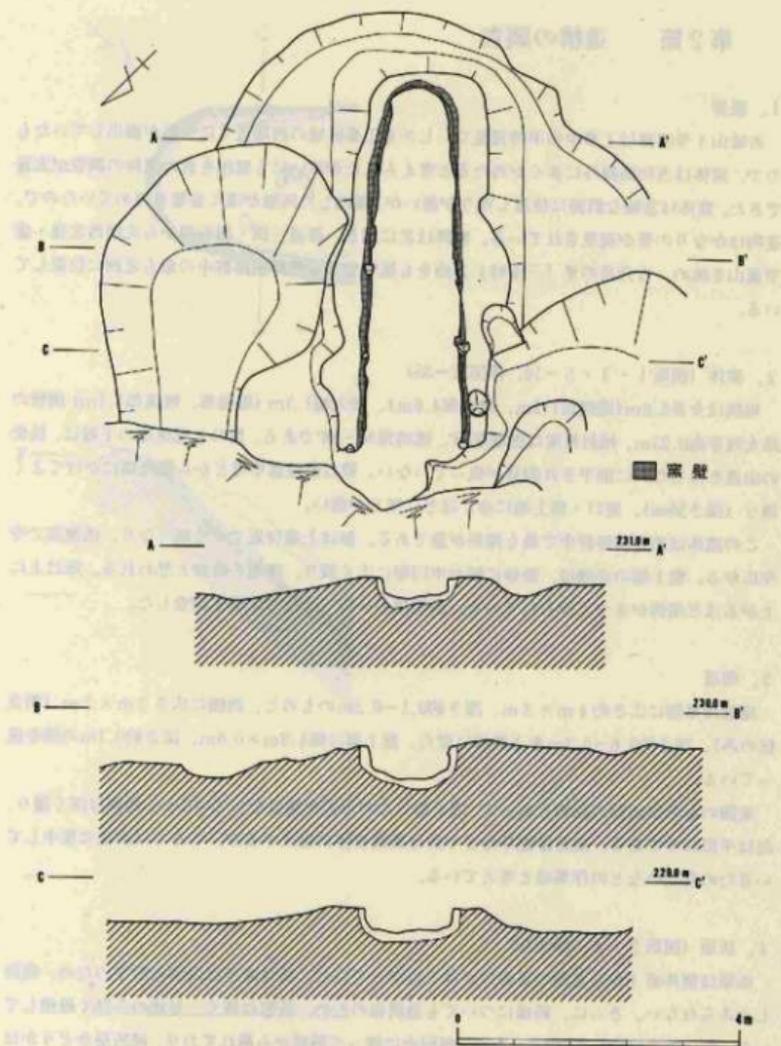


插图31 古城山1号窟跡全体图



挿図32 古城山1号窟跡 窟体・周溝・灰原土層堆積状況図



挿図33 古城山1号窟跡 窠体・周溝遺構図

第2節 遺構の調査

1. 概要

古城山1号窯跡は工事中の不時発見で、しかも工事区域の西端近くに灰原が露出していたもので、窯体は当初路線外に多くが当たると考えられたが幸いにも窯体を含め窯跡の調査が実施できた。窯体は急峻な斜面に位置し残りが悪いが、露出した灰原が深く谷部を埋めていたので、遺物はかなりの量が発見されている。窯跡は北に開き、県道三田・黒石線から北摂西北嶺・虚空蔵山を眺め、古丹波の里「三本峠」方面をも遠望できる相野窯跡群中の最も北西に位置している。

2. 窯体 (図版1・3・5-10、挿図31-35)

規模は全長5.8m(燃焼部1.2m、焼成部4.6m)、最大幅1.3m(燃焼部、焼成部1.1m)側壁の最大残存高0.25m、傾斜角度は燃焼部18°、燃焼部30~38°である。焚口と燃焼部の下端は、後世の山道を作るために削平され側壁が残っていない。壁は燃焼部中ほどから燃焼部にかけてよく残り(深さ50cm)、焚口・窯上端にゆくほどに残りが悪い。

この窯体は相野窯跡群中で最も傾斜が急である。形は上端付近でやや細くなり、燃焼部でやや広がる。窯上端の赤焼は、微妙に幅が半円形に広く残り、煙道の痕跡と思われる。床は上にかかるほど傾斜がきつく作られている。燃焼部の一部で2枚の床面を調査した。

3. 周溝

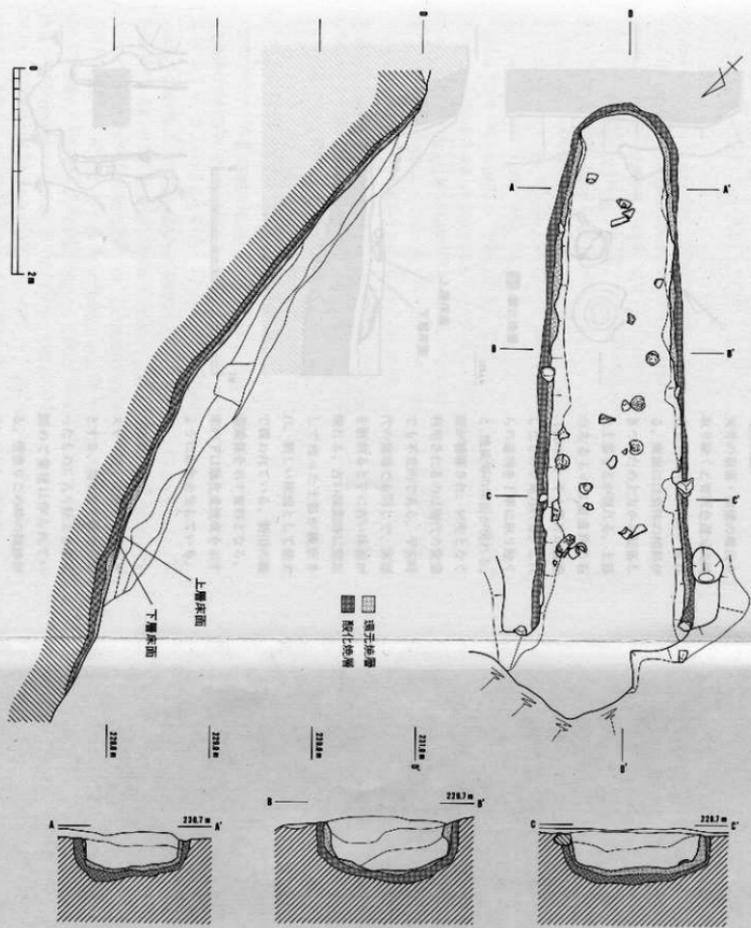
周溝は東側に広さ約4m×3m、深さ約0.1~0.2mのものと、西側に広さ3m×2m(調査区のみ)、深さ約0.6~0.7mを土壌状に穿ち、窯上端に幅1.9m×0.8m、深さ約0.1mの溝を掘っている。

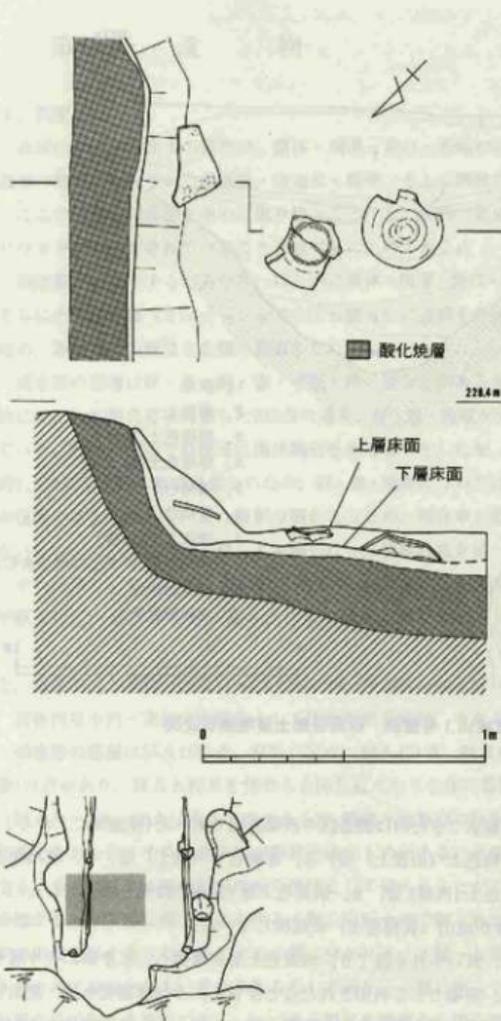
東側のものは地形の制約もあって、浅く掘ったのみで平場になっていない。西側は深く掘り、底は平坦にしてある。須恵器破片などや炭は周溝全体に出土するが、ここでは溝底に集中しているため窯詰めなどの作業場と考えている。

4. 灰原 (図版2・4、挿図36)

灰原は窯体直下から北側の谷底にかけて広がっていた。焚口直下は山側の削平のため、痕跡しかみられない。さらに、斜面についても急斜面のため、灰原は薄く、谷底のみ厚く堆積していた。厚い所では約0.7m程あったが、何回かに渡って斜面から崩れており、純灰層かどうかは判別しにくい。

插图34 古城山1号墓墓室 平面图





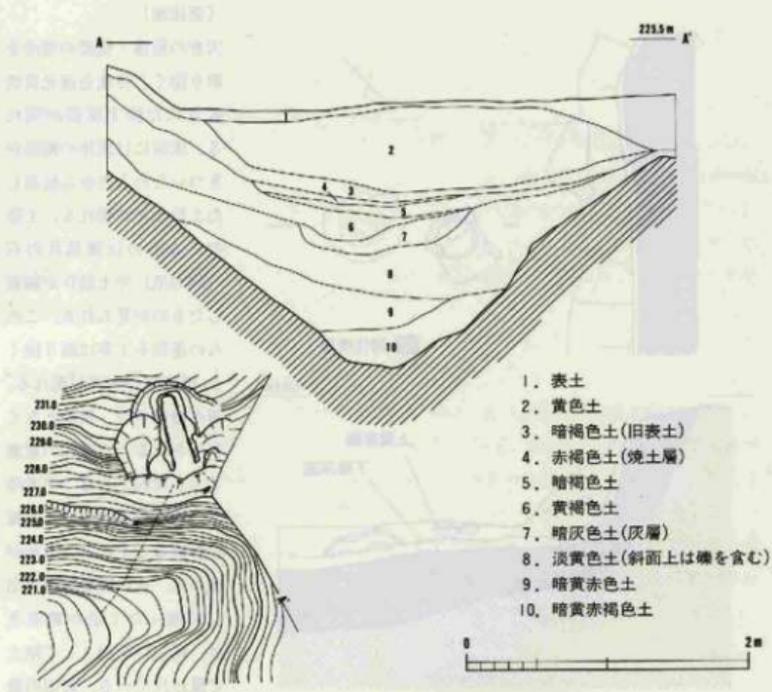
挿図35 古城山1号窯跡 窯体床面断割り細部図

〔窯床面〕

天井の崩落・窯壁の埋没を取り除くと青灰色還元炭焼成された粘上床面が現れる。床面には窯体の傾斜がきついため上方から転落した土器などが現れる。土器のあるものは窯道具の石(駒の爪)や土器片が融着したものが現れる。これらの遺物を丁寧に取り除くと、焼成時の床面が現れる。窯が補修され、何度となく利用されるのは現代の窯業でも不変的である。平安時代の窯場でも同じで、床面を断割ると下に古い床面が現れる。古い操業時に窯出しで残った土器が観察され、新しい床面として粘土で覆われている。新旧の操業関係を示す資料となる。床の下は酸化炭焼成を示すように赤色を呈している。

〔窯壁〕

スサ(壁土に混ぜてつなぎとする、藁などを細かく切ったもの)入り粘土を塗り固めて窯壁は作られている。壁塗りこめ時の指跡が見られるものもある。



挿図36 古城山1号窯跡 灰原谷部土層堆積状況図

〔灰原谷部土層堆積について〕

谷部の土層堆積についてよく観察できたのは調査区の西端断面であった(挿図36)。上から1. 表土層、2. 黄色土層、3. 暗褐色土(旧表土)層、4. 赤褐色土(焼土)層、5. 暗褐色土層、6. 黄褐色土層、7. 暗灰色土(灰層)層、8. 淡黄色土層(斜面上は礫を多く含む)、9. 暗黄赤色土層、10. 暗赤褐色土層が地山(黄褐色土)に堆積していた。

V字形に開折された谷地形が、長い年月を経て8. 淡黄色土層が堆積し、U字形にやや緩やかな地形と成ったときに始めて、窯場として利用されたことが判る。それは窯焼き時、窯出し時の燃料の灰付けで捨てられた様子は7. 暗灰色土(灰層)層から伺える。常に窯体の方向からの土砂の堆積が厚く観察される。

第3節 遺物

1. 概要

古城山1号窯跡出土の遺物は、窯体・周溝・焚口・灰原からコンテナ152箱分出土している。遺物の種類は生産された須恵器・窯道具・窯壁、そして燃料の炭化材などがある。

ここでは主に須恵器を中心に取り扱うことにし、燃料の炭化材が付載資料でスギ・カシ・ノリウツギ材が同定されていることを述べるに止めておく。

須恵器の整理をするにあたり、はじめに窯体・周溝・焚口・灰原という出土遺構毎に分類し、さらに出土地点毎（5mメッシュで分区と便宜的に遺構を分区している）に整理することから始め、各地点での層位を分類の要素とした。

須恵器の器種は杯・皿・碗・壺・平瓶・鉢・甕などがあるが、なかでも杯・皿・碗類が圧倒的に多く、本報告書に掲載した233点の通り、杯・皿・碗類が87%、壺類11%・甕類3%となっている。整理の段階で器種毎に個体識別を企てようとしたが、相野窯跡群全体で整理コンテナ約1,300箱を同等に整理出来ないため、杯・皿・碗類については図化は垂みが少なく、かつ器形が復原できるものとし、また器形分類からはじめ、残存率が低くても器形組成のうえ欠くことのないものについては、小片からも実測を行い、器種組成を補った。

その結果として、杯A101点(43%)・杯B39点(17%)・皿1点(0%)・碗40点(18%)・壺20点(9%)・平瓶1(0%)・鉢3点(2%)・甕8点(3%)の器種組成となる。

2. 窯体内出土遺物（図版11・13・28～30、挿図37～40・57～59）

窯体内埋土内・窯体床面精査そして床面断割り時に、それぞれ遺物が出土している。

須恵器の器種は杯A(59)点、杯B(15)点、碗A(2)点、碗B(1)点、碗C3(1)点、皿B2(2)点、甕(2)点があり、杯Aと杯Bを併せると90%近くなり全体の器種組成と異なる。

杯A(1～59) 杯Aは本来平底であるが、轆轤水挽整形の技術の向上と手抜き作業などから形態変化をおこし、やや丸底気味の形状を成すものがある。平底を1類、やや丸底気味を2類とする。また口造りも轆轤整形技術の変化として捉えることができ、口縁部の回転ナデ仕上げを分類すると、丁寧に薄く端部を作るa類、回転ナデで強く外反するb類と意識的に強い回転ナデで内面を厚く造りだし外反するc類に分かれる。a類→b類と規格性の強い土器から、手抜きも含めて規制が緩み、変化を生み出しており、c類に至っては碗Aという新しい器種からの影響を見て取れる資料である。いづれも製品を轆轤から切り離す時は回転ヘラ切り技法を用いている。ヘラ切り後、ナデ調整やヘラ削りを施されるものはない。

1類a(1～25・27～59)、1類b(51～58)と2類(26)に分かれる。1類で回転ヘラ切り技法が

悪く、挿図58・59底部圧痕拓影のとおり顕著な残りを示すものがある。

法量をみると口径13.5～17.6cm、器高3.0～4.2cm、底径7.4～9.0cmに分布しており、口径は13.9cm・14.8cm・15.4cmと3つのピークがある。特に、59は器高が2.5cmと低く皿Aとしてよいものであるが、1点のみで取り合えず杯Aとしておく。

また、ヘラ記号資料が16点(8・18・22・23・26・36・38・40・44・51・53～55・57～59)があり、「一」8点・「×」3点・「三」1点・「Z」1点・「井」1点・「一+細線」1点・「渦文」1点である。製品の乾燥時の台などの圧痕資料(29・30・34・35・37・39・48)や焼成時の重焼き砂痕の残る資料(47・49・54・56)もある。

杯B(60～74) 杯Bは本来平底である(1類)が、杯Aと同様に丸底のもの(2類)があり、回転ヘラ切り後に高台を底端部よりやや内側に貼付ける(a類)と端部に貼付ける(b類)があり、74は回転ナデ仕上げでやや外反したのである。高台貼付け時の「ツメ手法」が見られる3点(61・63・73)がある。

1類a(69)、1類b(60・65・67・68・71)と2類a(66・69・74)、2類b(70・72・73)に分かれ、74の口縁部は意識的に強い回転ナデで内面を厚く造りだし外反するc類となる。

法量は口径15.0～16.6cm、器高4.8～6.0cm分布域を示す。

また、ヘラ記号資料は8点(63・66～68・71～74)があり、「一」1点・「二」2点・「×」1点・「大」2点・「渦文」1点・「雷」1点がある。

碗A(75・76) 碗Aは底が丸い深い杯部(2類)に、口縁部が意識的に強い回転で内面を厚く造りだし外反するc類に高い高台が付く。器高の高い75と低い76がある。

碗B(77) 77は轆轤水挽整形後、回転ヘラ切り手法で切り離し、平高台を造る。見込み部はやや低く段となるが滑らかに口縁部へと作られている。焼成時の藁などによる重焼き痕が見られる。

碗C3(78) 78は口径が19.5cmと大きく、深い碗部の底は丸く(2類)、高い高台を底端部よりやや内側に貼付け(a類)、体部中位より上に一条の沈線を描く。

皿B2(79・80) 皿B2は碗Aと同じく底が丸い深い杯部(2類)に、口縁部が意識的に強い回転で内面を厚く造りだし外反するc類に高い高台が付く器種である。80は高台貼付け時の「ツメ手法」が見られる。

甕(81・82) 甕は口縁部しか残っていないが、胴部は平行タタキ整形が残り、内面に青海波文タタキ当て具痕を残す。口縁部の外面は縦位の平行タタキ整形痕を少し消しているが、内面は回転ナデ調整を行い、丁寧に仕上げている。口縁端部は内に折り返し、纏めている。

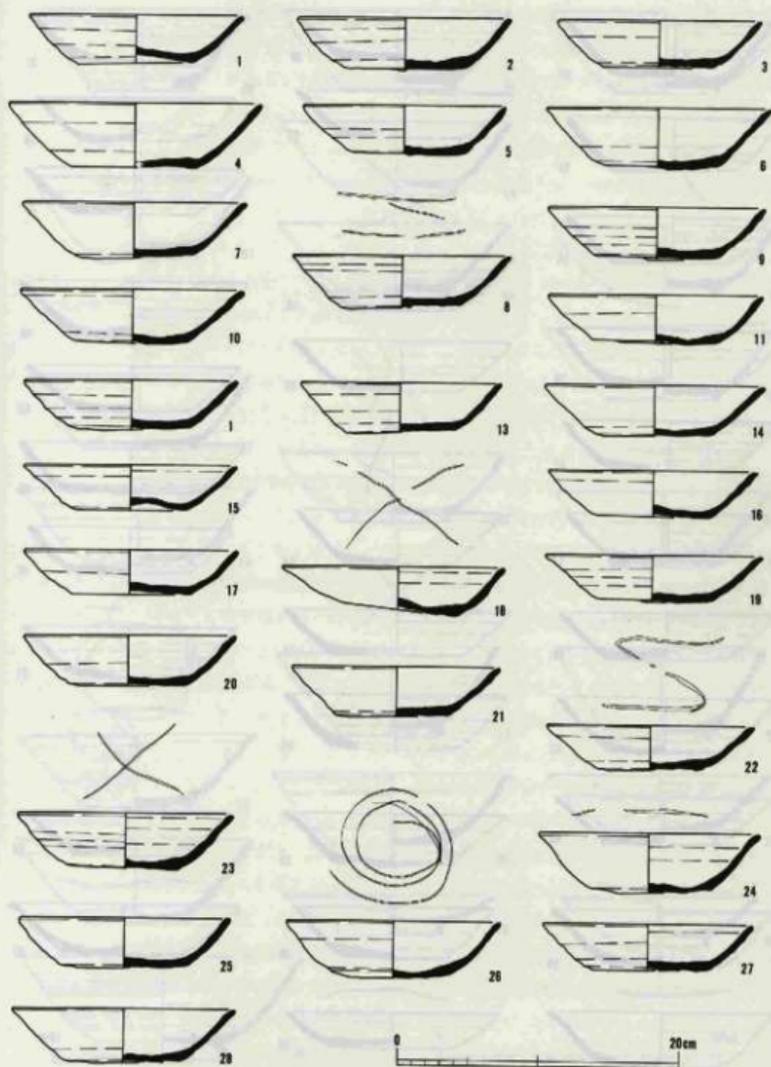


插图37 古城山1号窑址 窑体出土须惠器(1)

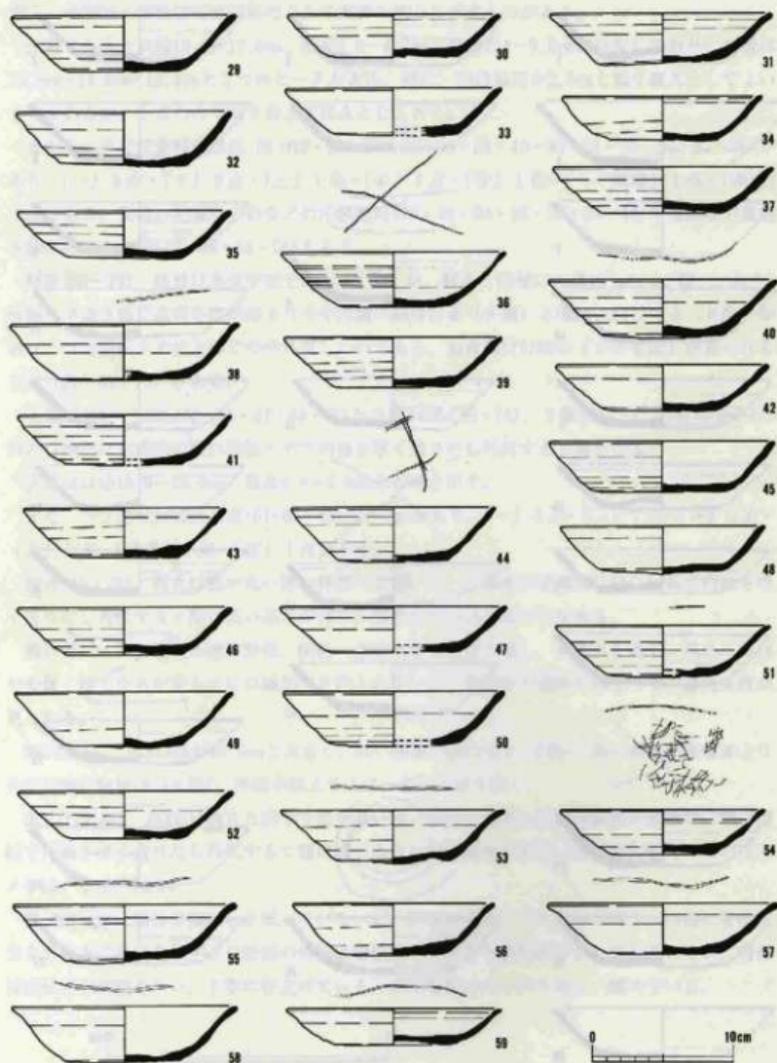


图38 古城山1号窑址 整体出土须臾器(2)

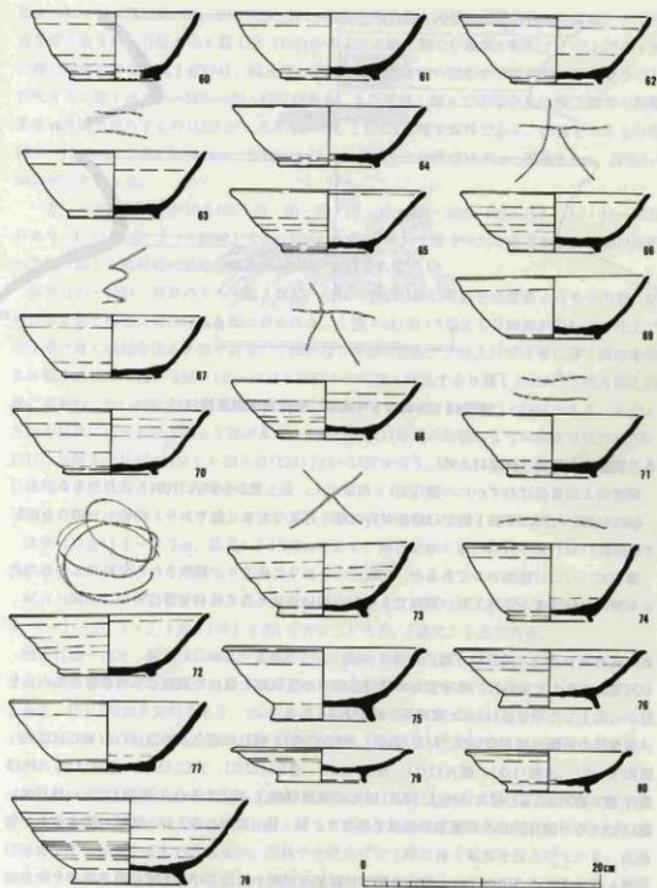
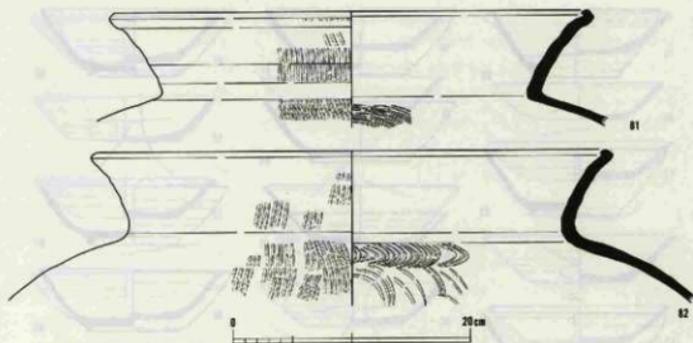


图39 古城山1号窟跡 窟体出土須惠钵(3)



挿図40 古城山1号窯跡 窯体出土須恵器(4)

3. 周溝出土遺物 (挿図41・53)

周溝出土須恵器はわずかに甕(232)と周溝の上、表土層から杯A(109)と2点がある。

杯A(109) 109は平底1類で口縁部が内に厚く外反りするc類であり、回転へら切りを拓影でみる。

甕(232) 232は底部のみであるが、図版25のとおりに底造りが観察される資料で、底部のタキキバシ整形する作業工程が看取できる。内面はタキキ当て具を平滑に消している。

4. 灰原出土遺物 (図版14~30、挿図41~60)

灰原出土とした遺物は、本米窯体の燃焼室焚口が急斜面で崩れた部分と下の谷部を埋める土層から出土した須恵器149点と窯道具2点がある。

須恵器の器種は杯A(41点)、杯B(24点)、碗A(5点)、碗B(10点)、碗C2(4点)、碗C3(17点)、皿B2(20点)、水瓶(1点)、壺A(2点)、壺B2(1点)、壺B4(12点)、壺C1(3点)、平瓶(1点)、鉢(3点)、甕(5点)がある。杯A(28%)、杯B(16%)、碗類(24%)、皿B2(13%)、壺類(13%)、鉢(2%)、甕(3%)となり窯体内出土須恵器の組成と異なり、杯・碗・皿類と壺・鉢・甕類の構成が多くなる。

杯A(83~108)・110~124) 平底1類で口縁部の回転ナデ仕上げで丁寧に薄く端部を作るa類23点(83・93・95・97・99・102・103・105・106・108・110・111・113・121)、回転ナデで

強く外反するb類10点(98・101・112・114~120)と椀A類と同様に意識的に強い回転ナデで内面を厚く造りだし外反するc類1点(100)がある。丸底2類で口縁部が回転ナデ仕上げで丁寧に薄く端部を作るa類1点(94)、椀A類と同様に意識的に強い回転ナデで内面を厚く造りだし外反するc類4点(104・107・120・123)がある。また平底1類aで体部中央に椀C3類等の影響を受け沈線を巡らすもの(122)が1点ある。そして124は重焼き資料である。法量をみると口径13.0~16.7cm、器高3.0~4.4cm、底径6.7~9.5cmを計り、口径で14.8cm、器高3.7cm、底径8.4cmにピークをみる。

一方、ヘラ記号資料が18点(85・87・90・93・97~99・102・103・107・112・114・11~122)があり、「一」9点、「一+細線」1点、「×」6点、「井」・「井+」2点である。製品の回転ヘラ切り難しと乾燥時の底部圧痕資料(100・122)もある。

杯B(125~148) 杯Bのうち平底1類は、回転ヘラ切り後に高台を底端部よりやや内側に貼付けるa類と端部に貼付けるb類に分かれる。1類aは130・133とも口縁部が回転ナデ仕上げで丁寧に薄く端部を作るa類である。1類bは口縁部が回転ナデ仕上げで丁寧に薄く端部を作るa類7点(127・134~136・139~141)と回転ナデで強く外反するb類1点(137)と椀A類と同様に意識的に強い回転ナデで内面を厚く造りだし外反するc類2点(125・146)がある。また、丸底の杯部に高台を貼付ける2類があり、1類同様に口縁部の形態によりa類3点(126・129・131)、b類2点(147・148)とc類4点(132・143~145)があり、さらにd類としてやや内湾する口縁部の2点(138・142)に分かれる。

高台の貼付け時の「ツメ手法」が126・131・133・137・141・142・148の多くに見られる。

法量は口径12.5~17.3cm、器高4.3~6.0cmを計り、高台が細く低い杯B4点(134・138・139・148)もある。

杯Aと同様にヘラ記号資料が多く、10点(129・130・131・133・137・138・141・145・147)あり、「一」5点、「×」1点、「井」2点、「×+」1点、「渦文」1点である。

椀A(149~153) 椀Aは口縁部が意識的に強い回転ナデで内面を厚く造りだし外反するc類で高い高台を貼付けの器形である(149・150・152)が、回転ナデで強く外反するb類(151・153)もある。153は重焼き資料であり、150は重焼き時に砂を用いている。

法量は口径15.7~17.2cm、器高4.8~6.2cmを計る。また、ヘラ記号資料151は「×」を描くものがある。

椀B(154~163) 椀Bは底見込みを整形する際に丸く立ち上がるa類(157)と体部でやや段を付けるb類(154~156・158・160~163)、そして凹み気味の段を付けるc類(159)に分かれる。口縁部はやや外反するものもあるが、回転ナデ仕上げで丁寧に薄く端部を仕立てている。底部回転ヘラ切り難し時の技術の差によって、平高台が低いものと高いものがある。そして、底部

回転ヘラ切り離しと乾燥時の台の圧痕を拓影で示す(155)。

法量は口径15.6~16.9cm、器高5.4~6.2cm、底径7.1~8.0cmを測る。

ヘラ記号資料は4点(155・155・157・159)があり、「一」1点、「二」2点、「雷・Σ」1点がある。

碗C2(181~184) 碗C2は碗Bの底見込み整形a類と同じで、体部中位にヘラにより沈線・段を描き、底部切り離しを回転糸切り手法で行うものである。口縁部はやや外反する。

法量は口径18.5~21.0cm、器高6.6~7.1cm、底径8.2~9.2cmを測る。杯B・碗Aに比べると大きい。

碗C3(164~180) 碗C3は碗Aの体部中位にヘラによる沈線・段を一、二条施したものである。体部は丸く立ち上がり、口縁部は回転ナデ仕上げで丁寧に薄く端部を仕上げているa類4点(174・175・178・180)と回転ナデで強く外反するb類8点(164・169~172・175・176・179)、意識的に強い回転ナデで内面を厚く造りだし外反するc類3点(165~168)がある。法量は口径15.6~21.7cm、器高4.9~9.2cm、底径8.1~11.9cmを測り、いづれも高台が高い。また口縁部のc類は比較的小型のものがあり、a・b類は杯・碗類で最も大きい器形を呈するものがある(180)。ヘラ記号資料は8点(165・168・170・173~176・180)があり、「一」3点、「井」3点、「雷」1点がある。

皿B2(185~204) 皿B2はいづれも、底から丸く低く立ち上がり、口縁部は意識的に強い回転ナデで内面を厚く造りだし外反するc類を造り出し、高台を貼付ける器形である。

底面見込みに仕上げナデが見られ、重焼き痕も顕著である。

法量は口径13.6~15.4cm、器高2.7~3.4cm、底径6.4~8.1cmを計る。

水瓶(205) 水瓶の口縁部のみであるが、細い頸部から2段に外反して口縁部を造りだし、上位へシャープに摘まみ上げる。口径9.0cmで高さ7.0cmを残す。

壺A(206・207) 206は水瓶の同一個体の丸い体部下半となりうるもので、ヘラで二条沈線が体部を区画しており、特に下位の沈線は微高帯気味に粘土が盛り上がっている。種輪整形での底造りの時のヘラの当たりがシャープである。底径13.0cm、高さ16.9cmを測る。

207は体部中位やや上が最も径が大きくなり、体部に沈線や突帯が見られない壺Aである。底造りは碗Bc類の段を高くしたものと似ており、整形技法の共通性を見いだす。なお、底は焼け重んでおり、底径10.6cm、高さ17.0cmを測る。

壺B2(212) 壺B2は平底で体部前に二条沈線で区画割りつけを施し、沈線を跨ぐように?形の双耳を貼付け、ラッパ状に口縁部が開き、二重口縁気味に上方へ摘まみ上げる。口縁端部はシャープである。法量は口径12.7cm、器高29.4cm、底径12.0cmを計り、底端部はヘラで面取りが施されている。

壺B4(213~224) 壺B4は壺B2の沈線が突帯に付加された器形である。種輪整形を行うが、粘

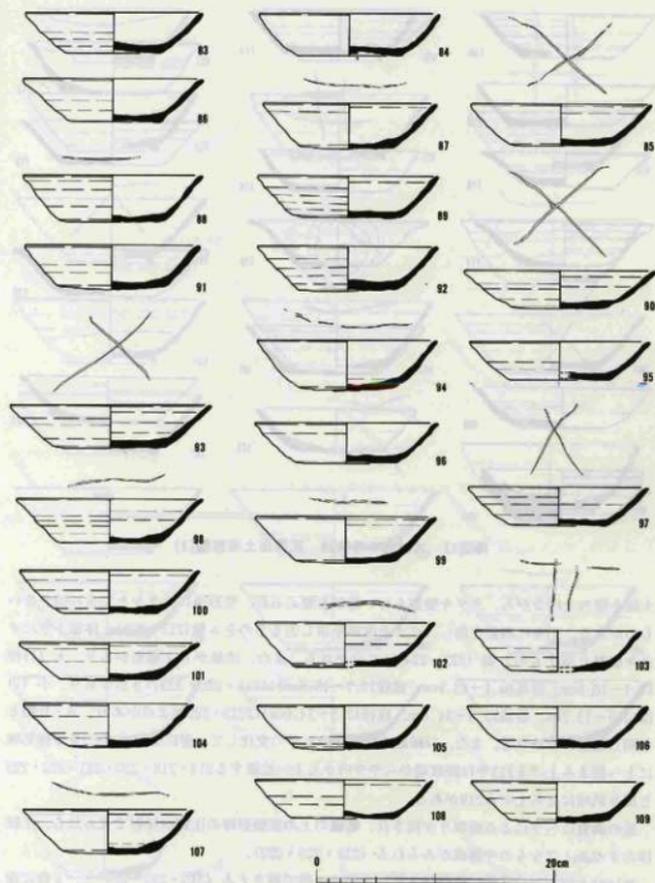
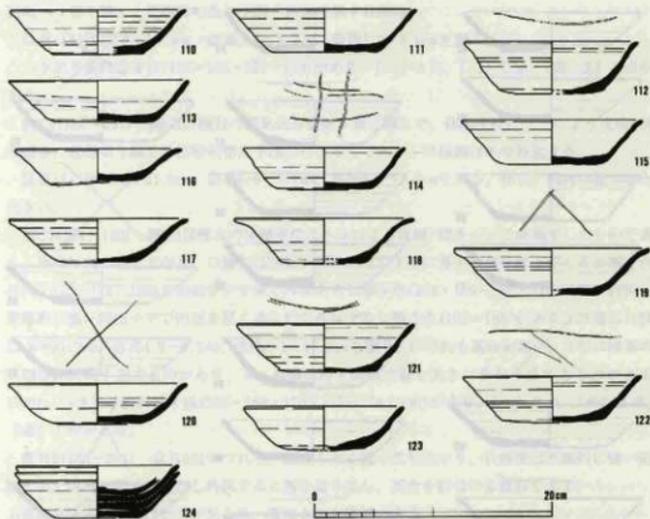


插图41 古城山1号窖藏 周濠·灰原出土须惠器(1)



挿図42 古城山1号窯跡 灰原出土須恵器(2)

土紐を積み上げながら、タタキ整形を行い器形を整えるが、整形後にタタキを完全に消さないものがある。丁寧に調整を施し、タタキ痕跡を消し去るものをa類(213~221)、体部下半にタタキ痕跡を残すものb類(222~224)に分かれる。また、法量から2類型があり、大(口径14.1~16.8cm、器高40.1~43.9cm、底径13.7~15.5cm)は218・220・223の3点があり、小(口径12.9~13.2cm、器高33.5~34.4cm、底径12.5~14.0cm)は213・222の2点があり、a・b類とも同じ類型に分かれる。また、口縁部の形態が少しずつ変化して、壺B2のように二重口縁気味に上へ摘まみ上げる213や口縁部端からやや内から上へ拡張する214・218・220・221・222・223と反り気味に立ち上がる219がある。

底の調整にヘラによる面取りが施され、轆轤の上の底整形時の圧痕が拓影で見られる。下駄印のネガティブなものや傷痕がみられる(213・220・222)。

耳は粘土板を下位突帯に貼付ける時に?形の一段で押さえる(215・223・224)と、2段に指で上下に押さえる(220)と、そして2条の粘土を寄せて2段に指で上下に押さえる(218)等がある。

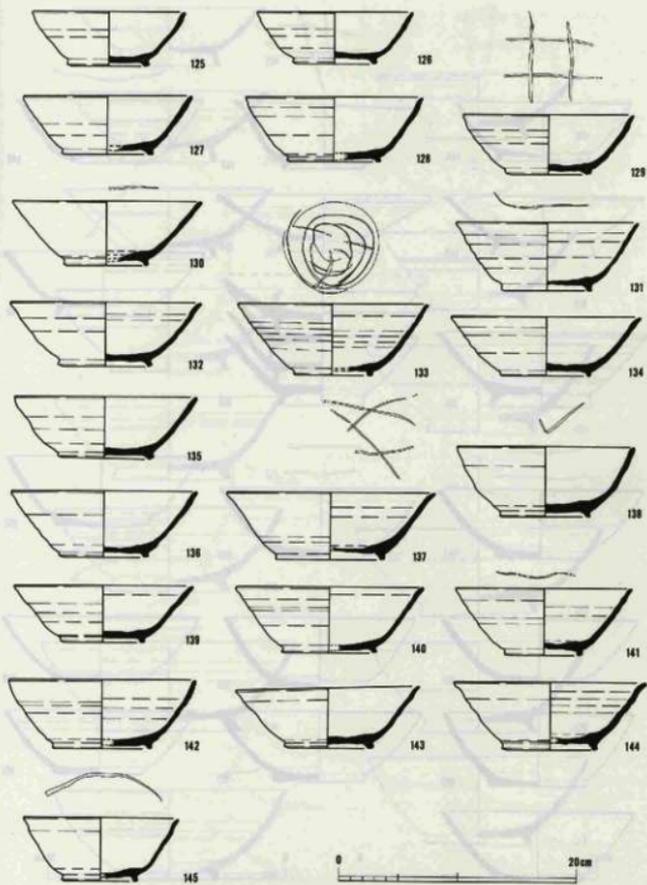


插图43 古城山1号窟跡 灰原出土須惠器(3)

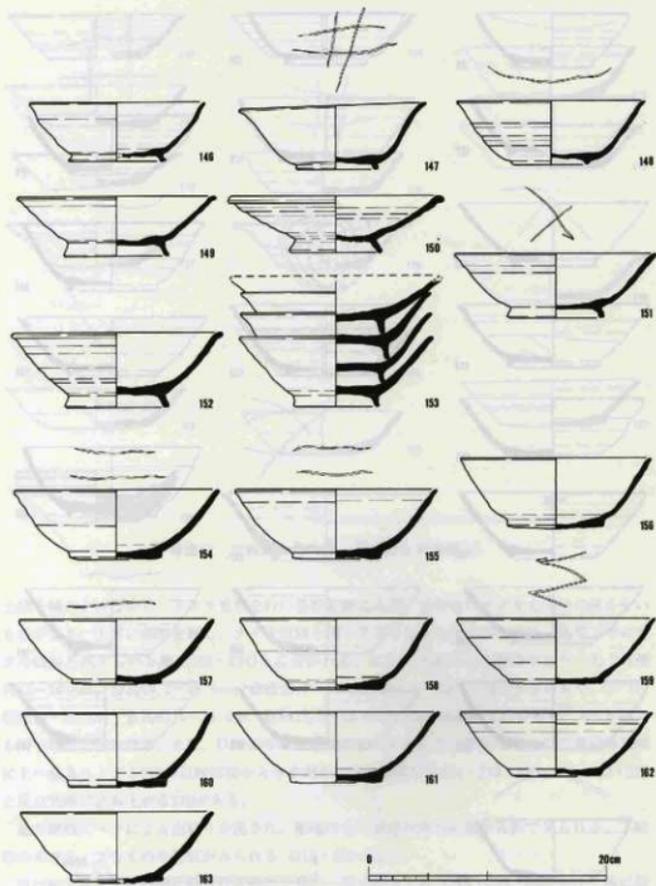


插图44 古城山1号墓陪 灰厝出土须惠器(4)

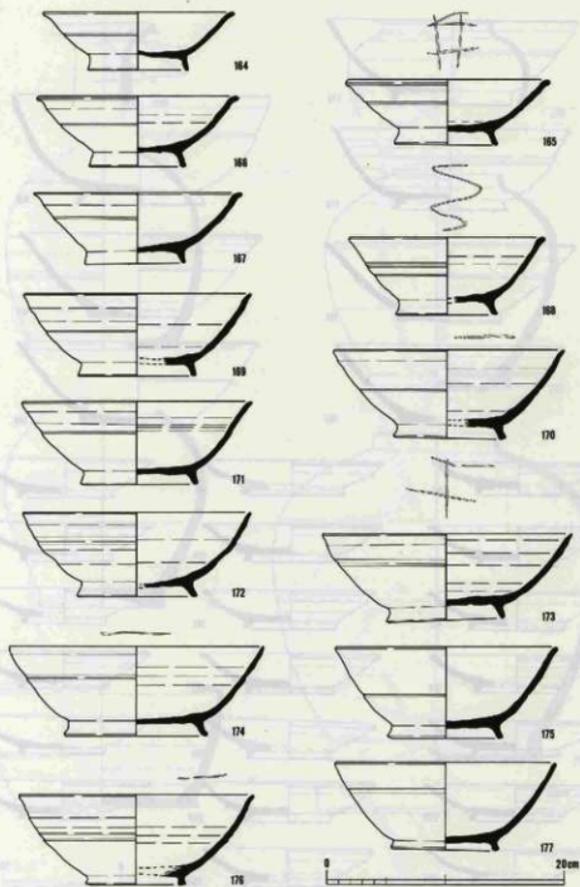


插图45 古城山1号窟跡 灰原出土須臾器(5)

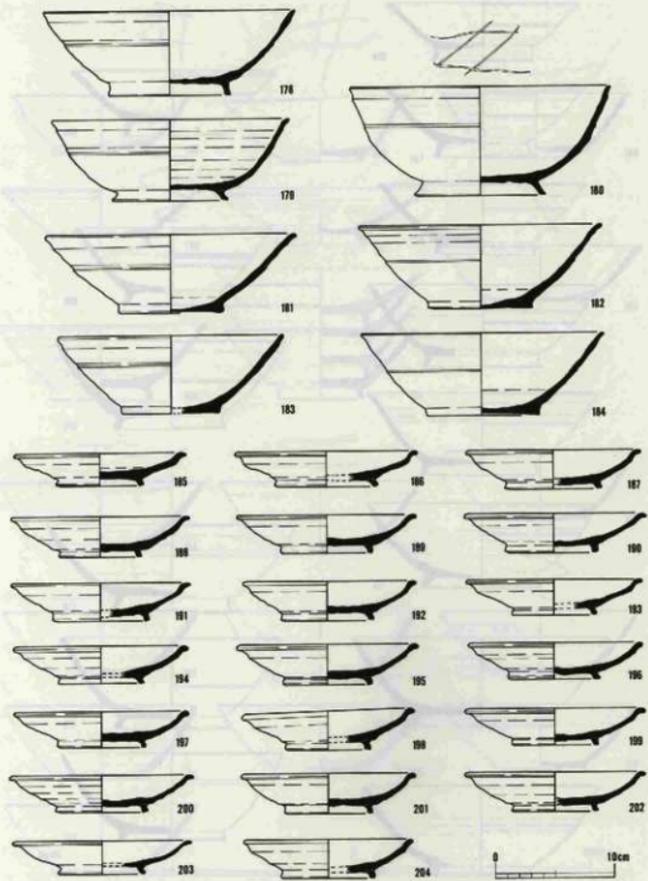


插图46 古城山1号窟跡 灰原出土須惠器(6)

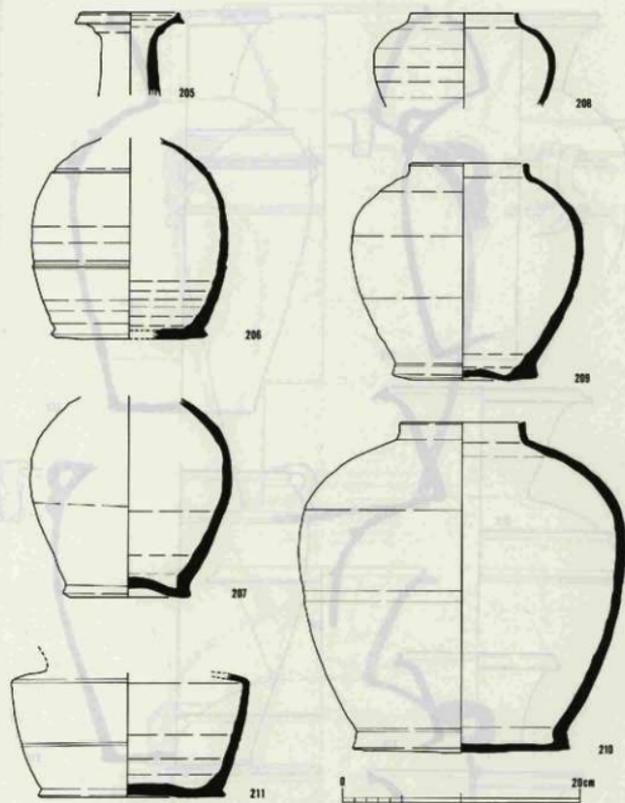


插图47 古城山1号窖址 灰原出土须惠器(7)

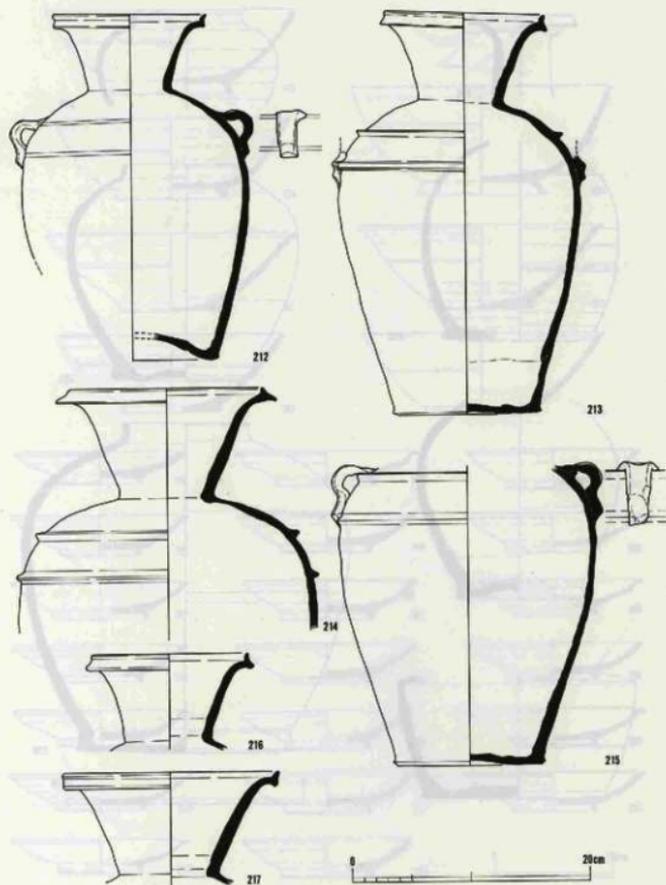


插图48 古城山1号窟跡 灰原出土須惠器(8)

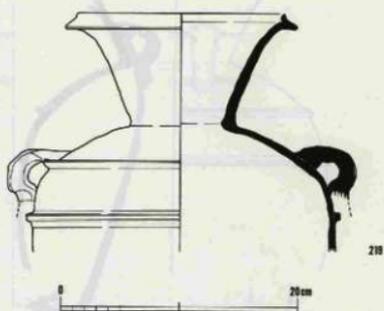
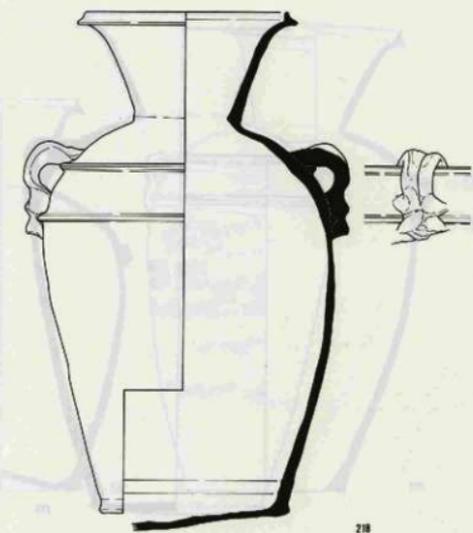


插图49 古城山1号窑址 灰原出土须惠器(9)

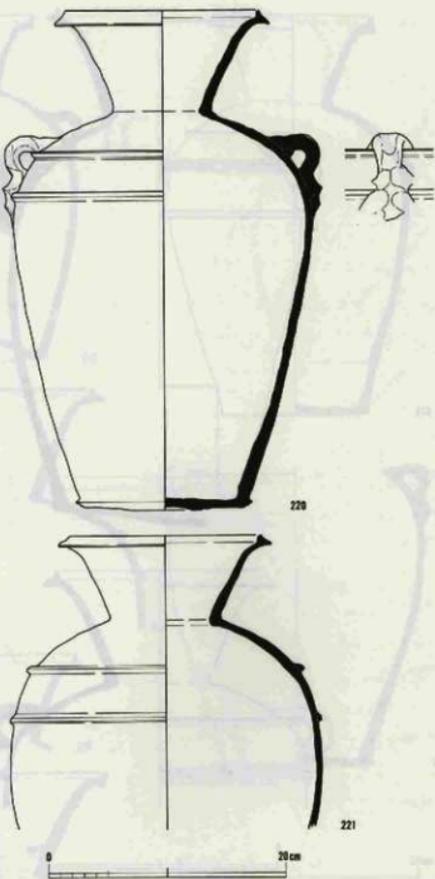


插图50 古城山1号窟跡 灰原出土須惠器(10)

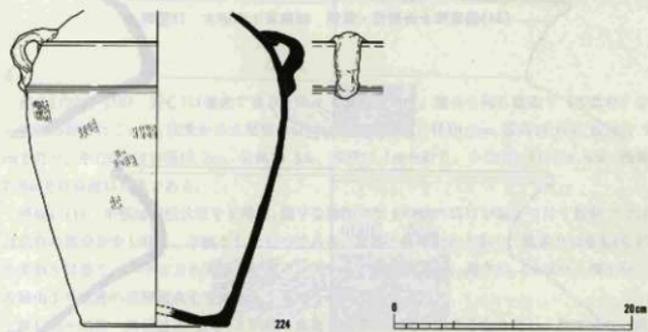
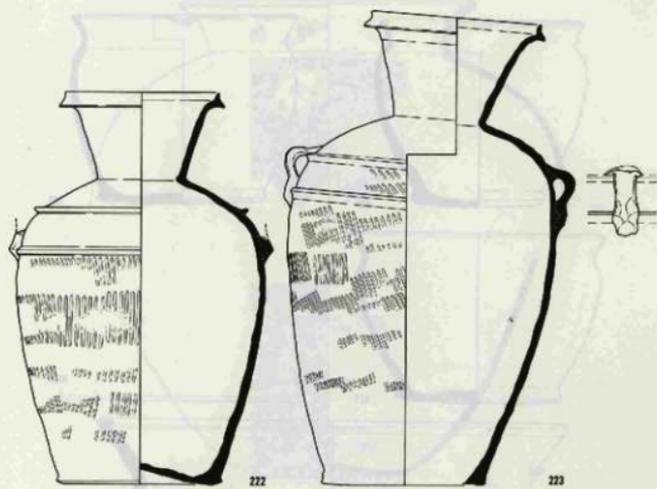


插图51 古城山1号窟跡 灰原出土須惠器(11)

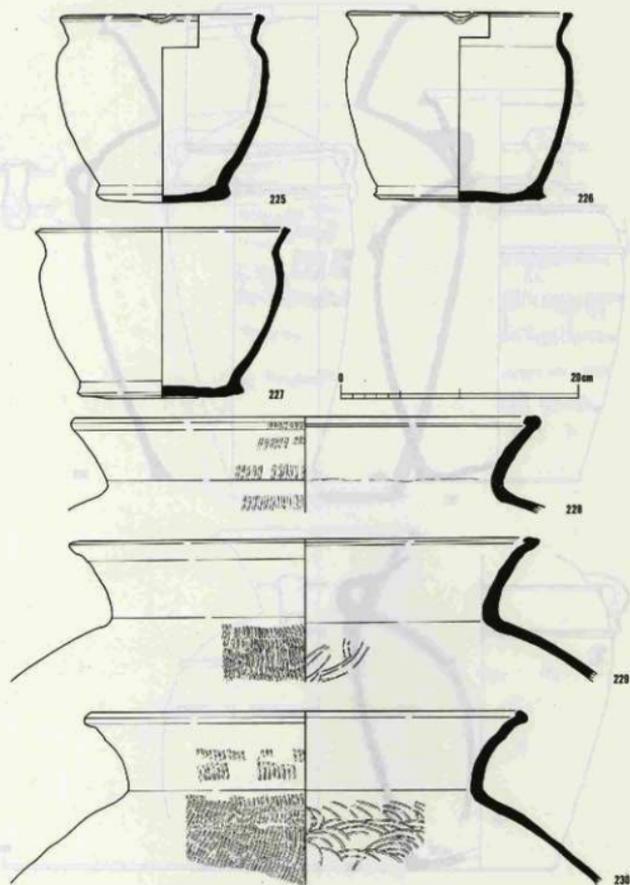
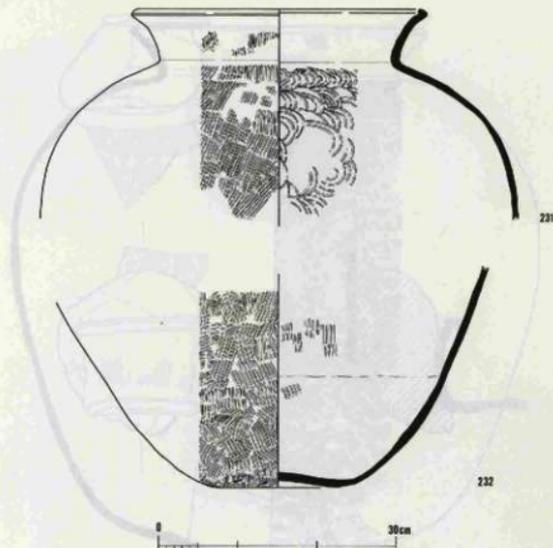


插图52 古城山1号窟跡 灰原出土須惠器(12)



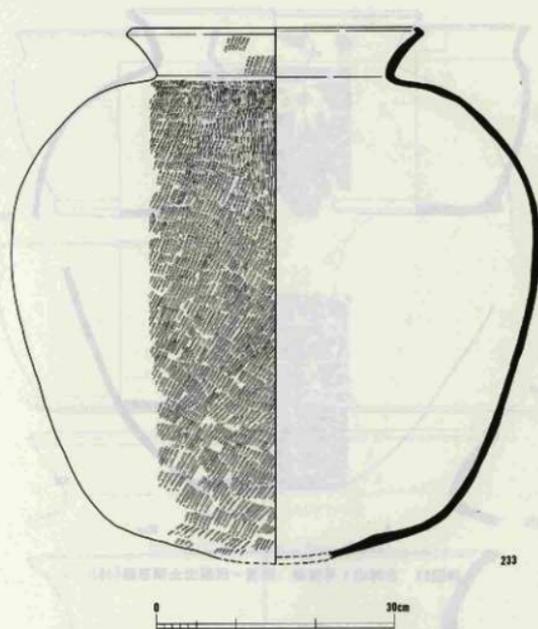
挿図53 古城山1号窟跡 周溝・灰原出土須恵器(13)

る。

壺C1(208~210) 壺C1は葉壺で蓋Bを被せる器形であり、壺Aと同じ底造り(平高台)から軸輪整形されている。法量から3類型に分かれ、大(210)は口径10.2cm、器高28.0cm、底径17.9cmを計り、中(209)は口径10.2cm、器高18.3cm、底径12.1cmを計り、小(208)は口径8.8cm、残高7.9cmを計る直口の壺である。

平瓶(211) 平瓶は方板状把手を持ち、扁平な体部にラッパ状の広口が偏って付く器形で、211は広口の部分が少し残り、平瓶としたものである。底部圧痕拓影のとおりに、底造りは壺B4などと変わり無く、ヘラによる面取りが施されている。底径15.7cm、高さ10.4cmばかり残すが、古城山1号窟跡の器種組成を考える上で重要な資料である。

鉢(225~227) 鉢は壺A・壺C1と同様の底造りがされ、丸く体部を造りだし上位で絞り、斜め上方へ開く器形となる。口縁部は端部がシャープなもの(227)とやや丸くまとまる(225・22



挿図54 古城山1号竈跡 灰原出土須恵器(14)

6)があり、本来片口を有する。法量は口径17.1~21.3cm、器高14.2~15.8cm、底径11.2~14.3cm計る。

甕(228~231・233) 甕は轆轤の上で粘土紐積み上げで平行タタキ整形で器形を整えて作られるが、内面のタタキ当て具痕を完全に消すもの(233)とタタキ当て具痕を残すもの(228~231)がある。口縁部の形態は外反しながら開き、逆に返り短く纏まる。器形を復原できる233は口径35.6cm、器高68.2cm、最大胴径66.6cmを計る。

竈道具(234・235) 竈体斜面床面に製品を積むために、自然石を駒爪としてかませ安定を計

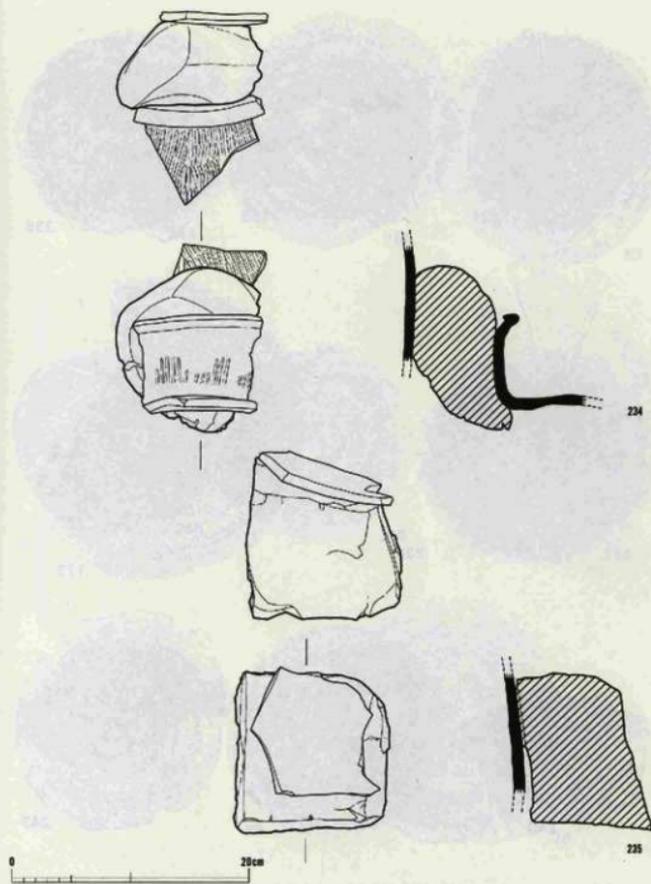
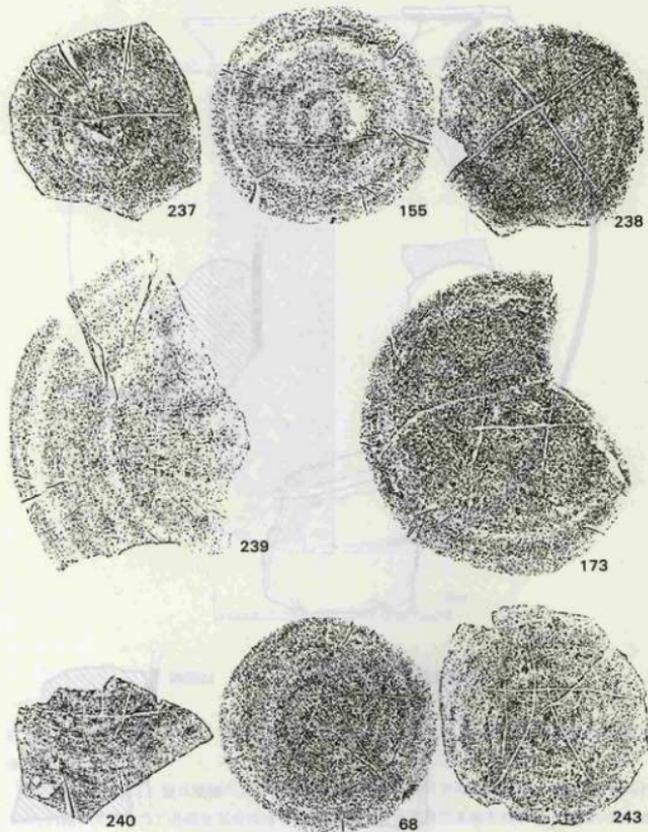
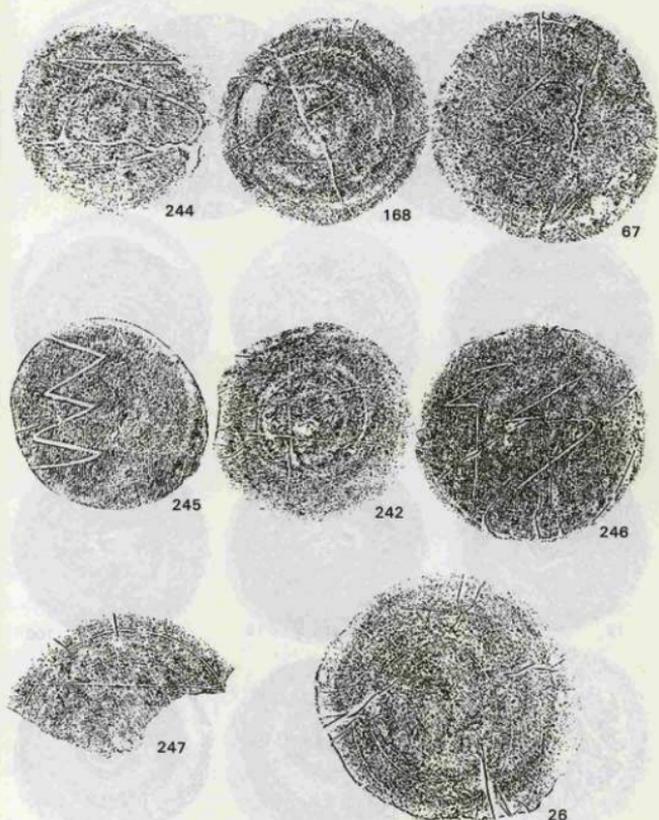


插图55 古城山1号窑址 灰原出土须惠器(15)、窑道具



挿図56 古城山1号窯跡 ヘラ記号拓影(1)



挿図57 古城山1号窟跡 ヘラ記号拓影(2)

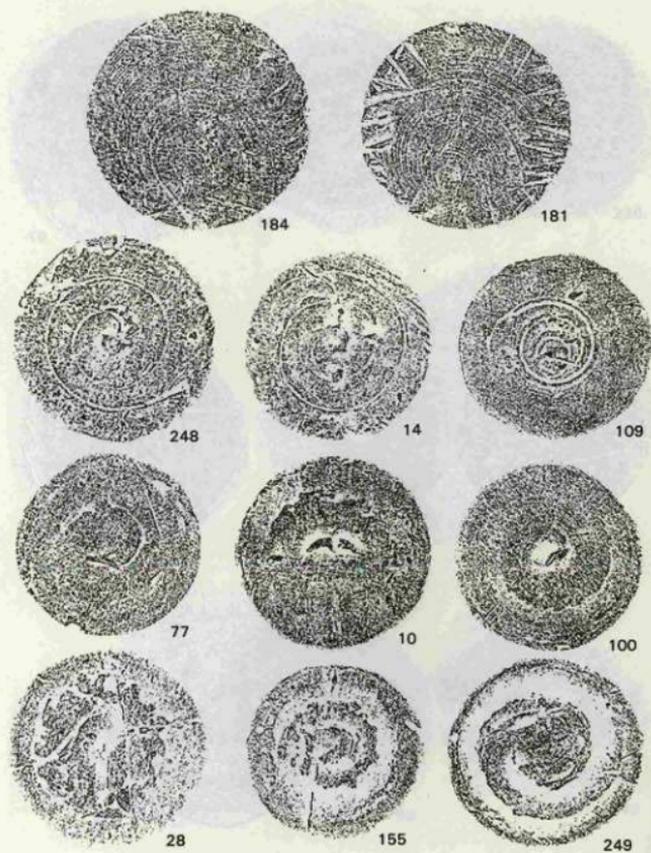


插图58 古城山1号窟跡 底部压痕拓影(1)

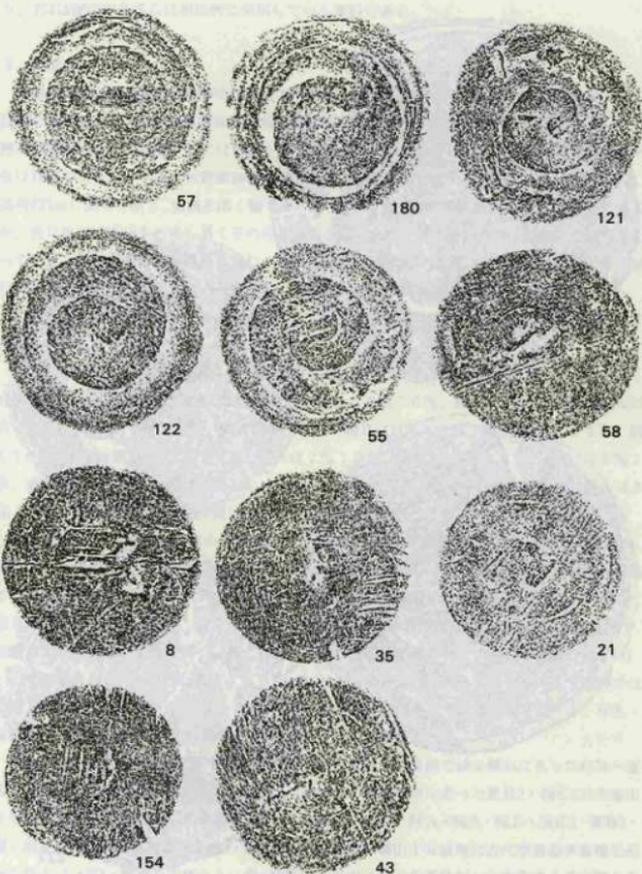
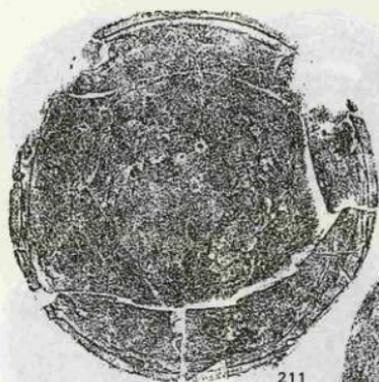


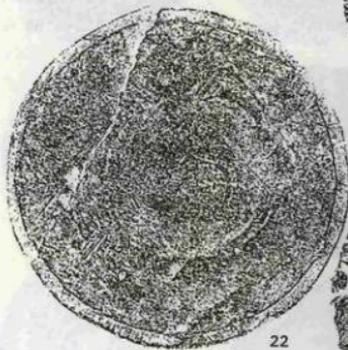
插图59 古城山1号窟迹 底部任痕拓影(2)



211



213



22



222

插图60 古城山1号甬趾 底部压痕拓影(3)

り、234は破砕片をさらに補助的に使用している資料である。

5. 小結

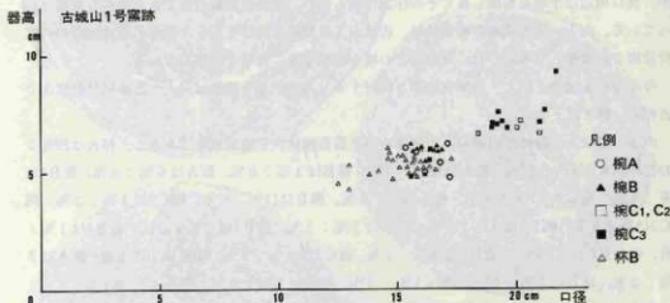
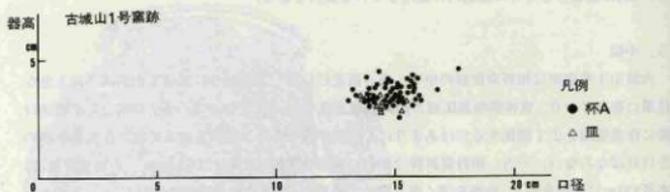
古城山1号窯跡は相野窯跡群の中で、最も西北に位置しており、窯場を山斜面の最も急な位置に拵えており、窯体燃焼部床面の傾斜も最も急で31~38°に作っている。窯場としては焚口際に作業空間を広く確保するにはあまりにも傾斜が急である。谷部を越えて北に作業場を求めなければならない。一方、相野窯跡群で初めに操業を開始したと考えている向上・古城窯跡群は、高所233mに窯場を築き、地面を深く掘り窪めて整形し、窯体燃焼部床面の傾斜も32°と急であるが、焚口周辺は平場を形成し易くその作業空間も広い。相野窯跡群の中で広く平らな窯場となっている。向上・古城窯跡群操業後に、古城山1号窯跡は再び安定した窯場の選地のための試行段階での操業とも考えられ、丹波国との境を眺める地に窯場を形成している。

生産される遺物を向上・古城窯跡群と検討すると古城山1号窯跡は向上・古城窯跡群に次ぐ古相の一群と言える。

向上・古城1号窯跡と古城山1号窯跡の須恵器器種組成を組成比率でみると、杯Aは29%：43%、杯Bは7%：17%、蓋Aは13%：0%、蓋Bは1%：0%、皿Aは6%：0%、皿B1は有：0%、皿B2は1%：9%、椀Aは有：3%、椀Bは11%：5%、椀C2は1%：2%、椀C3は有：8%、椀D1は2%：0%、壺Aは2%：2%、壺B1は3%：0%、壺B2は1%：有、壺B3は1%：0%、壺B4は3%：5%、壺C1は8%：2%、平瓶は1%：有、鉢Aは2%：2%、鉢Bは1%：0%、甕は4%：3%、羽釜は2%：0%となる。

向上・古城1号窯跡から古城山1号窯跡への組成の変化をみると、杯Aは増加、杯Bは減少、蓋Aは消滅、蓋Bは壺C1の存在から減少、皿A・皿B1は消滅、皿B2は増加、椀Aは増加、椀Bは減少、椀C2は増加、椀C3は増加、椀D1は消滅、壺Aは同じ、壺B1は消滅、壺B2は減少、壺B3は消滅、壺B4は増加、壺C1は減少、平瓶は減少、鉢Aは同じ、鉢Bは消滅、甕は減少、羽釜は不明（古城山1号窯跡では出土していないが、次に生産されているので消滅ではない）という現象がある。つまり、皿A・皿B1・椀D1・壺B1・壺B3・鉢Bは古城山1号窯跡では消滅する器種で、杯B・壺B2・壺C1・平瓶・甕は減少傾向を示す器種であり、一方、杯A・皿B2・椀A・椀C2・椀C3・壺B4が増加傾向を示す器種である。

また、次代の古城窯跡群と同様に検討すると、古城山1号窯跡で減少傾向にあった杯B・壺B2・壺C1はほぼ消滅傾向を示し、平瓶は消滅する。増加傾向にあった皿B2・椀C2は古城山1号窯跡でピークをむかえ消滅していることが判る。一方、杯A・椀A・椀B・椀C3・壺B4・甕・羽釜は安定した器種組成を占めている。つまり、古城山1号窯跡は古代須恵器多器種生産から杯A（→皿）・椀類を主体とし、壺・甕類を従属的に行う生産体制へと変化する過渡期と考えられる。



挿図61 古城山1号窯跡須恵器法量グラフ

ここで、須恵器杯・椀・皿類の法量を検討すると

■杯Aは口径13.0~17.6cm、器高3.0~4.4cm、底径6.7~9.5cm

■杯Bは口径12.5~17.3cm、器高4.3~6.0cm、底径6.4~8.6cm

■皿B2は口径13.5~15.9cm、器高1.5~3.4cm、底径6.4~8.1cm

■椀Aは口径15.3~17.2cm、器高4.8~6.2cm、底径6.8~8.7cm

■椀Bは口径15.6~16.9cm、器高5.4~6.2cm、底径7.1~8.0cm

■椀C2は口径18.5~21.0cm、器高6.6~7.1cm、底径8.2~9.2cm

■椀C3は口径15.6~21.7cm、器高4.9~9.2cm、底径8.1~11.9cm

となり、挿図61は須恵器法量の分布域を示している。杯Aでは皿B2と分布領域が重なるものがあり、器高を減じている。杯Bは椀A・椀B・椀C3と重なる領域を示すものもある。椀C1・椀C2は椀C3の大領域と重なり、椀C3は大小2領域に分かれる。

ヘラ記号は、須恵器233点の約11%の59点(椀皿の小型器形で換算すると約6%となる)で相野窯跡群中、最多の13種類がみられる。器種としては杯A・杯Bが多く、椀A・椀B・椀C3にもある。

轆轤整形で製品を造り、切り離す技法として椀C2のみ回転系切り手法を用いるが、椀C2の中に切り離しに失敗し、何度か試みて底を繋ぎ、そして焼成時に底が欠損したものがある。基本的には古城山1号窯跡以後には、回転系切り手法は認められない。また、杯・皿・椀類の小型器種は、回転ヘラ切り技法を継承していることを特徴としている。

品目	品名	数量	単位	品名	数量	単位	品名	数量	単位
41	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
42	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
43	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
44	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
45	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
46	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
47	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
48	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
49	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
50	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
51	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
52	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
53	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
54	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
55	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
56	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
57	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
58	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
59	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
60	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
61	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
62	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
63	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
64	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
65	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
66	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
67	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
68	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
69	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
70	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
71	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
72	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
73	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
74	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
75	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
76	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
77	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
78	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
79	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
80	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
81	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
82	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
83	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
84	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
85	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
86	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
87	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
88	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
89	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
90	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
91	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
92	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
93	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
94	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
95	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
96	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
97	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
98	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
99	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点
100	須恵器	13	点	須恵器	13	点	須恵器	13	点

表5 古城山1号竈跡出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
1	杯A	15.1	3.3	7.8	12/12	一方向ナテ 垂み 火押	竈体7区
2	杯A	14.8	3.7	8.2	6/12		竈体2区
3	杯A	14.0	3.2	7.9	5/12	一方向ナテ	竈体3区
4	杯A	17.6	4.5	8.8	2/12	ヘラ切り後ナテ	竈体埋土
5	杯A	14.2	3.3	7.8	9/12		竈体8区
6	杯A	15.7	4.2	8.5	11/12		竈体8区 拓影
7	杯A	15.7	3.9	8.3	12/12		竈体7区
8	杯A	15.3	3.6	8.3	11/12	ヘラ二 右ロクロ	竈体1区 拓影
9	杯A	15.2	3.5	8.8	12/12		竈体1区
10	杯A	15.7	3.7	7.9	12/12		竈体6区 拓影
11	杯A	15.0	3.3	8.5	11/12		竈体7区
12	杯A	15.0	3.4	8.5	12/12	底見込み中央指ツマミ	竈体8区
13	杯A	14.1	3.4	7.6	8/12	底に竈体付着有り 右ロクロ	竈体1区
14	杯A	15.5	3.5	8.1	12/12		竈体1区 拓影
15	杯A	15.0	3.1	8.0	12/12	ヘラ切り2度の痕跡	竈体8区
16	杯A	14.6	3.1	8.0	11/12	一方向ナテ 粘土痕	竈体セクション1・2区 拓影
17	杯A	15.1	3.1	8.3	12/12	右ロクロ	竈体セクション1・2区
18	杯A	15.7	3.0	8.0	11/12	ヘラ細線×	竈体
19	杯A	15.2	3.1	8.2	6/12		竈体
20	杯A	14.9	3.5	8.2	8/12		竈体1区
21	杯A	14.6	3.4	8.1	9/12	右ロクロ	竈体1区 拓影
22	杯A	14.6	3.0	7.4	11/12	ヘラZn 右ロクロ	竈体8区
23	杯A	15.2	3.8	7.9	10/12	ヘラ× 強い回転ナテ	竈体8区
24	杯A	15.5	4.1	8.5	12/12	ヘラ一 一方向ナテ右ロクロ	竈体埋土
25	杯A	14.9	3.5	9.0	9/12	一方向ナテ 右ロクロ	竈体埋土
26	杯A	15.1	3.9	8.2	4/12	ヘラ渦文一方向ナテ右ロクロ	竈体埋土
27	杯A	14.8	3.2	8.0	10/12	一方向ナテ 右ロクロ	竈体下層床
28	杯A	15.7	3.7	8.3	9/12		竈体埋土 拓影
29	杯A	15.8	3.8	8.5	8/12	乾燥台痕	竈体セクション1・8区
30	杯A	14.9	3.0	8.9	2/12	乾燥台痕一方向ナテ	竈体床下
31	杯A	15.5	3.5	8.8	11/12	重焼き痕	竈体1区
32	杯A	14.9	4.0	9.0	11/12	重焼き痕剥離	竈体内No.7
33	杯A	15.2	3.3	8.4	12/12		竈体埋土
34	杯A	13.8	3.2	7.6	11/12	乾燥台痕 一方向ナテ	竈体内No.4
35	杯A	14.7	3.5	8.1	8/12	乾燥台痕 指オサエ	竈体内No.25 拓影

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
36	杯A	15.5	3.8	7.8	6/12	ヘラ× 一方向ナデ	竈体内No.4
37	杯A	15.3	3.2	8.6	6/12	乾燥台板	竈体埋土
38	杯A	15.8	3.9	9.3	5/12	ヘラー	竈体内No.11
39	杯A	15.1	3.5	8.1	7/12	乾燥台板 右ロクロ	竈体1区
40	杯A	15.9	4.1	8.7	4/12	ヘラー 一方向ナデ	竈体埋土
41	杯A	14.9	3.6	8.3	3/12	ヘラ切板	竈体埋土
42	杯A	14.6	3.2	7.8	9/12		竈体1区
43	杯A	13.9	3.5	7.5	6/12	ヘラ切後ナデ	竈体1区
44	杯A	14.2	3.8	7.8	3/12	ヘラサ? 底平滑ナデ	竈体埋土
45	杯A	15.5	3.4	8.4	1/12	不定仕上げナデ 右ロクロ	竈体7区
46	杯A	14.8	3.3	8.2	6/12	竈体付着剥離	竈体1・8区 拓影
47	杯A	15.8	3.2	9.4	3/12	重焼き砂 ヘラ切底ナデ	竈体埋土
48	杯A	14.2	3.4	8.9	3/12	乾燥台板	竈体埋土
49	杯A	15.1	3.9	8.2	7/12	重焼き砂 右ロクロ	竈体8区
50	杯A	15.3	3.8	9.4	4/12		竈体2区
51	杯A	14.8	3.6	7.7	3/12	ヘラー	竈体埋土
52	杯A	14.8	3.3	8.2	6/12		竈体8区
53	杯A	15.6	3.7	8.1	11/12	ヘラー ヘラ切り板	竈体1区 拓影
54	杯A	14.1	3.1	7.4	3/12	ヘラー+α 重焼き砂	竈体7区
55	杯A	15.6	4.0	8.1	11/12	ヘラー	竈体8区 拓影
56	杯A	13.9	3.7	7.6	10/12	重焼き砂	竈体内No.12
57	杯A	15.7	3.5	7.9	8/12	ヘラー	竈体8区 拓影
58	杯A	15.8	3.9	8.2	8/12	ヘラー 右ロクロ	竈体8区 拓影
59	杯A	15.1	2.5	8.2	12/12	ヘラー 竈体付着 右ロクロ	竈体埋土
60	杯B	14.0	5.7	7.6	4/12		竈体埋土
61	杯B	15.7	5.5	7.3	3/12	高台ツメ手法	竈体8区
62	杯B	15.7	5.6	7.1	6/12	火棒	竈体2区
63	杯B	15.1	5.7	7.6	2/12	ヘラニ 高台ツメ手法	竈体埋土
64	杯B	15.9	5.1	7.9	3/12	高台ツメ手法	竈体内No.2
65	杯B	16.4	5.2	7.7	6/12		竈体1区
66	杯B	15.5	5.0	7.5	3/12	ヘラ大	竈体内No.1
67	杯B	15.4	5.2	8.2	2/12	ヘラ雷 高台貼付ナデ指紋	竈体3区
68	杯B	15.8	4.8	8.0	4/12	ヘラ大 重焼き砂	竈体1区
69	杯B	16.1	5.2	7.8	2/12		竈体1区
70	杯B	16.0	5.4	7.3	6/12	一方向ナデ	竈体1・8区

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
71	杯B	15.1	5.2	7.5	3/12	ヘラニ 重焼き砂	竈体埋土
72	杯B	16.6	5.1	8.1	9/12	ヘラ溝文 右ロクロ	竈体埋土
73	杯B	15.3	6.0	6.8	6/12	ヘラ× 重焼き砂 ツメ	竈体埋土
74	杯B	14.6	6.0	7.2	2/12	ヘラー 高台貼付強ナデ	竈体埋土
75	碗A	17.0	6.2	8.7	2/12	一方向ナデ 重焼き痕	竈体埋土
76	碗A	16.1	4.9	8.4	6/12		竈体1・8区
77	碗B	16.2	5.9	7.8	12/12	火罨	竈体1区
78	碗C3	19.5	7.1	9.5	2/12		竈体内No.14
79	皿B	15.2	2.8	7.4	4/12		竈体埋土
80	皿B	13.5	3.4	7.1	2/12	高台ツメ手法	竈体埋土
81	甕	39.8	9.0		3/12	タタキ	竈体8区
82	甕	41.8	12.8		6/12	タタキ	竈体2/3/7区
83	杯A	14.7	3.4	8.1	3/12	ヘラ切痕ナデ 右ロクロ	灰原 斜面谷
84	杯A	15.0	3.3	8.9	6/12	乾燥台痕 右ロクロ	灰原2/7セク 拓影
85	杯A	15.0	3.5	8.4	8/12	ヘラ× 竈体付着	灰原 斜面谷
86	杯A	14.8	3.7	8.0	12/12	一方向ナデ 火罨 右ロクロ	灰原 斜面谷 拓影
87	杯A	14.5	3.7	8.2	8/12	ヘラー	灰原 斜面谷
88	杯A	15.0	3.9	8.8	6/12	ヘラー	灰原 斜面谷
89	杯A	15.1	3.6	9.5	11/12	一方向ナデ	灰原 斜面谷
90	杯A	16.0	3.2	8.2	3/12	ヘラ× 見込みナデ右ロクロ	灰原 斜面谷
91	杯A	14.5	3.7	9.0	4/12	ヘラ切痕	灰原 斜面谷
92	杯A	14.9	3.7	8.2	4/12	乾燥台痕	灰原 斜面谷
93	杯A	16.7	3.6	9.4	3/12	ヘラ×	灰原 斜面谷
94	杯A	13.8	4.2	7.1	2/12	ヘラー	灰原 斜面谷
95	杯A	14.8	3.2	8.4	3/12	乾燥台痕	灰原 斜面谷
96	杯A	15.2	3.4	8.2	4/12	乾燥台痕	灰原 斜面谷
97	杯A	14.9	3.3	8.1	3/12	ヘラ×	灰原 斜面谷
98	杯A	15.5	3.7	8.5	3/12	ヘラー	灰原 斜面谷
99	杯A	14.8	3.9	8.4	3/12	ヘラー	灰原 斜面谷
100	杯A	14.9	3.6	8.0	3/12	ヘラ切り痕	灰原 斜面谷 拓影
101	杯A	14.8	3.1	8.0	4/12		灰原セク
102	杯A	14.8	3.7	8.5	3/12	ヘラ細線 仕上げナデ	灰原 斜面谷
103	杯A	13.8	3.5	7.8	6/12	ヘラ×?	灰原 斜面谷
104	杯A	14.1	3.7	6.7	3/12		灰原 斜面谷 拓影
105	杯A	14.1	3.3	8.4	6/12	ヘラ切痕ナデ 一方向ナデ	灰原セク

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
106	杯A	14.9	3.0	8.4	4/12	右ロクロ	灰原 斜面谷
107	杯A	13.9	3.7	7.8	11/12	ヘラヘラ切り後ナテ	灰原
108	杯A	14.8	3.2	8.7	4/12		灰原 斜面谷 拓影
109	杯A	14.1	3.4	8.3	6/12	ヘラ切り痕 仕上げナテ	富体東表土
110	杯A	14.5	3.7	7.6	6/12	ヘラ切り痕ナテ	灰原2区谷
111	杯A	15.1	3.6	8.9	4/12	ヘラ切り痕ナテ	灰原2区谷
112	杯A	14.3	4.4	8.8	3/12	ヘラ	灰原 谷
113	杯A	14.8	3.5	8.5	12/12		灰原 斜面谷
114	杯A	13.3	3.5	7.8	3/12	ヘラ二三	灰原 斜面谷
115	杯A	14.6	3.7	8.0	3/12	ヘラ切痕ナテ 一方向ナテ	灰原セク
116	杯A	13.7	3.2	7.1	8/12	一方向ナテ 右ロクロ	灰原 斜面山
117	杯A	15.0	3.7	6.7	4/12	重焼きの高台付着	灰原 斜面谷
118	杯A	15.0	3.9	7.6	3/12		灰原
119	杯A	16.1	4.0	7.6	3/12	ヘラ×	灰原 斜面谷
120	杯A	14.6	3.4	7.5	3/12	ヘラ×	灰原
121	杯A	14.7	4.1	8.1	8/12	ヘラヘラ へら切痕ナテ	灰原 斜面山
122	杯A	14.6	3.9	8.4	3/12	ヘラ二 沈線杯	灰原 斜面谷 拓影
123	杯A	13.2	3.7	7.2	6/12	仕上げナテ	灰原セク
124	杯A	13.0	3.2	7.0	12/12	重焼き4枚 一方向ナテ	灰原
125	杯B	12.5	4.5	5.9	3/12	ヘラ? 一方向ナテ	灰原
126	杯B	13.0	4.3	7.0	6/12	高台ツメ手法 一方向ナテ	灰原 斜面谷
127	杯B	13.8	4.9	6.8	3/12		灰原セク
128	杯B	14.8	5.5	7.8	4/12		灰原 斜面山
129	杯B	14.2	5.0	7.1	4/12	ヘラ# 重焼き痕	灰原 斜面谷
130	杯B	15.6	5.4	7.0	3/12	ヘラ	灰原
131	杯B	15.2	5.7	7.5	5/12	ヘラ一 高台ツメ手法	灰原 斜面谷
132	杯B	16.0	5.4	7.8	3/12	乾燥台痕	灰原 斜面谷
133	杯B	16.0	6.0	6.6	8/12	ヘラ渦文 高台ツメ手法	灰原 斜面谷
134	杯B	15.7	4.9	7.5	3/12		灰原 斜面谷
135	杯B	15.1	5.2	8.0	4/12	高台ツメ手法	灰原 斜面谷
136	杯B	15.3	5.5	6.7	3/12		灰原セク 拓影
137	杯B	17.3	5.6	8.9	6/12	ヘラ×二 高台ツメ手法	灰原 斜面山 拓影
138	杯B	14.7	5.9	7.5	2/12	ヘラキ?	灰原 斜面山
139	杯B	14.8	4.7	6.4	4/12	仕上げナテ 右ロクロ	灰原 斜面山
140	杯B	15.4	5.5	7.3	4/12		

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
141	杯B	14.6	5.6	6.4	3/12	ヘラー 高台ツメ手法	灰原 谷底
142	杯B	15.4	5.8	8.3	3/12	仕上げナテ 高台ツメ手法	灰原 谷
143	杯B	15.3	5.2	7.4	6/12		灰原 斜面山
144	杯B	15.7	5.6	7.2	/12	高台ツメ手法	灰原
145	杯B	13.0	5.3	6.3	6/12	ヘラー 重焼き高台付着	灰原 斜面谷
146	杯B	14.6	6.0	8.0	4/12		灰原 斜面谷
147	杯B	15.7	5.4	6.8	10/12	ヘラ#	灰原
148	杯B	15.6	5.4	6.4	2/12	ヘラー 高台ツメ手法	灰原 2区谷底
149	碗A	16.1	5.0	8.6	3/12	一方向ナテ	灰原 谷
150	碗A	17.2	4.8	7.4	8/12	重焼き砂	灰原セク
151	碗A	16.8	5.4	8.0	3/12	ヘラ×	灰原 斜面山
152	碗A	17.1	6.2	8.1	4/12	重焼き高台付着	灰原セク
153	碗A	15.7	5.9	6.9	12/12	重焼き4枚	灰原
154	碗B	16.8	5.9	7.7	12/12	ヘラニ 火棒	灰原 斜面山
155	碗B	16.6	5.9	7.3	8/12	ヘラニ	灰原セク 拓影
156	碗B	15.8	6.0	7.8	8/12		灰原 斜面谷
157	碗B	16.2	5.4	7.5	3/12	ヘラー	灰原谷
158	碗B	15.7	5.9	7.1	3/12		灰原
159	碗B	16.4	5.5	7.7	8/12	ヘラΣ	灰原 斜面谷
160	碗B	15.6	6.2	8.1	3/12	底甲板粘上の繋ぎ	灰原谷
161	碗B	16.9	5.9	7.4	3/12		灰原セク
162	碗B	16.0	5.4	7.4	3/12		右ロクロ 灰原谷底
163	碗B	16.0	6.0	7.7	3/12	火棒 ヘラ切り痕	灰原 斜面山
164	碗C3	15.6	4.9	8.2	3/12	沈線	灰原
165	碗C3	16.4	5.5	8.5	3/12	ヘラ# 沈線	灰原 斜面谷
166	碗C3	16.4	5.9	8.1	2/12	沈線	灰原谷
167	碗C3	17.4	6.0	8.4	8/12	沈線	灰原 斜面谷
168	碗C3	16.4	6.5	8.5	3/12	ヘラ雷2条沈線	灰原 斜面谷
169	碗C3	19.0	6.9	9.8	3/12	ヘラ段状	灰原 斜面谷
170	碗C3	19.2	7.0	9.8	6/12	ヘラ段状 歪み	灰原セク
171	碗C3	19.3	7.5	9.3	8/12	ヘラ段状 重焼き痕	
172	碗C3	19.0	7.1	10.0	3/12	ヘラ段状	灰原セク
173	碗C3	20.7	7.3	9.9	6/12	ヘラキ? ヘラ段状	灰原 斜面谷
174	碗C3	21.2	7.6	11.9	4/12	ヘラー ヘラ段状 ナテ	灰原セク
175	碗C3	18.6	7.7	9.6	6/12	ヘラ沈線 仕上げナテ	灰原 斜面山

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
176	碗C3	19.3	7.6	7.3	6/12	ヘラ細一 ヘラ段状	灰原谷
177	碗C3	18.4	7.3	9.0	9/12	ヘラ二段状	灰原谷底
178	碗C3	21.0	7.1	10.1	3/12	ヘラ段状	灰原 斜面谷
179	碗C3	19.7	6.9	9.7	6/12	ヘラ二段状	灰原セク
180	碗C3	21.7	9.2	10.9	3/12	ヘラ# ヘラ段状	灰原セク
181	碗C2	21.0	6.6	8.8	9/12	糸切り ヘラ段状	灰原 拓影
182	碗C2	20.2	7.1	8.6	6/12	糸切り ヘラ段状 右ロクロ	灰原 拓影
183	碗C2	18.5	6.6	8.2	1/12	糸切り ヘラ二段状	灰原谷底 拓影
184	碗C2	20.1	6.9	9.2	8/12	糸切り ヘラ段状 重焼き	灰原 斜面谷 拓影
185	皿B2	14.4	2.7	7.4	3/12	仕上げナテ	灰原 斜面谷
186	皿B2	14.6	3.0	7.9	3/12	仕上げナテ	灰原 斜面山
187	皿B2	14.6	3.2	8.0	6/12		灰原 斜面谷
188	皿B2	14.3	3.4	6.7	5/12	仕上げナテ	灰原 斜面山
189	皿B2	14.7	3.2	7.3	4/12	仕上げナテ 重焼き痕	灰原セク
190	皿B2	15.1	3.3	7.7	8/12	重焼き	灰原セク
191	皿B2	15.0	3.2	8.1	5/12	仕上げナテ	灰原セク
192	皿B2	13.7	3.4	7.2	6/12	仕上げナテ	灰原
193	皿B2	14.0	3.3	6.4	3/12		灰原 斜面谷
194	皿B2	13.9	3.1	6.6	4/12		灰原 斜面谷
195	皿B2	14.4	3.4	6.7	8/12	仕上げナテ	灰原 斜面谷
196	皿B2	14.4	3.1	7.5	8/12	仕上げナテ 重焼き痕	灰原 斜面谷
197	皿B2	14.0	3.0	6.7	8/12	仕上げナテ	灰原 斜面谷
198	皿B2	13.7	3.4	6.6	7/12	一方ナテ 重焼き痕	灰原セク
199	皿B2	14.2	3.0	6.8	3/12	仕上げナテ	灰原セク
200	皿B2	15.4	3.1	7.8	4/12		右ロクロ 灰原谷
201	皿B2	13.9	3.4	6.8	3/12	一方ナテ	灰原谷
202	皿B2	15.0	3.3	7.2	6/12		灰原 斜面谷
203	皿B2	14.4	2.8	7.2	3/12	重焼き痕	灰原
204	皿B	15.0	3.2	8.1	5/12		灰原セク
205	水瓶	9.0	7.0		/12	口縁のみ	灰原セク
206	壺A		16.9	13.0	2/12	ヘラ二条沈線微高帯気味	灰原セク
207	壺A		17.0	10.6	11/12	底重焼き・焼台付着	灰原谷底
208	壺C1	8.8	7.9		6/12	上半分のみ	灰原谷
209	壺C1	10.2	18.3	12.1	4/12	底端ヘラ面取り	灰原セク
210	壺C1	10.2	28.0	17.9	8/12	底端ヘラ面取り2cm幅粘上	灰原セク

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
211	平瓶		10.4	15.7	8/12	底端へら面取り 口縁欠け	灰原谷
212	壺B2	12.7	29.4	12.0	9/12	底端へら面取り へら沈線	灰原セク 拓影
213	壺B4	13.2	34.4	12.5	12/12	底端へら面取り 耳欠け	灰原
214	壺B4	15.9	25.0		12/12	上半分のみ 耳欠け	灰原谷
215	壺B4		25.0	12.7	9/12	下半分のみ	灰原谷
216	壺B4	14.0	8.1		6/12	口縁のみ	灰原谷
217	壺B4	18.0	9.4		8/12	口縁のみ	灰原 斜面山
218	壺B4	16.8	43.9	15.5	12/12	底端へら面取り 底付着物	灰原谷
219	壺B4	17.0	20.3		6/12	上半分のみ	灰原 斜面谷
220	壺B4	16.0	42.1	15.0	9/12	底端へら面取り下駄印	灰原谷
221	壺B4	16.1	24.8		9/12	上半分のみ 耳欠け	灰原谷底
222	壺B4	12.9	33.5	14.0	9/12	底端へら面取り 下半タタキ	灰原谷
223	壺B4	14.1	40.1	13.7	9/12	下半タタキ	灰原谷
224	壺B4		26.5	12.5	6/12	底端へら面取り 下半タタキ	灰原谷
225	鉢	17.1	15.8	11.2	6/12	片口 底端へら面取り	灰原谷底
226	鉢	17.8	15.9	14.3	4/12	片口 底端へら面取り	灰原セク
227	鉢	21.3	14.2	13.9	8/12	底端へら面取り	灰原セク
228	甕	38.6	7.8		6/12	タタキ 上半分のみ	灰原 斜面谷
229	甕	37.6	11.6		3/12	タタキ 上半分のみ	灰原谷底
230	甕	35.7	14.2		6/12	タタキ 上半分のみ	灰原谷
231	甕	35.8	26.7		3/12	タタキ 上半分のみ	灰原セク
232	甕		28.3	16.0		タタキ 底のみ	間溝4区
233	甕	35.6	68.2		4/12	タタキ 内面当て具痕消す	灰原 斜面谷
234	焼台					甕胴片+石+甕口縁	灰原
235	焼台					石+甕胴片	灰原
236	焼台					石+甕胴片	灰原 写真のみ

第6章 古城窯跡群の調査

第1節 古城窯跡群の概要

三田市西相野字古城周辺には古城池を起点とする谷が立地している。この谷は古城山窯跡群と向上・古城窯跡群の立地する谷の間に位置するもので、現在5基の窯跡が確認されている。これらの窯跡は1つの単位としてとらえられるため、古城窯跡群としてまとめて報告することにした。今回の調査は、この古城窯跡群のうち2基（古城1・5号窯跡）について全面調査を行い、1基（古城2号窯跡）について確認調査を実施した。また、この結果、古城1号窯跡については灰原の大半を、古城5号窯跡については灰原と窯本体の痕跡を検出した。また、古城2号窯跡については調査区の斜面上に窯本体が存在することを確認した。

窯跡群が位置する谷は、相野川左岸に広がる丘陵が開析されて形成したものである。この谷は西相野付近の谷の中にあつては比較的大きな規模を有している。谷の入口付近には古城池があつて、谷から流下する水を堰き止めている。そして、谷は古城池を起点として3つの支谷に分岐する。すなわち南側に古城3・4号窯跡の立地する支谷、北西側に古城1・2号窯跡の立地する支谷、そして北側の支谷の3本である。

古城窯跡群と他の窯跡群の位置は、北背後に尾根を挟んで古城山1号窯跡が、谷をさらに北東に下った場所に西相野2号窯跡がある。古城山1号窯跡とこれに近い古城1号窯跡は約110mの距離を測る。南東側には尾根を隔てて向上・古城窯跡群が立地する。同窯跡群と古城3・4号窯跡とは約150mの距離にある。

古城1・2号窯跡の立地する支谷は古城3・4号窯跡の立地する支谷に次ぐ規模である。古城1号窯跡は古城池から分岐した支谷の入口の北斜面に立地している。窯周辺は西から東方向へ延びる尾根の背に位置しており、灰層の下端は古城池の方向にある。古城2号窯跡は1号窯跡の南約90mの谷最深部に位置する。立地する斜面は1号窯跡と同じ西斜面である。古城3・4号窯跡の立地する谷は、古城池から南東に「く」の字に折れるもので、かなり奥の深い谷である。谷は30mほどの幅を保ちながら、深部で2股に分岐する。古城3号窯跡はこの分岐した西側の谷の東斜面に、古城4号窯跡はこの東側の谷の西斜面にそれぞれ立地する。両窯は尾根を挟んで背中合わせに位置する。そして、古城5号窯跡は古城池の池中に立地する。窯本体は池中の斜面にあつて灰層は池底に向け広がっている。古城池は前述のように3本の小谷が分岐する起点にあつており、最も近い窯は古城1号窯跡である。

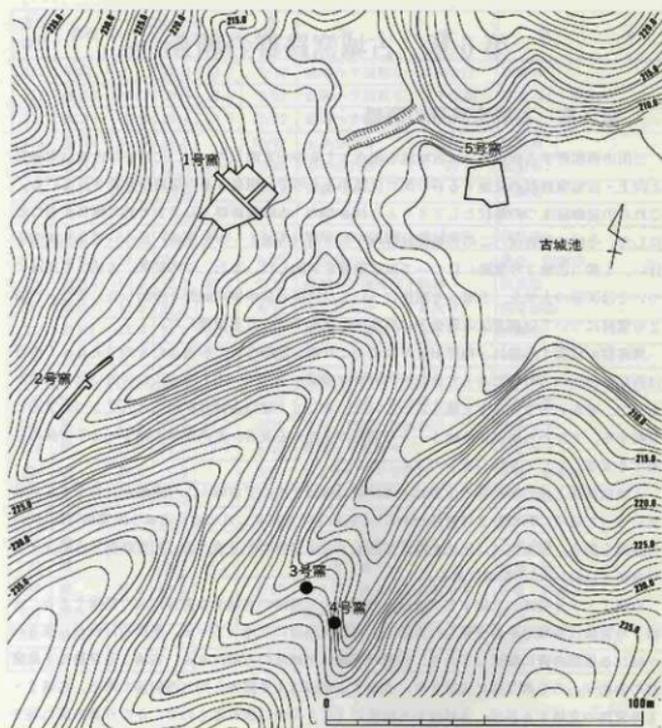


插图02 古城窟群位置图

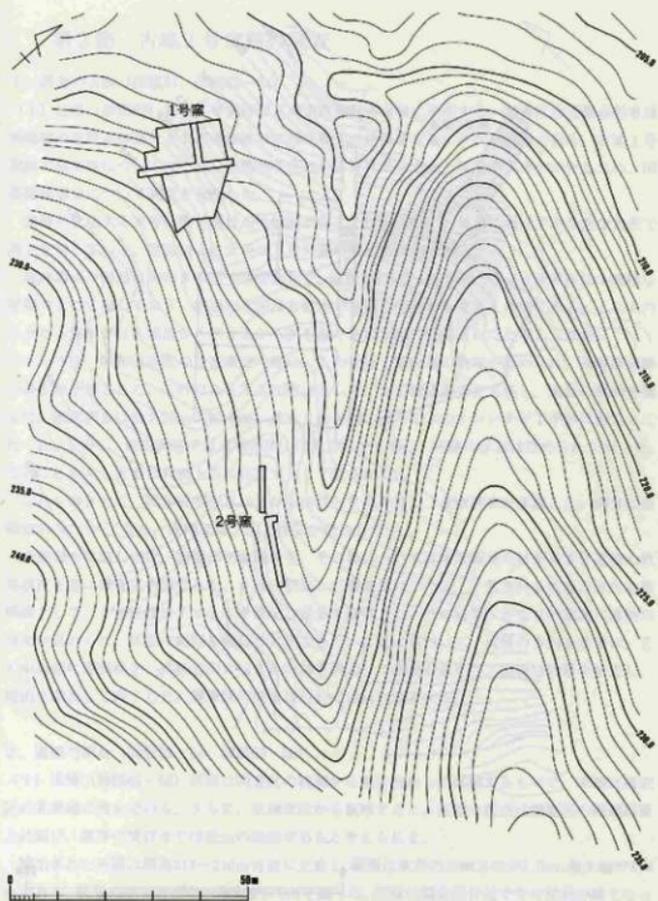
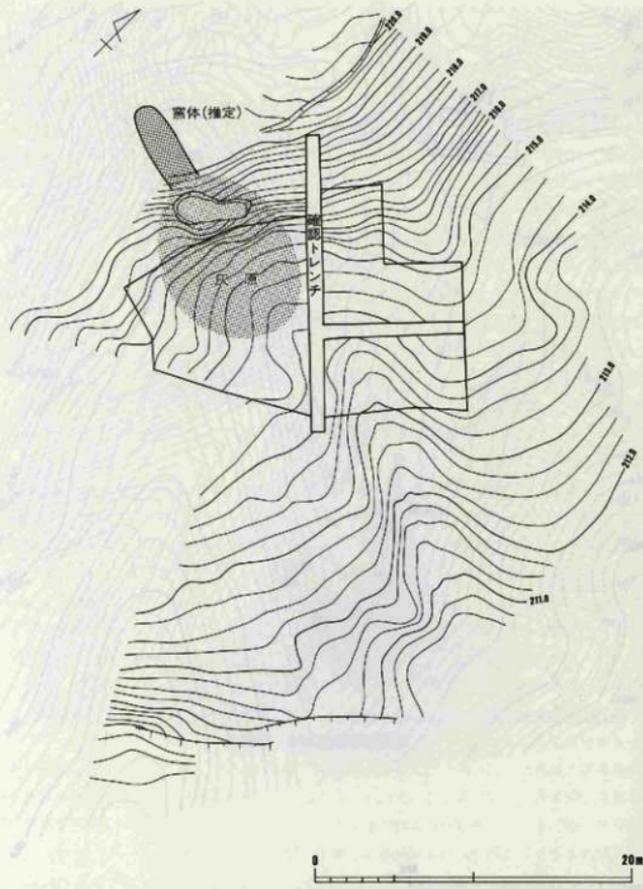


插图63 古城1·2号窟调查地区位置图



挿図84 古城1号窟跡調査地区位置図

第2節 古城1号窯跡の調査

1. 調査の方法 (図版31、挿図62~64)

(1) 位置 (挿図62) 古城1号窯跡は三田市西相野字古城に所在する。調査区は近畿自動車道舞鶴線の道路本体部分とこの道路建設に伴う残土の捨場予定地にかかる範囲である。古城1号窯跡の窯本体についてはこれらの開発予定地から外れていたが、灰層の大半がかかるため、開発範囲部分について調査を実施した。

窯跡の立地する支谷は開口部付近の標高がおおよそ210m前後で、谷奥に向けてやや急な角度で高さを増している。窯跡はこの支谷の入口付近の北斜面に位置する。

窯跡周辺の斜面は南向きのやや急な地形で、傾斜は約18~20°前後である。窯本体は小規模な尾根の上に立地しており、斜面の北側は古城池の北西に分岐する支谷との境である。これらのことから窯本体は古城池から吹き上がる風を取り込む方向に築窯されたと考えられる。

(2) 方法 昭和56年度の分布調査の際に、この付近で須恵器の散布が認められ、須恵器窯跡の存在が予想された。このためSTA19地点として、先ず確認調査を実施し、遺跡の範囲を推んだ。確認調査は長さ20m×幅1m、長さ8m×幅1mの2本のトレンチをT字形に設定して行った。しかし、確認調査では遺物の出土は見られたものの、灰層の存在は認められなかった。このことから、灰原は斜面上方に存在すると予想された。

これを踏まえて、昭和61年10月15日から10月24日にかけて、全面調査を実施した。調査は面積225㎡について行い、岡崎正雄・山上雅弘が担当した。

全面調査に際しては、西端は用地境界を、その他については確認調査の結果および遺物の散布状況を基に調査区を設定した。さらに設定した調査区について、予想される灰原の方向を基準線として、5m区画のメッシュを設定し表土を掘削した。その結果、かなりの範囲に遺物の分布が認められ、灰原の範囲を掴むことができた。これに基づいて、灰原の方向を基準に、その中軸線に縦断軸を、横断方向には3本の軸を設定して調査を進めた。調査は灰層を除去し、地山を検出して終了した。調査区の標高は214~219mに位置する。

2. 遺構の調査 (図版32~34、挿図65・66)

(1) 灰原 (挿図65・66) 灰原は調査区の西端から東に向かって堆積するもので、末端は調査区の北東端に及んでいる。さらに、堆積状況から観察すると、灰原の起点は調査区の西側斜面上に延び、窯体の焚口までは数mの距離があると考えられる。

検出された灰原は標高214~216m付近に立地し、範囲は東西の主軸方向が7.0m、最大幅が8.0mである。灰層の厚さは西端が最大で0.6mを測った。灰原は調査区付近でやや傾斜が緩くなっており土砂が比較的溜まり易い地形である。この影響もあって、現地形からも隆起が確認でき

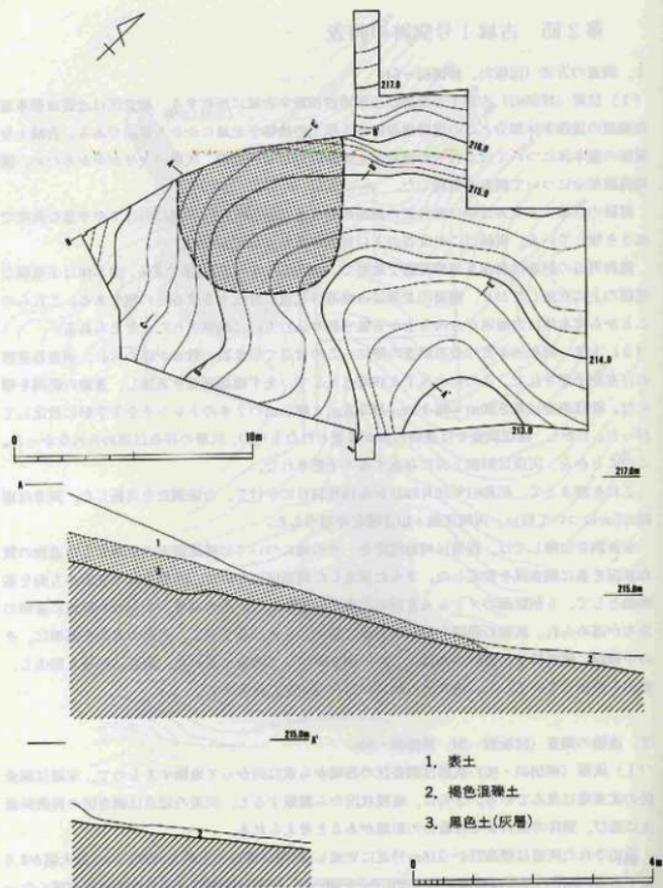
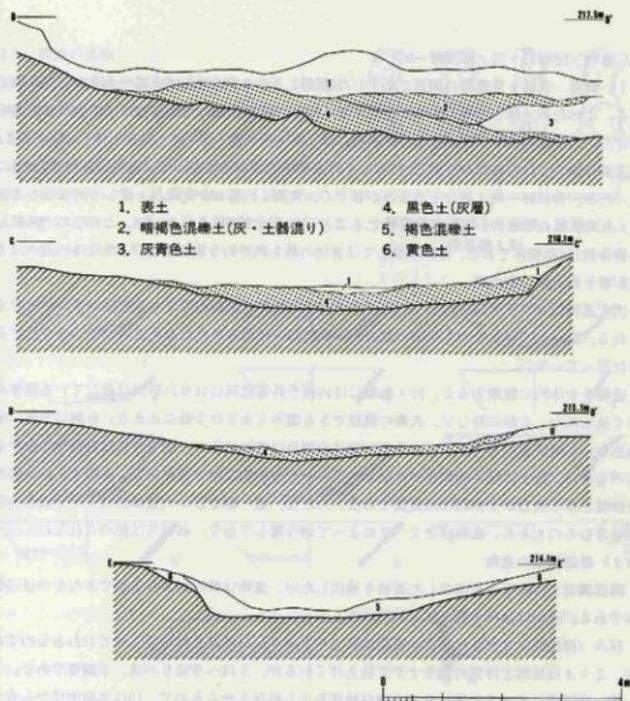


插图65 古城1号窟跡 灰原遺構圖



挿図66 古城1号跡 灰原土層堆積断面図

た。灰原の残りは良好で、純灰層と考えられ、土色は黒色を呈する。さらに、炭・土器・窠体片などを大量に含んでいる。

(2) その他(挿図65)窟の本体の位置は、後述するように電磁気探査測定の結果から、さらに数メートル斜面を登った周辺が推定された。前述のように、灰原の広がりや、調査区に検出された灰層の厚さ、堆積状況などからもこれを裏付けることができる。電磁気探査測定の結果から推定すると標高220m前後に罅口があると考えられ、灰層の堆積状況からの推定と一致した結果を得ることができた。

3. 遺物 (図版35-52, 挿図67-95)

(1) 概要 古城1号窯跡の調査で出土した遺物は、すべて灰原及び灰原から流出した遺物である。このため一括して報告することとする。但し、確認調査の出土遺物については別項を設けた。出土遺物はすべて須恵器で、器種には、杯・碗・壺・甕・鉢・羽釜・甕・人形がある。

実測に際しては口縁部が1/4以上残存している個体を基本的に選んだ。実測個体数は530個に上ったが、特に杯・碗・壺などの重みが著しく、実測した器形が完成品と著しく異なるものが見られた。これらについては誤解を生じることもあるので掲載しなかった。このため、掲載した個体数は468個体である。実測に際しては遺物の最も典型的な断面を選び、焼成時の重みによる影響を最小限に止めた。

出土遺物はコンテナ143箱分である。1基の窯では相野窯跡群の中でも遺物量が多い窯と考えられる。しかし、残念ながら今回の調査は、灰原部分に限定されたため遺物の全てを分析するには至っていない。

遺物を全体的に観察すると、杯・碗類には内面や外面底部にはなれ砂が付着している個体が多く見られた。これに対して、火漚の観察できる個体もあるが少数に止まる。色調は全体に暗褐色ないし暗灰色のものが多いようで生焼けの製品は皆無に近い。甕や壺には自然釉のかかるものも多い。胎土は杯・碗類などの小型の方がやや緻密な胎土を使用し、直径1～数cm程度の砂粒を多く含むが全体的には良質である。ただし、壺・甕などの大型品には1～2cm大の砂礫を含むものもある。底部は全てへうによって切り離しており、糸切りは認められない。

(2) 確認調査の遺物

確認調査では灰原から流出した遺物を検出したが、遺物は破片が多く実測できたものは15個体である。遺物には杯・碗・鉢・羽釜がある。

杯A (挿図68 2-5) 体部が直線的に立ち上がり、口縁部をやや尖らせておわるものである。2・4は底部と体部の境をナテで仕上げているが、3はへう切りの後、未調整である。

碗 (挿図68 6・7・10) 6・7は口縁部を少し外反させるもので、10は体部中位から大きく外反する。

碗B (挿図68 8・9) 8はやや内傾しながら立ち上がるもので、口縁部は尖らせて終わる。体部にロクロの引き上げ時の痕跡が明瞭に残る。どちらも内面底部の段は認められない。

碗C (挿図68 11・12) 体部の中程に2条の沈線を施す碗である。いずれも底部を欠いているため細分できない。体部は直線的で、口縁部を尖らせて終わる。

鉢 (挿図68 13) 口縁部の破片のため全体の形は不明である。口縁部がやや内傾しながら立ち上がるもので、全体に薄手である。

羽釜 (挿図68 14-16) 鈎の小さいもので、体部は直立ないし、内傾するものである。口縁部は上方に面を持つ。15は外面体部に平行タキの痕跡が残る。

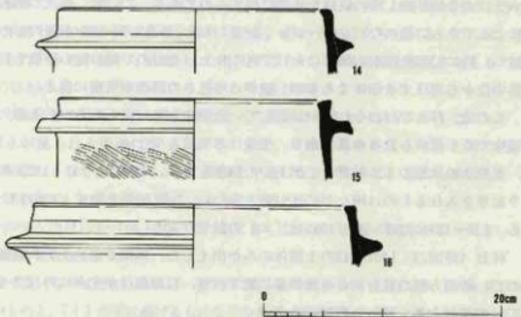
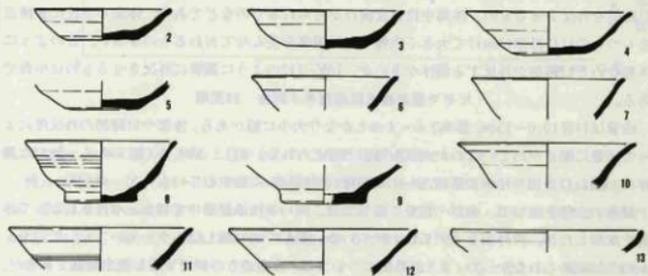
(3) 灰原の遺物

灰原および灰原から流失した遺物である。器種には杯・碗・壺・甕・鉢・羽釜・碗の他、手びねりの人形がある。

人形(挿図67 1)手づくねで成形されたもので、頭部と右腕を欠いている。残存部の高さは7.8cmである。小型の人形で、右腕を上げ、左腕を胸にあてるポーズをとっている。



挿図67 古城1号窟跡 灰原出土須恵器人形



挿図68 古城1号窟跡 トレンチ出土須恵器

成形は板状にした粘土の両端を巻いて接合し胴を作るもので、衾むせ日が胴の左側面に観察できる。足頭より下はヘラで押さえて簡単に表現している。その後、右脚・両腕・頭部を胴体に接合する。脚は直立せずやや前かがみに曲げる。背中側には腰のあたりから下に、粘土紐を貼り付けている。重心が後ろに傾いているのを支えるためと思われるが、衣服の一部を表現した可能性もある。また、人形は明らかに衣服を纏っており、粘上の衿目も服の衿を表現している可能性がある。しかし、全体に稚拙な作りで、1点しか出土していないことなどから、製品ではなく工人達の手廻みとして作った可能性が高い。

杯A（挿図70～73 17～142）最も多く出土した器種で、126個体を実測した。個々の器形には様々なものが見られる。体部が外方に直線的に立ち上がり口縁部をすんなりとおわるもの、口縁部を外反させるもの、体部中位に変換点が見られるものなどである。体部の中位に変換点をもつものは口縁部に向けて大きく内湾し口縁端部を尖らせておわるものが多い。このように体部ないし口縁部が外反する個体が多いが、109・112のように顕著に外反させるものは少数である。

法量は口径10.6～15cm、器高2.6～4cmとかなり大小に幅がある。体部や口縁部の外反度によって法量に開きが出ているのが大きな原因と考えられる。但し、最も多く見られる一般的な個体は、概ね口径13～15cm、器高3～4cm前後（挿図69）に集中している。

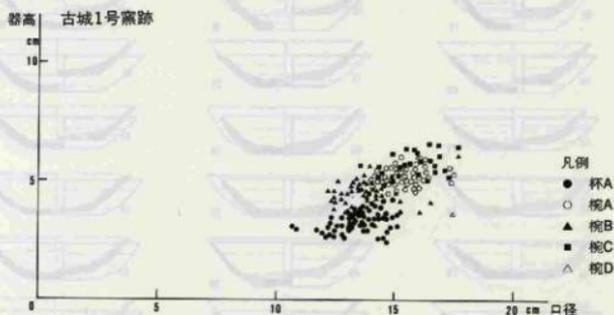
杯Aの全体を通して、成形・調整に際しては、同一の技法を用いている。水挽きによって体部を成形した後、内外面をナデで仕上げている。そして切り離しはヘラを用いて行っており、未切りは認められなかった。また、底部については、大半のものが切り離し後未調整であるが、中には切り離し後、底部ないし底部と体部の境の周囲をナデで仕上げるものが見られた。48はヘラによる切り離し時の痕跡を体部に残すものである。この他、個々の器形を観察すると個体によってさらに様々なバリエーションが見られた。器高2.5～3cm前後のものは皿に近い器形を持つ。特に52は底部から体部にかけて丸く仕上げるもので皿に近い特徴を持っている。93は体部中位から外反する個体であるが、細かい水挽きの凹凸が明瞭に残る。

この他、杯Aでははなれ砂が付着している個体が多く見られるが、火葬の観察できる個体は破片で若干認められるのみである。生焼けの製品も少ない。

重焼きの状態のまま軸着して出土した個体も多い。その内、141・142を実測した。内面にヘラ記号を入れるものは腕などに比べると少ない。ヘラ記号を施すものは137～140の4個体がある。137～139には「一」、140には「e」の記号が入る。

杯B（挿図73 143）143の1個体のみが出土した。体部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので、断面方形の低い高台が底部端に貼り付き、口縁部はかすかに外反させている。杯Bとしては体部が大きく開いた器形である。

杯Bの出土は古城窯跡群では、古城1号窯跡の他、古城3号・5号窯跡で1個体ずつが出土



挿図69 古城1号窯跡須恵器器量グラフ

している。全体の量からすると僅かなもので消滅寸前の器種といえよう。

椀A(挿図74~76 144~219)底部に輪高台を貼り付ける椀で、76個体を実測した。口径14~16cm、器高4.5~6cmに集中する個体が多い。これに対して、217・218・219の3個体は口径が17cm代と大きい。従って、椀Aには大小2形態があると考えられる。

成形・調整技法は杯Aと同じで底部もヘラによって切り離していると思われ、輪高台はその後に貼り付けている。

但し、器形には個体によって様々なバリエーションが見られた。大きくは体部が斜め上方に立ち上がるもの、体部下半に腰を持つものに分けられる。斜め上方に立ち上がるものには、直線的に立ち上がるもの、体部中位から屈曲したり外反するもの、口縁端部を外反させるものなどがある。これらの器形の違いから体部の立ち上がる角度は個体によって大きく異なっている。そして、この角度と口縁部の外反の組み合わせによって個体にバリエーションが生じており、口径の大きさに開きが見られる要因になっている。また、口縁端部を外反させるもの内、208~211はやや丁寧なつくりで、ナデによって器面を平滑に仕上げている。高台も華奢なつくりで、繊細な仕上げを施す。工人の個人差によるものであろうか。

体部下半に腰を持つものは153・166・168・170など多くないが、体部の開きがより大きいもので器高はあまり高くならない。

全体に高台はあまり高いものは見られない。「ハ」の字に開くものが多いが、直立に近いものも見られる。断面は長方形のものと、「く」の字に曲げるものなどがある。高台の外底面は丁寧にナデでヘラ切りの痕跡を全く消しているものもあるが、概して高台の内外面をナデで1周するだけのものが多い。

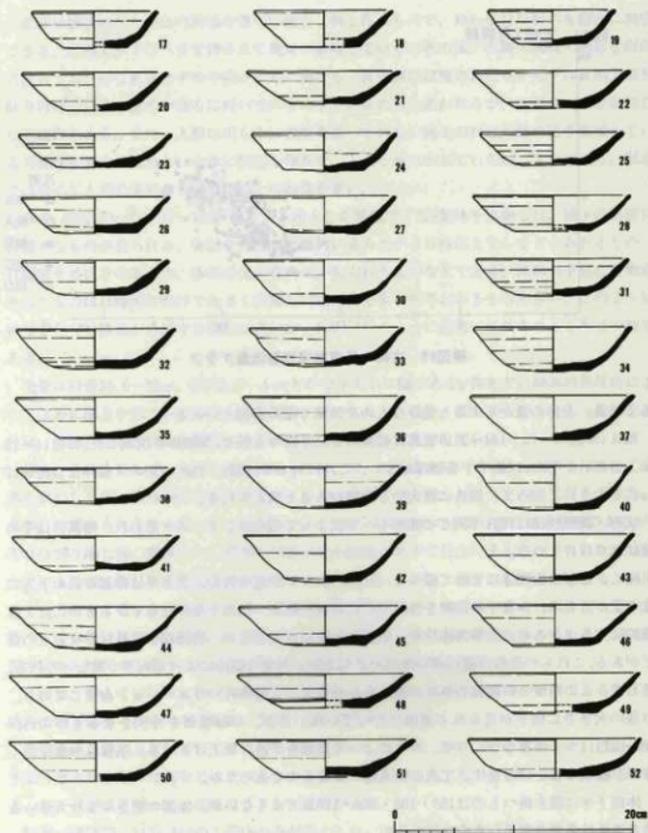


插图70 古城1号窟址 灰原出土须惠器(1)

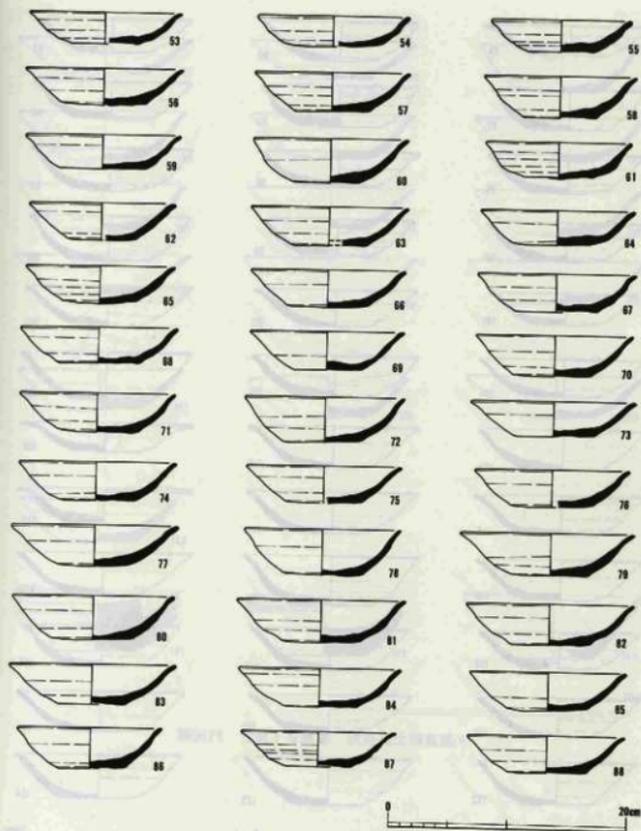


插图71 古城1号窯跡 灰原出土須惠器(2)

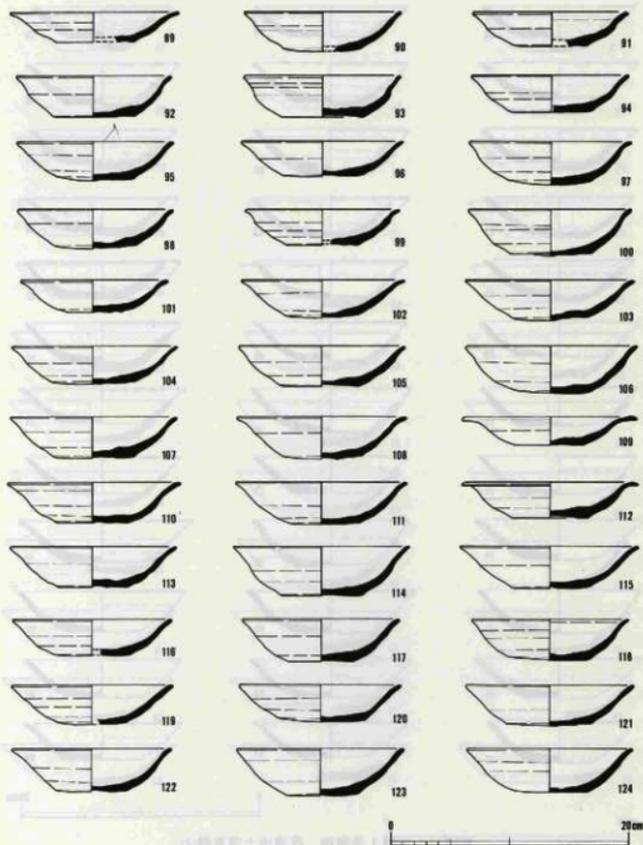


插图72 古城1号窟跡 灰原出土須惠器(3)

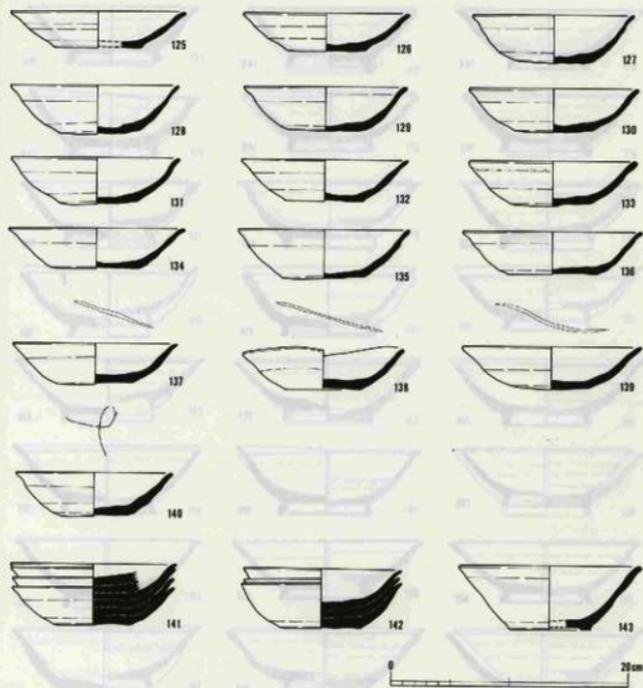


插图73 古城1号窟跡 灰原出土須惠器(4)

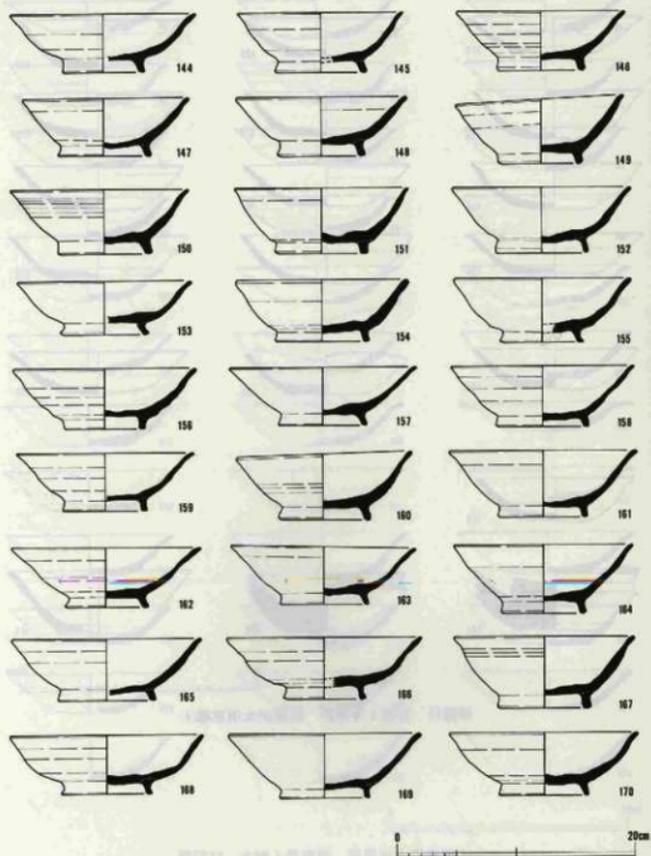


插图74 古城1号窟跡 灰原出土須惠器(5)

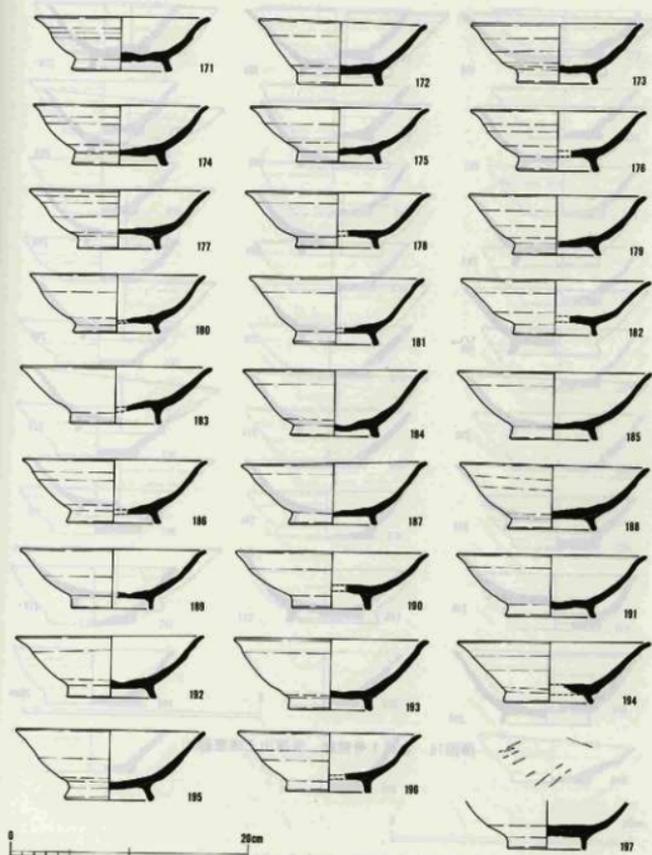


插图75 古城1号窟跡 灰原出土須惠器(6)

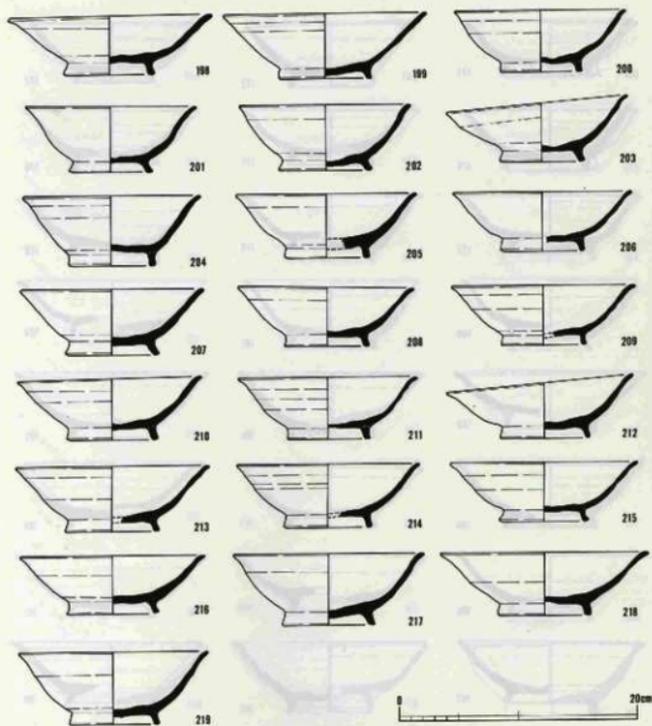


插图76 古城1号窑跡 灰原出土須臾器(7)

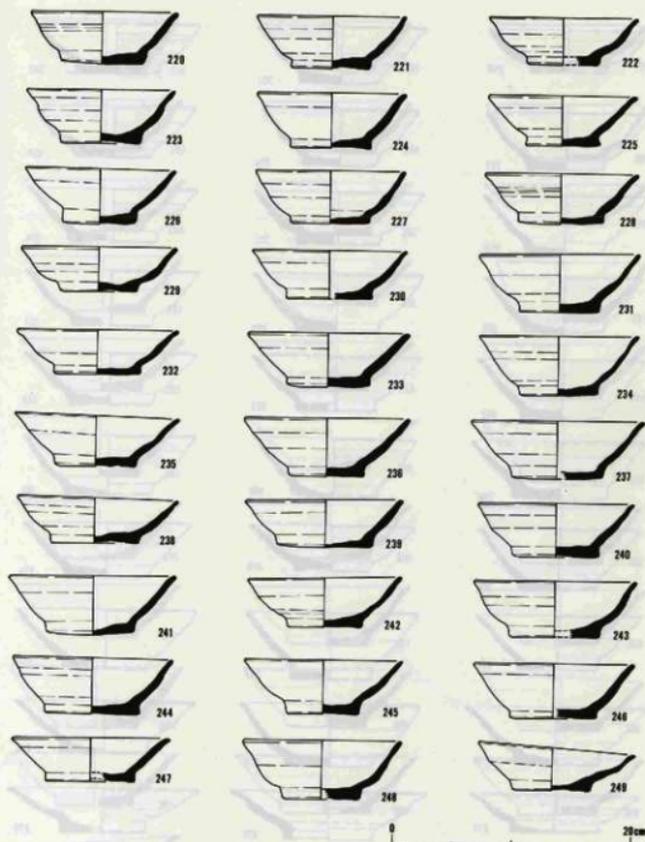


插图77 古城1号窖址 灰原出土须惠器(8)

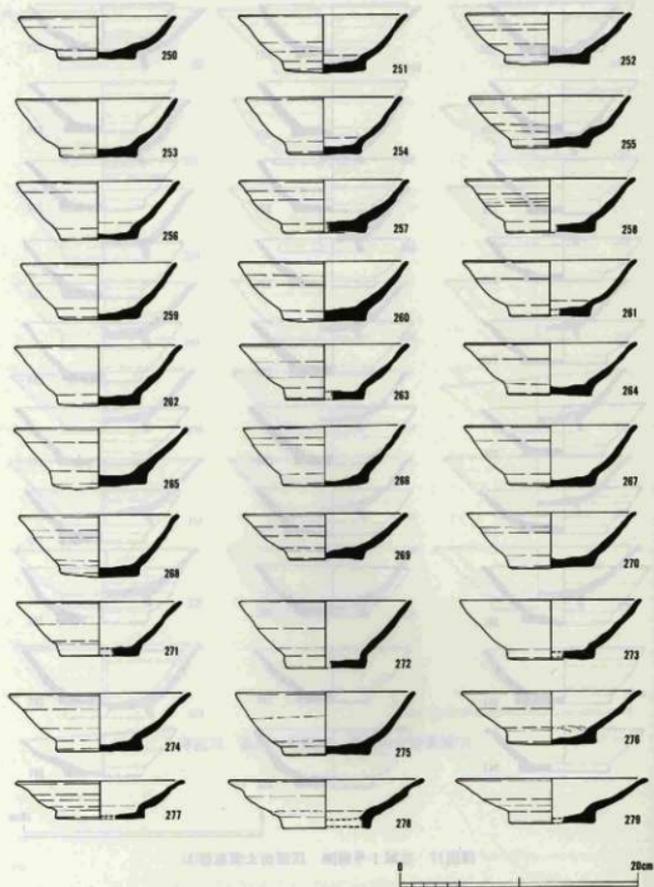


插图78 古城1号窟跡 灰原出土須惠器(9)

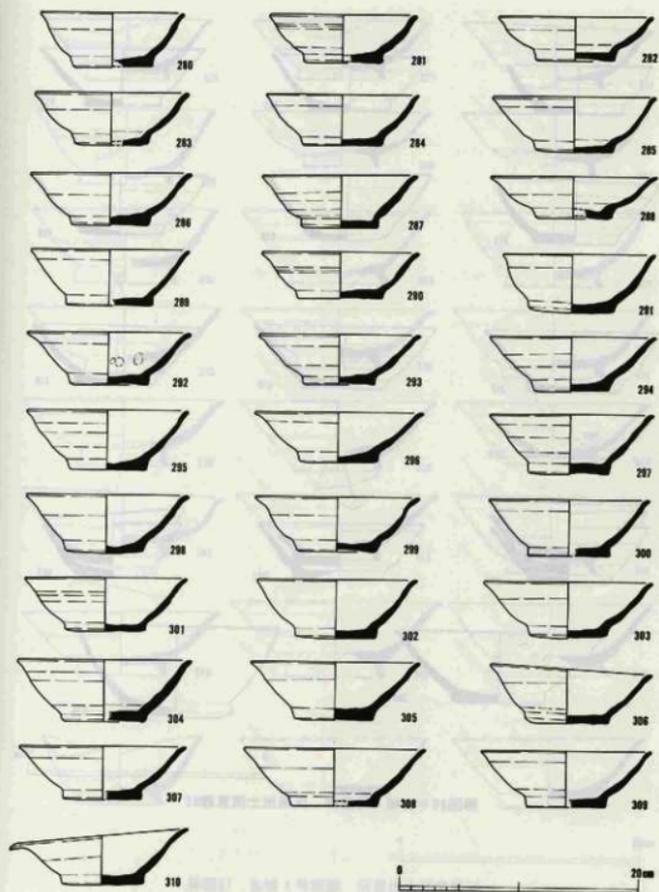


插图79 古城1号窑址 灰原出土须惠器(1)

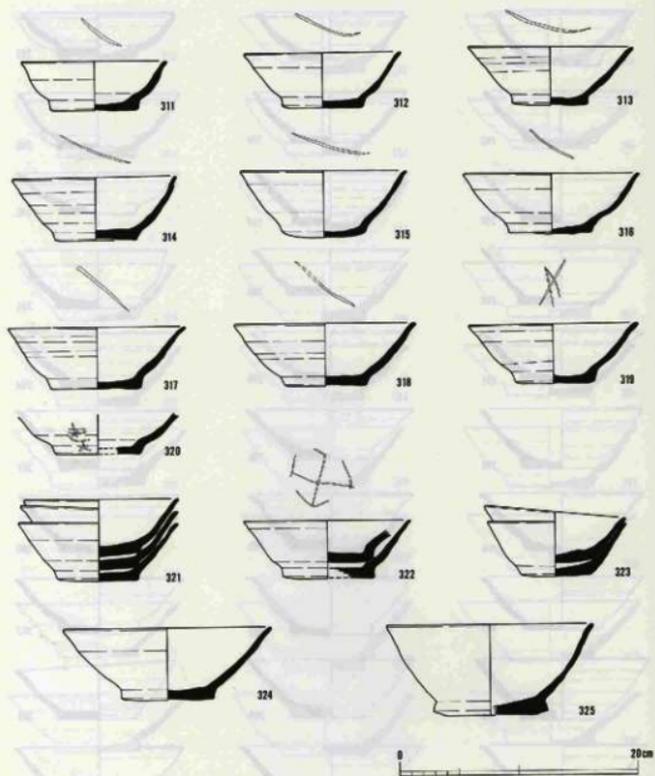


插图80 古城1号窑址 灰原出土须惠器(1)

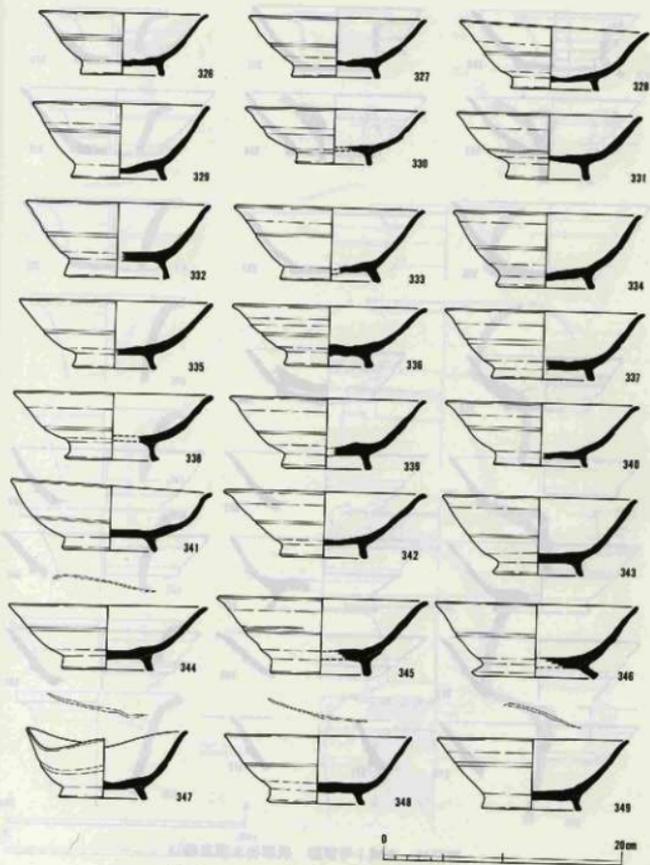
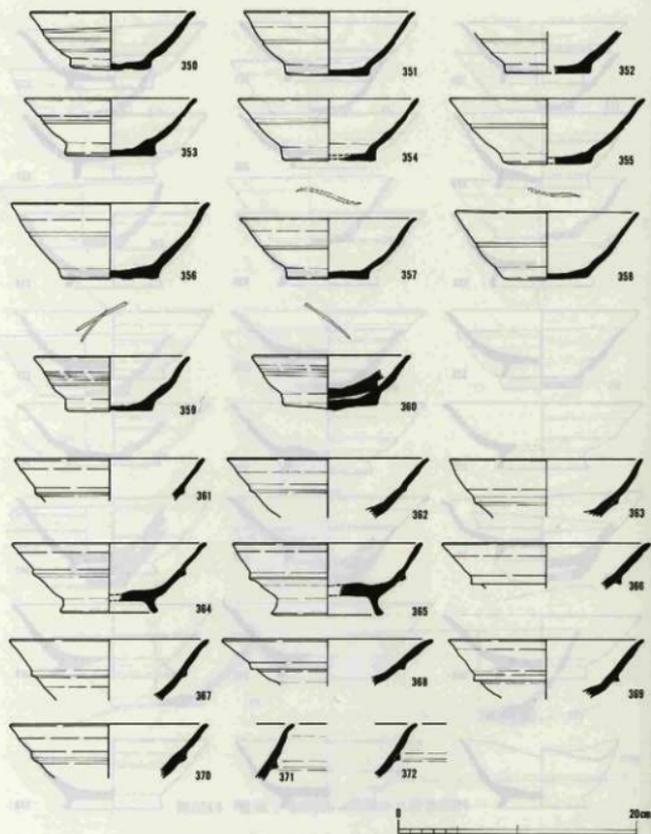


插图01 古城1号遗址 灰原出土须惠器(2)



插图B2 古城1号窟群 灰原出土须惠器(19)

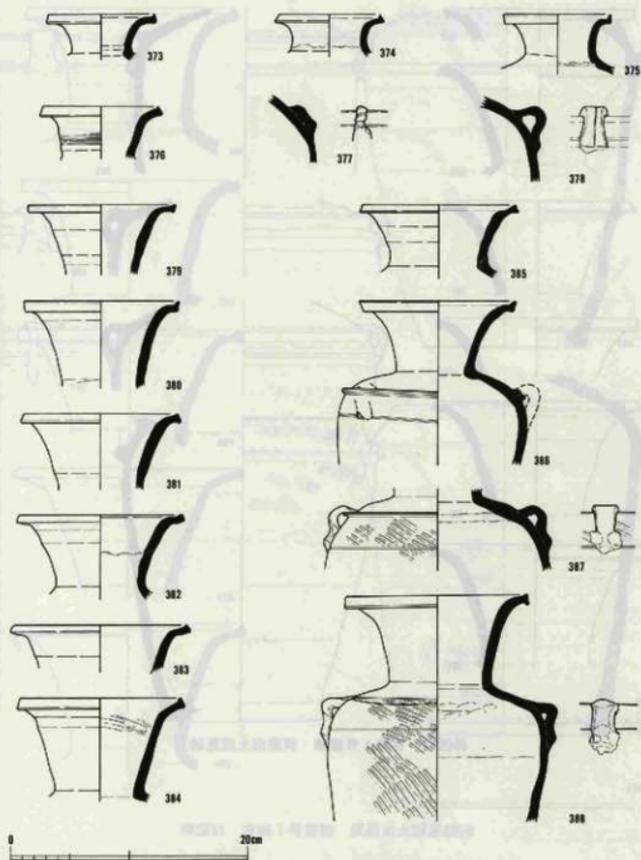


插图03 古城1号窟跡 灰原出土須惠器04

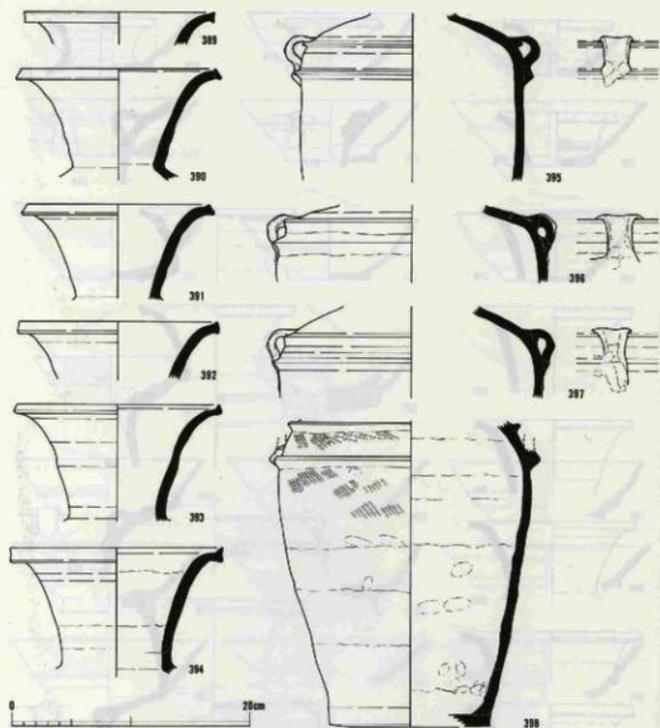


插图84 古城1号寨址 灰原出土须惠器(9)

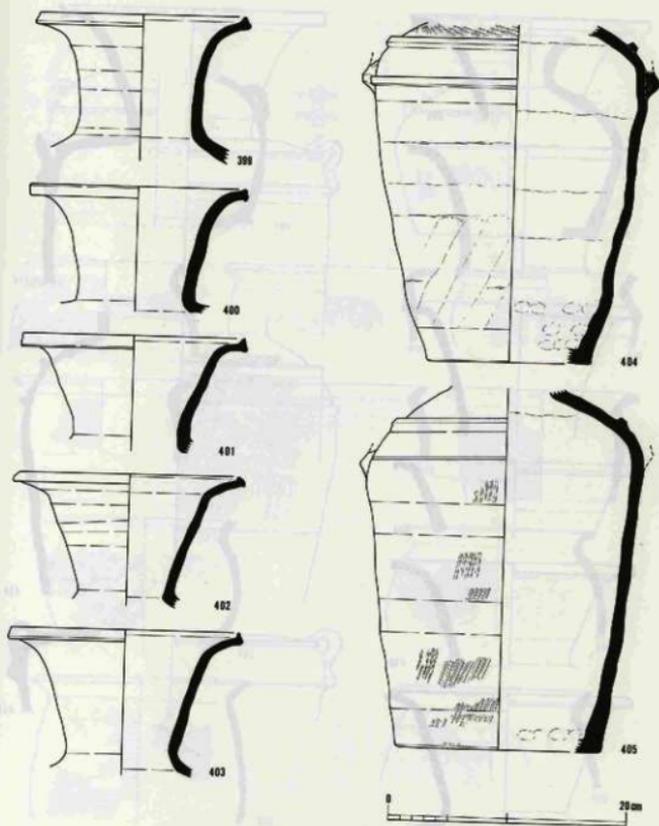


插图85 古城1号窖坑 灰原出土须惠器06

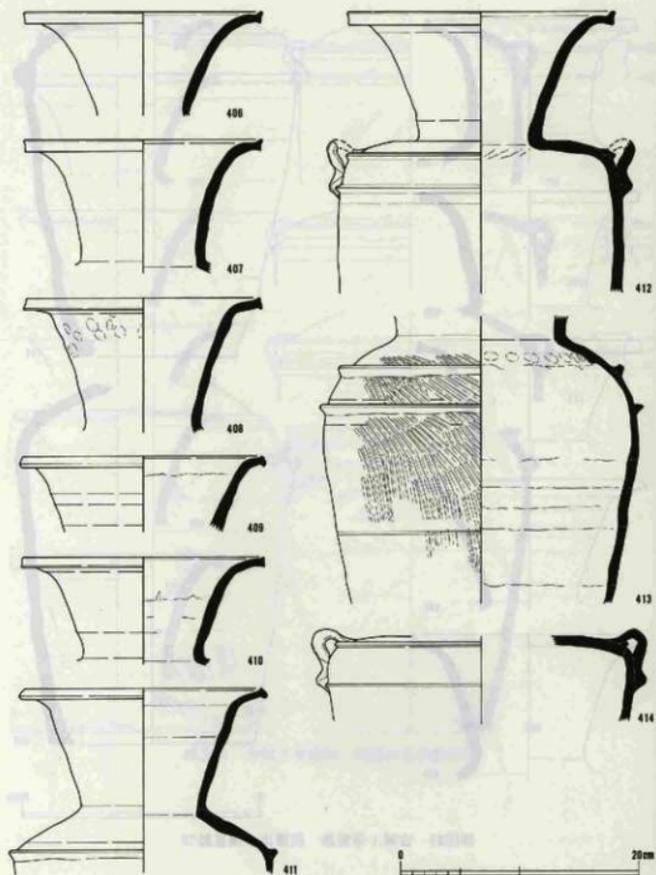


插图86 古城1号窑址 灰原出土须惠器(7)

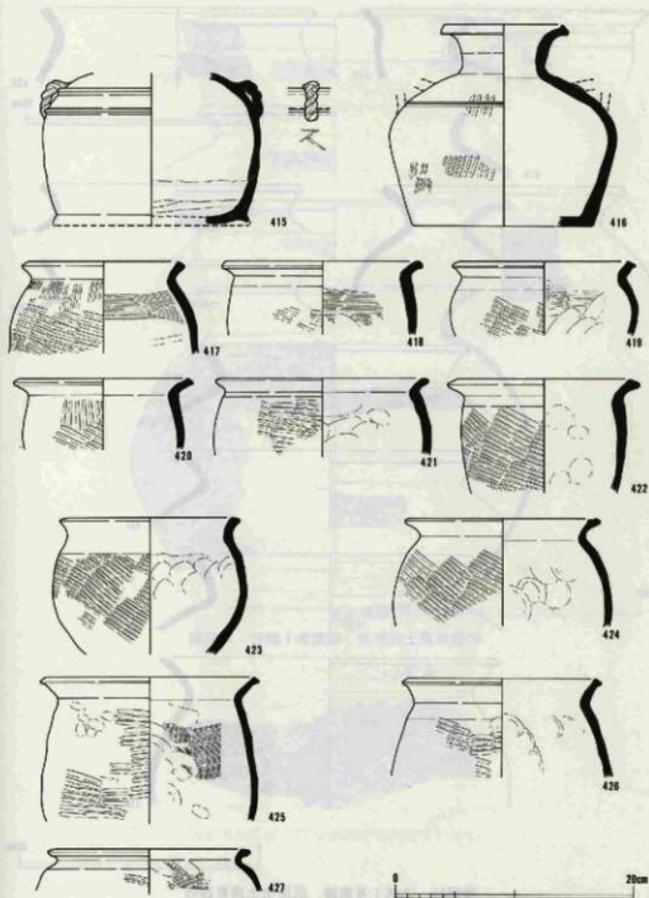


插图87 古城1号窯跡 灰原出土須惠器16

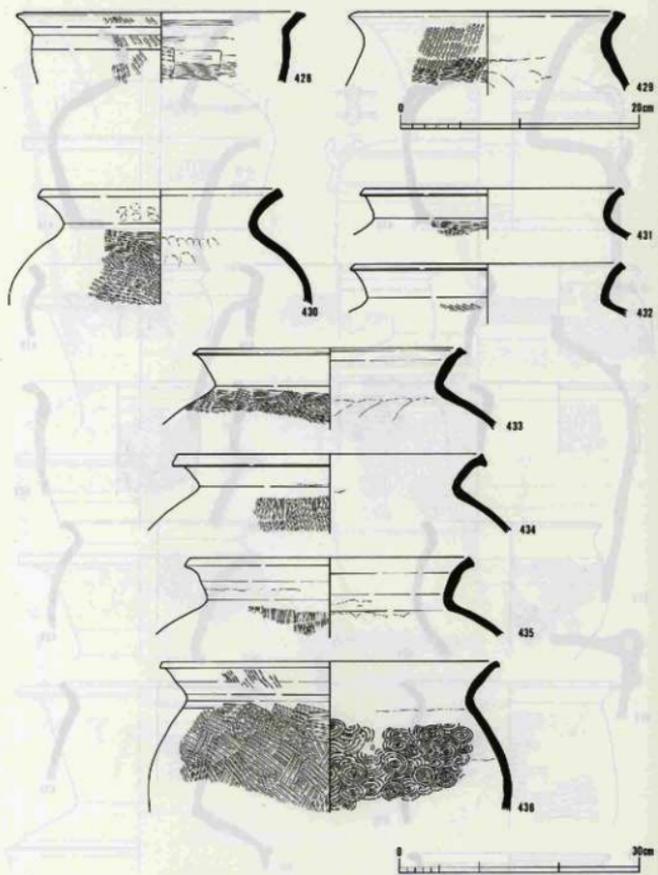


插图88 古城1号墓跡 灰原出土須惠器09

09 須惠器出土部類 09 須惠器 1 知光 T3 配列

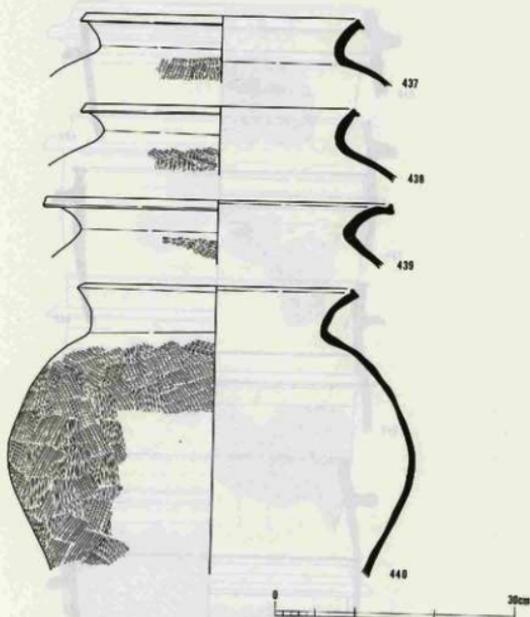


插图89 古城1号窟跡 灰原出土須惠器20

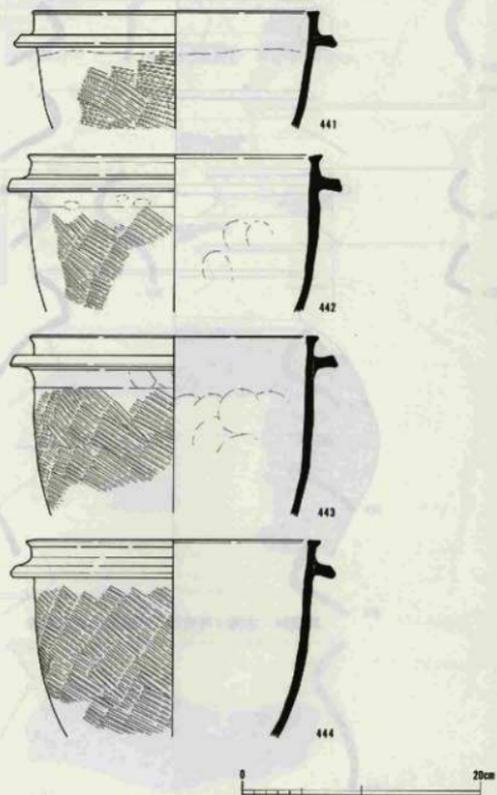


插图90 古城1号窑跡 灰原出土須惠器②

插图90 古城1号窑跡 灰原出土須惠器②

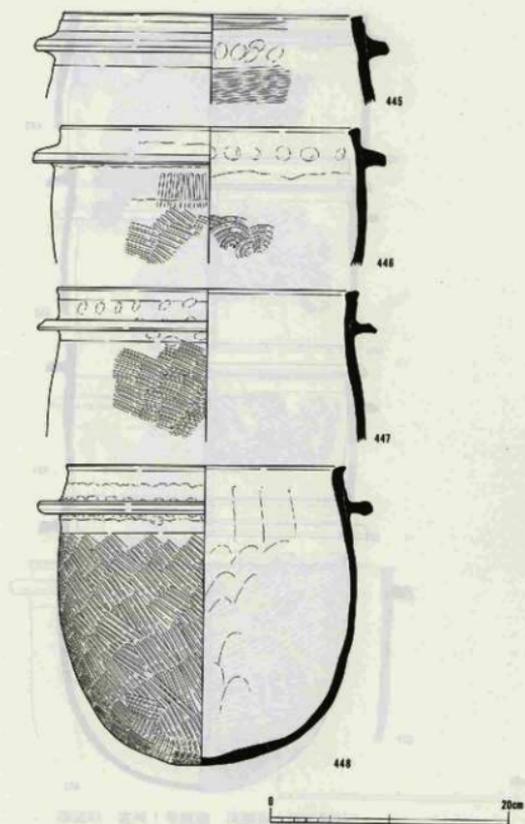


插图91 古城1号窟跡 灰原出土須惠器(功)

右側は陶土出系列 破片等(1)部分、左は陶

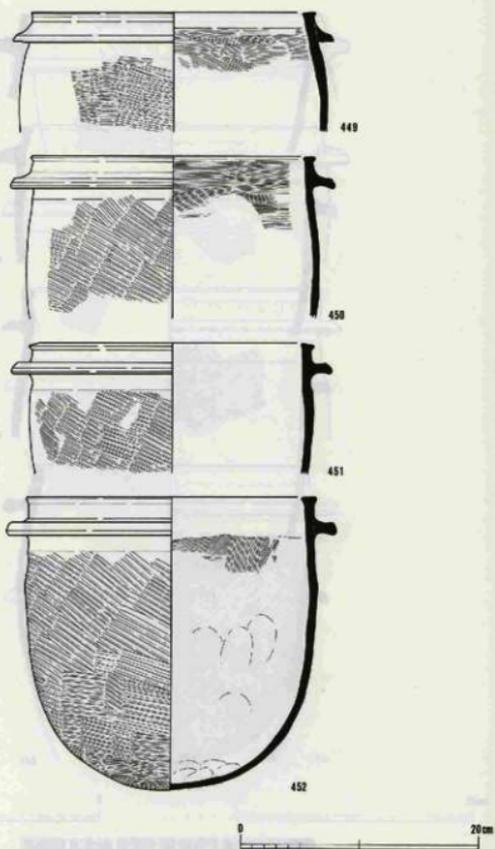


插图92 古城1号窟跡 灰原出土須惠器②

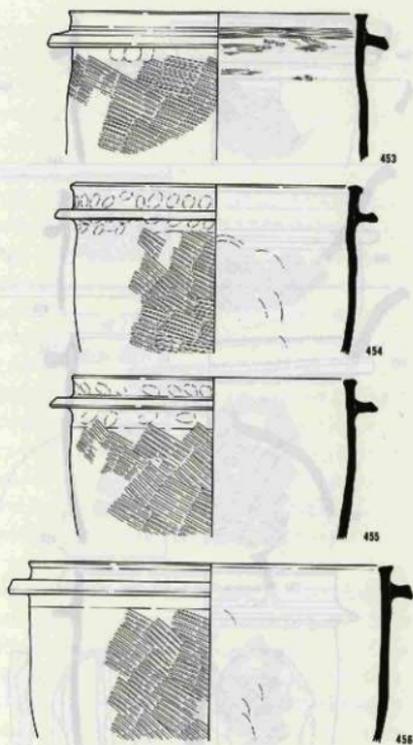


插图93 古城1号窟跡 灰原出土須惠器24

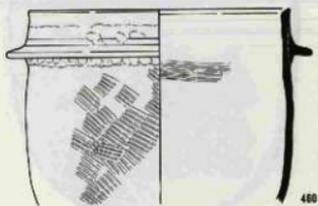
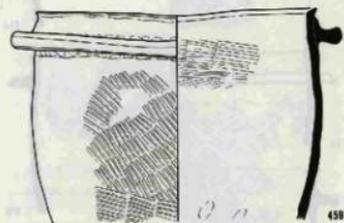
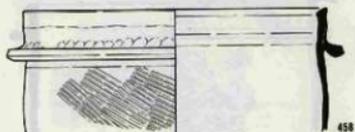
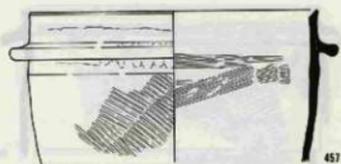


插图94 古城1号窟跡 灰原出土須惠器25

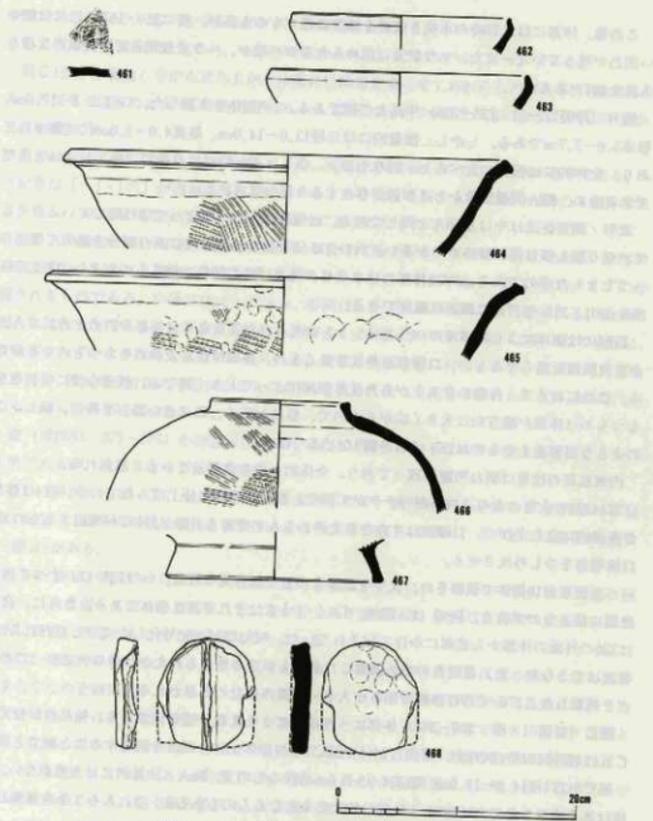


插图95 古城1号窟跡 灰原出土須惠器26

この他、体部には成形時の水挽き痕跡を顕著に残すものも多い。特に150・167・171には細かい凹凸が残っていた。また、ヘラ記号は認められなかったが、ヘラを使用して暗文状の文様を入れた197がある。

椀B (押図77-80 220-325) 平高台の椀である。106個体を実測した。口径12.3-17.6cm、器高3.6-7.7cmである。しかし、法量的には口径13.0-14.0cm、器高4.0-5.0cm代に集中しており、全体的には椀Aに比べると一回り小さい。但し、324・325は口径17.2cm・17.6cmと大型であるため、椀A同様法量から2形態が存在すると思われる。

成形・調整技法はやはり杯Aと同じである。底部外面もヘラによって切り離している。そして、切り離し後は未調整のものが多い。249・315・316は切り離し時に高台部分を誤って薄く切ってしまったものである。また、体部にはロクロの挽上げ時の凹凸が残るものが多い。特に228・258・301・313・317には顕著に観察できる。

器形には個体によって多くのバリエーションが見られた。大きくは体部が斜め上方に立ち上がり口縁部を尖らせるもの、口縁部を外反させるもの、体部中位に変換点をもつものなどがある。これに加えて、体部の立ち上がる角度も個体によって大きく異なる。体部中位に変換点をもつものは体部が横方向に大きく広がるもので、器高が低く、皿に近い器形を持つ。但し、このような器形をもつものは250・277-279など多くない。

内面底部の段差は概ね明瞭に残っており、全体的に段を意識していると思われる。

324・325の大型のものは内外面のナデが丁寧で、器面は平滑に仕上げられている。324は体部が直線的に立ち上がり、口縁部はすんなりと終わるものである。325は体部が湾曲するもので、口縁部を少し外反させる。

ヘラ記号が10個体で観察され、文字を記すものも1個体見られた。ヘラ記号は、すべて内面底部に描くものである。「一」は8個体、「六」・「十」はそれぞれ1個体である。さらに、文字は320の外面の体部から底部にかけて記されていた。呪句などの記号化した文字と思われるが、判読はできなかった。重焼きのまま軸着した個体もいくつか見られたが、その内321-323の3点を掲載した。276-279は体部の開きが大きいが歪みのためと思われる。

椀C (押図81・82 326-360) 体部にヘラ描きによる沈線が巡る椀である。輪高台が付く椀C3は24個体(326-349)を、平高台が付く椀C1は11個体(350-360)を図化することができた。

椀C3は口径14.2-17.6cm、器高4.9-6.6cm前後のもので、椀Aと法量的には大差がない。沈線は基本的に1条で、345のように部分的に2条になるものもあるが、これらも2条を意識したのではなく、末端が偶然重なったものである。器形は体部中位に変換点をもつものが多い。高台は「ハ」の字に開き直立するものである。但し、341のように口縁部を外反させたり、332・335・338のようにやや高い高台を持つものなど、個体によって個性をもつ。また、346は高台の開きが大きく、貼り付け位置も底体部の境にある。口径に比べて器高が低いほか、底部の径

がやや大きいなど、他に比べ相違点が多く特徴的である。

ヘラ記号は内面底部に施され、4個体に認められた。記号はすべて「一」である。

碗C1はやや円曲しながら立ち上がる体部に口縁部を尖らせておわるものである。口縁端部のみを外反させるものが多い。口径13.0~16.4cm、器高3.4~6.5cm程度のものが多いが、355・356・358は大型である。

器形は全体に外反するものは認められない。沈線は350を除いてやはり1条が基本である。ヘラ記号は「一」・「×」が内面底部に認められる。ヘラ記号を施すものは357~360の4個体である。但し、360は重焼きで内面に重なった破片に施されたものである。

碗D（押図82 361~372）体部に突帯を貼り付けた碗である。口縁部の破片が多く、全体の器形を知るものは2個体にすぎない。形態の分かるもので判断すると、全て碗D2タイプに分類されるものである。口径は16.0~17.8cm、器高は3.6~6.1cm前後になると思われる。通常の碗Aに比べ大型である。体部は直線的なものが多く、362・364・367・369・371・372のように、口縁部をわずかに外反させるものが見られる。突帯は体部中位に付くもので、断面は三角形を呈するが、稜は突帯断面の下半にくるものが多い。碗Dにはヘラ記号は認められない。365は「ハ」の字に踏ん張る高い高台をもつ。

壺（押図83 373~376）小型壺の口縁部片である。胴部を欠くためどの様な器形になるかは不明であるが、壺Bになる可能性が高い。

壺B（押図83~87 377~416）40個体を実測したが、破片が多く全体の形状が知れる個体は少ない。細分の可能な個体を観察すると2条突帯の壺B4が多く、その他には壺B2・壺B3・壺B5がある。

壺B4・壺B2・壺B3は口縁部が大きく外反して端部を上方につまむもので、口縁部外面に面を持つ。肩は張っており、肩部の二方に耳が付く双耳壺である。胴部は直線的に底部から斜め外方に開き、肩部のあたりで最大径になっている。

また、胴部や口縁部の大きさを観察すると、口縁部の開き方が外反度の違いによってまちまちのため正確にはいえないが、法量的に大・中・小の3形態が存在すると思われる。

突帯は貼り付けて上端に稜がくるものも多く、概してシャープな作りである。突帯・沈線と突帯・沈線のみいずれの組み合わせでも必ず2条が付く。下段の突帯が肩部の最大径のところに、上段がそれより2~2.5cm前後上に貼り付けられる。耳は突帯の上に貼り付くもので手づくねで成形している。粘土紐を帯状にして上段の突帯より上と、下段の突帯上に接合しているものが多い。耳にはこの他、粘土紐を棒状にして挿したもの、棒状の粘土紐を2つ合わせたものなどがある。壺の外面は大部分をナデによって最終仕上げを行うが、平行タタキの痕跡を残すものも幾つか見られた。

壺B5（415・416）は丸胴で底部が大きく寸づまりになり、船徳利に近い形態をしている。415

は2条突帯で、両肩に粘土紐を挿じった耳を貼り付けている。外面のタタキは完全にナデ消しており、胴部の上半の耳の下あたりには「ス」のヘラ書が刻まれている。416は肩部の上に沈線を持つ個体である。耳の痕跡がかろうじてわかるものである。外面のタタキは縦方向の平行タタキで、若干の消し残しが認められる。

小型甕（押図87 417-427）417-427は小型のもので、土師器甕と同形態のタイプである。大型の甕同様外面は平行タタキ、内面は同心円の当て具を用いている。口縁部は肥厚し外面に面を持つ。大半が球形の器形と思われるが、422・425・426のように胴長になるものも少なからず存在すると思われる。

甕（押図88 428-440）13個体を実測した。428・429は1/4、430-440は1/6の実測図である。破片が多く全体の形状を復元できる個体はなかった。法量は口径23.0-45.6cmと様々な大きさのものが見られた。口縁部は頸部から大きく外反し、端部を上方につまみ上げるもので、外面に面を持つ。全て外面は平行タタキ、内面には同心円の当て具を用いている。頸部から上は基本的にタタキ痕跡を消しているが、428・429・436は一部に消え残ったタタキの痕跡が観察できる。内面の当て具痕跡も上半は消しているものが多いようである。また、436は内外面に暗褐色を呈し、頸部から口縁部にかけて長く立ち上がるのが特徴的で、他の甕と比べ異なる点が多い。

甕C（押図95 466-467）高台の付く甕である。466は口縁部の破片である。直口壺になるもので肩は撫肩になる。外面の平行タタキは基本的にはナデ消すが、部分的に残る。467は底部片である。

羽釜（押図90-103 441-460）古城1号窯跡で比較的多く出土した遺物である。甕と同じく外面を平行タタキ、内面に同心円の当て具痕跡をそれぞれ残す。但し、当て具の痕跡はナデないし板ナデで消したものが多く、446でわずかに観察できる程度である。また、442・443のように内面に同心円の外縁の痕跡のみを残すものも見られる。

羽釜は体部がやや外開きになるもの（441-444）、内傾するもの（445-449）、体部が直立するもの（450-452）、内傾しながら内側に面を持つもの（453-460）の4つに分けられる。外面は平行タタキ、内面は板ナデないしナデによって最終仕上げを行っている。甕は大きいものではなく、全て口縁の直下に貼り付けている。

鉢（押図95 462-465）462・463は鉄鉢状になるもので鉢Aに分類できるものである。464・465は厚手のもので外面に平行タタキの痕跡が残る。

硯（押図95 468）468は風字硯で、1点が出土した。下端と縁の堤の部分を見失うものである。残存部で長さ9.6cm、幅8.1cmの小さなものである。色調は灰白色で胎土は砂粒を若干含む。

その他（押図95 461）杯ないし椀の底部片と考えられる。内面の底部に「田」と読めるヘラ書を施している。

表6 古城1号窟跡 出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
1	人形	—	7.8	—	—	手づくね成形	頭・右腕を欠損
2	杯A	11.6	2.6	6.1	9/12	底部ヘラ切り	
3	杯A	13.2	3.3	6.6	11/12	底部ヘラ切り	板状片痕
4	杯A	14.0	3.6	6.3	11/12	底部ヘラ切り	
5	杯A	—	2.1	6.3	3/12	底部ヘラ切り	口縁部欠損
6	椀	12.4	2.9	—	2/12		底部欠損
7	椀	13.0	3.5	—	4/12		底部欠損
8	椀B	12.7	5.3	6.1	2/12	底部ヘラ切り	
9	椀B	—	3.3	7.2	3/12	底部ヘラ切り	口縁部欠損
10	椀	15.0	4.9	—	2/12		底部欠損
11	椀C	15.6	3.5	—	1/12	二条沈線	底部欠損
12	椀C	15.8	3.9	—	1/12	二条沈線	底部欠損
13	鉢	16.1	1.9	—	1/12		体部・底部欠損
14	羽釜	23.3	5.5	—	2/12	鈿貼り付け	体部・底部欠損
15	羽釜	23.1	6.8	—	3/12	鈿貼り付け・体部外面平行叩き	体部・底部欠損
16	羽釜	27.2	5.1	—	1/12	鈿貼り付け	体部・底部欠損
17	杯A	10.6	3.1	6.3	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
18	杯A	11.6	3.0	6.1	3/12	底部ヘラ切り	
19	杯A	10.8	3.0	5.8	5/12	底部ヘラ切り	
20	杯A	12.2	3.2	5.2	2/12	底部ヘラ切り	
21	杯A	13.0	2.8	6.2	11/12	底部ヘラ切り	
22	杯A	13.2	3.1	6.2	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
23	杯A	12.8	2.8	6.5	3/12	底部ヘラ切り	
24	杯A	12.2	3.3	6.9	8/12	底部ヘラ切り	
25	杯A	12.0	2.7	6.9	3/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
26	杯A	12.4	3.1	7.1	4/12	底部ヘラ切り	
27	杯A	12.1	3.1	6.8	3/12	底部ヘラ切り	
28	杯A	13.2	3.0	6.5	3/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
29	杯A	12.4	2.9	4.7	4/12	底部ヘラ切り	
30	杯A	13.7	3.7	6.2	1/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
31	杯A	12.7	3.2	6.1	4/12	底部ヘラ切り	
32	杯A	13.3	3.3	7.1	4/12	底部ヘラ切り	
33	杯A	13.0	3.2	6.6	2/12	底部ヘラ切り	
34	杯A	13.4	3.6	6.1	10/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
35	杯A	13.5	3.5	6.2	8/12	底部ヘラ切り	

通物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
36	杯A	13.6	3.8	6.5	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
37	杯A	13.8	3.8	6.3	6/12	底部ヘラ切り	
38	杯A	13.2	3.1	6.9	1/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
39	杯A	13.6	3.5	5.9	4/12	底部ヘラ切り	
40	杯A	13.2	3.7	7.3	6/12	底部ヘラ切り	
41	杯A	14.6	2.9	7.5	3/12	底部ヘラ切り	
42	杯A	13.5	4.0	6.5	6/12	底部ヘラ切り	
43	杯A	13.4	3.9	6.4	6/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
44	杯A	14.5	3.6	7.1	2/12	底部ヘラ切り	
45	杯A	14.1	3.4	6.9	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
46	杯A	13.7	3.4	6.9	9/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
47	杯A	14.2	3.6	6.9	6/12	底部ヘラ切り	
48	杯A	14.6	2.9	7.4	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
49	杯A	14.2	3.4	7.2	3/12	底部ヘラ切り	
50	杯A	14.4	3.4	6.5	3/12	底部ヘラ切り	
51	杯A	15.0	3.1	7.4	6/12	底部ヘラ切り	
52	杯A	14.4	2.6	7.0	2/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
53	杯A	12.8	2.6	5.5	3/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
54	杯A	12.8	2.6	6.4	3/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
55	杯A	11.8	2.7	5.5	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
56	杯A	13.4	3.1	7.1	8/12	底部ヘラ切り	
57	杯A	13.0	3.3	6.5	3/12	底部ヘラ切り	
58	杯A	12.7	3.5	6.2	1/12	底部ヘラ切り	
59	杯A	13.1	2.9	7.4	2/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	板状圧痕
60	杯A	13.0	3.7	5.7	3/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
61	杯A	12.2	3.0	5.7	3/12	底部ヘラ切り	
62	杯A	12.4	3.1	5.9	3/12	底部ヘラ切り	
63	杯A	13.2	3.2	6.5	3/12	底部ヘラ切り	
64	杯A	13.0	3.0	7.9	8/12	底部ヘラ切り	
65	杯A	12.5	3.1	6.3	4/12	底部ヘラ切り	
66	杯A	13.0	3.2	6.9	6/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	板状圧痕
67	杯A	13.2	3.1	7.9	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
68	杯A	13.2	3.0	7.2	6/12	底部ヘラ切り	
69	杯A	13.0	3.2	5.7	4/12	底部ヘラ切り	
70	杯A	13.1	3.4	6.6	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
71	杯A	13.2	3.3	6.7	8/12	底部ヘラ切り	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
72	杯A	13.4	3.7	6.6	4/12	底部ヘラ切り	
73	杯A	13.8	2.9	6.7	3/12	底部ヘラ切り	
74	杯A	13.3	3.2	6.4	4/12	底部ヘラ切り	
75	杯A	13.0	3.1	6.4	6/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
76	杯A	13.0	3.1	6.9	6/12	底部ヘラ切り後ナテ調整	板状圧痕
77	杯A	14.0	3.4	6.1	2/12	底部ヘラ切り	
78	杯A	13.2	3.9	6.7	4/12	底部ヘラ切り	
79	杯A	14.6	3.6	6.5	4/12	底部ヘラ切り後ナテ調整	
80	杯A	13.6	3.7	6.8	6/12	底部ヘラ切り	
81	杯A	14.2	3.6	6.6	6/12	底部ヘラ切り	
82	杯A	14.0	3.5	6.8	3/12	底部ヘラ切り	
83	杯A	14.0	3.4	5.5	2/12	底部ヘラ切り	
84	杯A	13.7	3.3	6.2	6/12	底部ヘラ切り	
85	杯A	13.2	3.3	6.7	8/12	底部ヘラ切り後ナテ調整	
86	杯A	12.2	3.5	5.9	1/12	底部ヘラ切り	
87	杯A	13.0	2.9	5.7	2/12	底部ヘラ切り	
88	杯A	13.3	3.1	6.6	8/12	底部ヘラ切り	
89	杯A	14.2	2.6	6.7	3/12	底部ヘラ切り	
90	杯A	13.2	3.3	6.6	4/12	底部ヘラ切り後ナテ調整	
91	杯A	13.0	2.9	6.2	5/12	底部ヘラ切り	
92	杯A	13.0	3.5	6.9	7/12	底部ヘラ切り	
93	杯A	13.2	3.5	7.1	2/12	底部ヘラ切り	
94	杯A	13.2	3.1	7.0	3/12	底部ヘラ切り後ナテ調整	
95	杯A	13.3	3.3	6.5	10/12	底部ヘラ切り	
96	杯A	13.6	2.9	6.6	6/12	底部ヘラ切り	
97	杯A	13.6	3.7	6.9	4/12	底部ヘラ切り	生焼け
98	杯A	13.1	3.3	6.9	3/12	底部ヘラ切り	
99	杯A	13.0	3.0	6.2	6/12	底部ヘラ切り後ナテ調整	
100	杯A	13.6	4.0	7.0	4/12	底部ヘラ切り	
101	杯A	12.4	2.7	4.7	3/12	底部ヘラ切り	
102	杯A	13.7	3.1	6.1	3/12	底部ヘラ切り	
103	杯A	14.2	3.4	6.2	8/12	底部ヘラ切り	
104	杯A	13.9	3.2	7.1	4/12	底部ヘラ切り	
105	杯A	13.9	3.4	7.0	6/12	底部ヘラ切り	
106	杯A	14.3	3.9	6.1	3/12	底部ヘラ切り	
107	杯A	14.0	3.5	6.9	3/12	底部ヘラ切り	板状圧痕

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
108	杯A	14.2	3.6	6.6	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
109	杯A	14.6	2.4	5.6	2/12	底部ヘラ切り	
110	杯A	14.6	3.4	6.3	1/12	底部ヘラ切り	
111	杯A	14.6	3.6	5.9	6/12	底部ヘラ切り	
112	杯A	14.8	3.0	6.4	2/12	底部ヘラ切り	
113	杯A	13.9	3.4	6.1	4/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
114	杯A	14.8	4.2	7.0	3/12	底部ヘラ切り	
115	杯A	15.0	3.5	6.5	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
116	杯A	13.4	3.1	6.3	4/12	底部ヘラ切り	
117	杯A	13.2	3.6	5.6	4/12	底部ヘラ切り	
118	杯A	13.0	3.4	6.8	9/12	底部ヘラ切り	
119	杯A	13.6	3.3	5.7	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
120	杯A	13.7	3.2	7.3	6/12	底部ヘラ切り	
121	杯A	14.0	3.5	7.0	1/12	底部ヘラ切り	板状圧痕・はなれ砂
122	杯A	13.4	3.6	6.0	3/12	底部ヘラ切り	
123	杯A	14.0	4.0	6.0	3/12	底部ヘラ切り	
124	杯A	13.8	3.7	6.3	8/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
125	杯A	14.7	3.0	7.5	3/12	底部ヘラ切り	
126	杯A	14.0	3.2	6.7	4/12	底部ヘラ切り	
127	杯A	13.5	4.1	6.6	3/12	底部ヘラ切り	
128	杯A	14.1	4.1	6.6	6/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
129	杯A	13.9	3.8	6.6	8/12	底部ヘラ切り	
130	杯A	14.2	3.7	6.4	5/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
131	杯A	14.3	3.9	6.7	2/12	底部ヘラ切り	
132	杯A	14.0	3.5	6.6	4/12	底部ヘラ切り	
133	杯A	14.1	3.9	6.8	4/12	底部ヘラ切り	
134	杯A	14.8	3.4	7.5	2/12	底部ヘラ切り	
135	杯A	14.4	4.2	7.0	2/12	底部ヘラ切り	
136	杯A	15.0	3.6	7.4	4/12	底部ヘラ切り	はなれ砂
137	杯A	13.8	3.4	6.4	8/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
138	杯A	13.5	3.3	6.4	11/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
139	杯A	15.2	3.7	6.8	3/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
140	杯A	13.1	3.7	6.1	12/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
141	杯A	13.7	3.2	6.6	11/12	底部ヘラ切り	重ね焼き
142	杯A	13.6	4.0	6.9	11/12	底部ヘラ切り	重ね焼き
143	杯B	15.4	5.5	6.9	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
144	碗A	15.6	4.9	6.9	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
145	碗A	14.0	5.1	7.8	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
146	碗A	14.2	5.0	7.3	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
147	碗A	14.0	4.8	7.8	9/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
148	碗A	14.4	5.0	7.4	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
149	碗A	14.2	5.5	7.2	10/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
150	碗A	15.0	5.5	7.9	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
151	碗A	14.6	5.5	7.8	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
152	碗A	15.0	5.6	7.8	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
153	碗A	14.6	4.5	7.4	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
154	碗A	14.6	5.2	7.9	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
155	碗A	15.0	5.4	7.1	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
156	碗A	15.4	5.1	6.8	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
157	碗A	15.8	4.9	7.4	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
158	碗A	15.3	5.1	7.8	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
159	碗A	15.0	4.8	7.0	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
160	碗A	14.8	5.6	7.7	8/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
161	碗A	15.8	5.6	7.5	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
162	碗A	16.1	5.1	7.1	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
163	碗A	15.5	4.9	7.4	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
164	碗A	15.0	5.8	7.2	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
165	碗A	16.0	5.2	8.2	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
166	碗A	16.4	5.2	6.9	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
167	碗A	15.2	6.1	7.8	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
168	碗A	16.2	5.0	7.6	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
169	碗A	16.2	5.4	7.6	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
170	碗A	15.8	5.3	7.5	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
171	碗A	14.7	4.5	8.4	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
172	碗A	14.1	5.3	7.2	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
173	碗A	14.4	5.0	6.8	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
174	碗A	14.6	5.0	8.0	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
175	碗A	15.0	4.6	7.1	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
176	碗A	14.6	5.1	6.9	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
177	碗A	15.0	4.9	6.9	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
178	碗A	15.4	4.7	7.0	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
179	碗A	14.8	5.1	7.4	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
180	碗A	14.7	4.9	7.3	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
181	碗A	14.6	5.6	7.1	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
182	碗A	15.8	4.6	7.0	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
183	碗A	16.0	4.8	7.6	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
184	碗A	15.4	5.6	7.4	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
185	碗A	16.2	5.7	7.2	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
186	碗A	15.4	5.3	7.8	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
187	碗A	15.5	5.1	7.3	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
188	碗A	15.7	5.4	7.4	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
189	碗A	15.5	5.0	6.8	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
190	碗A	16.0	4.7	6.6	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
191	碗A	15.8	5.2	7.5	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
192	碗A	15.7	5.2	7.4	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
193	碗A	16.2	6.0	7.0	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
194	碗A	16.1	5.1	7.4	8/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
195	碗A	15.8	5.8	7.4	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
196	碗A	15.3	5.0	7.1	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
197	碗A	—	3.9	6.5	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	爪状圧痕
198	碗A	17.3	5.0	7.7	11/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
199	杯A	17.3	5.6	7.8	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
200	杯A	14.5	5.2	6.9	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
201	杯A	14.4	5.5	7.1	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
202	杯A	14.4	5.5	7.8	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
203	杯A	15.3	5.0	7.2	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
204	杯A	15.0	5.9	7.4	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
205	杯A	15.2	5.4	7.1	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
206	杯A	15.0	5.0	7.0	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
207	杯A	15.4	5.5	7.8	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
208	杯A	14.8	5.0	5.0	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
209	杯A	15.4	5.0	7.1	5/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
210	碗A	15.4	5.1	7.6	8/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
211	碗A	15.0	5.2	6.9	1/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
212	碗A	15.7	4.7	7.5	7/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
213	碗A	16.3	5.5	7.8	5/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
214	碗A	15.3	5.4	7.1	4/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
215	碗A	15.6	5.0	7.5	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	

通物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
216	碗A	15.4	4.9	7.8	5/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
217	碗A	16.0	6.0	7.7	1/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
218	碗A	17.4	5.3	7.7	2/12	底部ヘラ切り	
219	碗A	15.9	6.1	7.5	4/12	底部ヘラ切り	
220	碗B	12.3	4.3	6.9	4/12	底部ヘラ切り	
221	碗B	12.4	4.5	6.6	6/12	底部ヘラ切り	
222	碗B	12.4	3.9	6.0	6/12	底部ヘラ切り	
223	碗B	12.4	4.4	6.7	3/12	底部ヘラ切り	
224	碗B	12.4	4.6	6.7	4/12	底部ヘラ切り	
225	碗B	12.4	4.2	6.2	3/12	底部ヘラ切り	
226	碗B	12.5	4.6	5.9	3/12	底部ヘラ切り	
227	碗B	12.5	4.5	6.6	4/12	底部ヘラ切り	
228	碗B	12.8	4.3	7.1	2/12	底部ヘラ切り	
229	碗B	13.0	3.8	6.4	4/12	底部ヘラ切り	
230	碗B	12.9	4.1	7.2	4/12	底部ヘラ切り	
231	碗B	13.4	4.9	6.6	8/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
232	碗B	13.4	3.8	7.3	3/12	底部ヘラ切り	
233	碗B	13.6	4.5	7.0	4/12	底部ヘラ切り	
234	碗B	13.3	5.1	6.5	5/12	底部ヘラ切り	
235	碗B	13.7	4.3	6.7	8/12	底部ヘラ切り	
236	碗B	13.8	4.9	6.3	3/12	底部ヘラ切り	
237	碗B	14.5	4.9	7.6	2/12	底部ヘラ切り	
238	碗B	13.6	3.9	7.4	3/12	底部ヘラ切り	
239	碗B	13.2	4.0	7.9	11/12	底部ヘラ切り	
240	碗B	13.0	4.5	7.2	3/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
241	碗B	14.1	5.1	7.3	1/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
242	碗B	12.9	4.2	6.3	8/12	底部ヘラ切り	
243	碗B	13.6	4.8	7.5	3/12	底部ヘラ切り	
244	碗B	13.4	4.7	7.9	6/12	底部ヘラ切り	
245	碗B	13.2	4.6	6.0	4/12	底部ヘラ切り	
246	碗B	13.4	4.6	7.2	2/12	底部ヘラ切り	
247	碗B	13.2	3.6	7.6	6/12	底部ヘラ切り	
248	碗B	13.2	5.0	6.5	3/12	底部ヘラ切り	
249	碗B	13.1	3.6	6.5	2/12	底部ヘラ切り	
250	碗B	13.2	3.6	6.5	3/12	底部ヘラ切り	
251	碗B	14.3	4.9	6.9	6/12	底部ヘラ切り	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
252	碗B	13.8	4.2	7.1	4/12	底部ヘラ切り	
253	碗B	13.4	4.9	6.5	3/12	底部ヘラ切り	
254	碗B	13.1	4.8	6.2	6/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
255	碗B	13.6	4.4	6.5	4/12	底部ヘラ切り	
256	碗B	13.6	4.9	6.4	3/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
257	碗B	14.2	4.4	7.0	3/12	底部ヘラ切り	
258	碗B	14.2	4.6	7.4	1/12	底部ヘラ切り	
259	碗B	13.1	4.8	6.7	2/12	底部ヘラ切り	
260	碗B	14.2	5.0	6.9	4/12	底部ヘラ切り	
261	碗B	14.4	4.7	6.7	4/12	底部ヘラ切り	
262	碗B	14.0	5.0	6.8	4/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
263	碗B	14.2	4.6	6.6	3/12	底部ヘラ切り	
264	碗B	14.4	4.4	7.0	1/12	底部ヘラ切り	
265	碗B	14.6	5.1	7.8	8/12	底部ヘラ切り	
266	碗B	13.5	5.0	7.1	4/12	底部ヘラ切り	
267	碗B	14.4	5.1	7.2	6/12	底部ヘラ切り	
268	碗B	13.4	5.2	6.5	4/12	底部ヘラ切り	
269	碗B	13.8	3.9	6.2	4/12	底部ヘラ切り	
270	碗B	14.1	4.7	6.9	3/12	底部ヘラ切り	
271	碗B	13.8	4.5	6.5	4/12	底部ヘラ切り	
272	碗B	14.4	5.7	6.6	2/12	底部ヘラ切り	
273	碗B	15.0	5.0	7.2	3/12	底部ヘラ切り	
274	碗B	15.2	4.9	7.2	6/12	底部ヘラ切り	
275	碗B	15.2	5.4	7.2	12/12	底部ヘラ切り	
276	碗B	15.0	4.5	7.4	4/12	底部ヘラ切り	
277	碗B	14.1	3.2	7.4	2/12	底部ヘラ切り	
278	碗B	16.4	4.1	7.3	1/12	底部ヘラ切り	
279	碗B	16.0	3.8	7.2	3/12	底部ヘラ切り	
280	碗B	12.1	4.6	6.7	4/12	底部ヘラ切り	
281	碗B	12.4	4.1	6.7	3/12	底部ヘラ切り	
282	碗B	12.9	3.7	6.6	2/12	底部ヘラ切り	
283	碗B	12.8	4.5	6.1	4/12	底部ヘラ切り	
284	碗B	12.7	4.3	6.5	3/12	底部ヘラ切り	
285	碗B	13.6	4.7	6.5	3/12	底部ヘラ切り	
286	碗B	13.6	4.4	6.5	2/12	底部ヘラ切り	
287	碗B	13.1	4.5	6.5	8/12	底部ヘラ切り	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
288	椀B	13.9	3.6	6.4	3/12	底部ヘラ切り	
289	椀B	13.3	4.7	7.2	4/12	底部ヘラ切り	
290	椀B	13.2	3.9	7.0	3/12	底部ヘラ切り	
291	椀B	12.6	5.0	7.1	6/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
292	椀B	13.8	4.4	6.5	4/12	底部ヘラ切り	
293	椀B	12.6	4.2	6.0	4/12	底部ヘラ切り	
294	椀B	13.7	4.6	6.0	7/12	底部ヘラ切り	はなれ砂
295	椀B	13.6	5.0	6.4	3/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
296	椀B	14.1	4.3	6.5	8/12	底部ヘラ切り	
297	椀B	13.8	5.0	5.7	4/12	底部ヘラ切り	
298	椀B	13.7	5.0	6.5	6/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
299	椀B	13.8	4.6	6.6	2/12	底部ヘラ切り	
300	椀B	13.4	4.8	6.8	6/12	底部ヘラ切り	
301	椀B	13.6	4.6	6.8	4/12	底部ヘラ切り	
302	椀B	13.4	5.0	6.7	5/12	底部ヘラ切り	
303	椀B	14.0	4.7	6.3	8/12	底部ヘラ切り	板状圧痕・焼け重
304	椀B	14.6	5.3	7.0	6/12	底部ヘラ切り	
305	椀B	14.2	5.0	6.6	9/12	底部ヘラ切り	
306	椀B	13.5	4.6	6.9	2/12	底部ヘラ切り	
307	椀B	14.7	4.5	6.6	3/12	底部ヘラ切り	
308	椀B	15.2	4.8	7.2	3/12	底部ヘラ切り	
309	椀B	14.2	4.7	6.6	3/12	底部ヘラ切り	
310	椀B	15.1	4.2	6.8	3/12	底部ヘラ切り	
311	椀B	12.2	4.2	7.3	2/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
312	椀B	13.1	4.7	6.7	7/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
313	椀B	13.8	4.9	6.4	6/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
314	椀B	13.7	5.3	6.8	6/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
315	椀B	13.9	5.7	7.0	6/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
316	椀B	14.6	5.2	7.0	11/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
317	椀B	14.8	5.2	7.5	6/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
318	椀B	15.2	5.2	6.8	3/12	底部ヘラ切り	板状圧痕・ヘラ記号
319	椀B	14.2	5.0	6.6	2/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
320	椀B	—	3.2	7.2	4/12	底部ヘラ切り	ヘラ書
321	椀B	13.4	4.9	6.8	2/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号・重焼き
322	椀B	14.0	4.9	7.7	4/12	底部ヘラ切り	重焼き
323	椀B	10.7	4.6	5.8	4/12	底部ヘラ切り	重焼き・板状圧痕

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
324	碗B	17.6	6.1	7.8	2/12	底部ヘラ切り	
325	碗B	17.2	7.7	9.4	2/12	底部ヘラ切り	
326	碗C	14.2	5.2	7.0	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け・二条沈線	
327	碗C	14.8	5.0	7.4	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
328	碗C	15.9	5.3	7.4	5/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
329	碗C	14.8	6.3	8.0	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
330	碗C	15.1	4.6	6.4	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け・二条沈線	
331	碗C	15.4	5.5	7.0	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け・二条沈線	
332	碗C	15.4	6.4	8.8	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
333	碗C	15.8	6.2	8.4	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
334	碗C	15.7	6.3	8.2	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
335	碗C	16.1	5.6	7.0	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
336	碗C	16.2	5.0	7.4	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
337	碗C	16.6	5.7	8.6	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・二条沈線	
338	碗C	14.2	5.6	7.9	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
339	碗C	16.4	5.9	7.5	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
340	碗C	17.2	5.2	8.8	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
341	碗C	17.0	5.5	8.0	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
342	碗C	17.0	5.5	7.3	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
343	碗C	16.4	6.6	7.6	8/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
344	碗C	16.6	5.4	7.6	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け・二条沈線	ヘラ記号
345	碗C	17.6	6.4	8.3	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
346	碗C	16.8	6.1	10.4	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
347	碗C	13.5	5.7	7.3	9/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	ヘラ記号
348	碗C	15.6	5.7	8.1	12/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	ヘラ記号
349	碗C	16.0	5.9	8.3	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	ヘラ記号
350	碗C	14.4	4.9	6.7	3/12	底部ヘラ切り・三条沈線	板状圧痕
351	碗C	14.4	5.4	7.1	3/12	底部ヘラ切り・一条沈線	
352	碗C	—	3.4	7.2	3/12	底部ヘラ切り・一条沈線	
353	碗C	14.4	4.9	7.6	3/12	底部ヘラ切り・一条沈線	
354	碗C	15.1	5.2	7.8	3/12	底部ヘラ切り・一条沈線	
355	碗C	16.2	5.5	7.3	1/12	底部ヘラ切り・一条沈線	
356	碗C	16.7	6.5	8.2	8/12	底部ヘラ切り・一条沈線	
357	碗C	14.8	5.2	6.8	3/12	底部ヘラ切り・一条沈線	ヘラ記号・板状圧痕
358	碗C	15.3	5.7	7.0	3/12	底部ヘラ切り・一条沈線	ヘラ記号
359	碗C	13.0	4.6	7.3	3/12	底部ヘラ切り・一条沈線	ヘラ記号・板状圧痕

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
360	椀C	13.3	4.5	7.8	2/12	底部ヘラ切り・一条沈線	ヘラ記号・東お焼・ 板状片質
361	椀D	16.0	3.6	—	3/12	一条突帯 (残存部)	
362	椀D	17.0	5.1	—	2/12	一条突帯 (残存部)	
363	椀D	16.0	5.0	—	2/12	一条突帯 (残存部)	
364	椀D	16.4	5.9	8.2	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条突帯	
365	椀D	16.0	6.1	9.4	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条突帯	
366	椀D	17.4	3.8	—	3/12	一条突帯 (残存部)	
367	椀D	16.6	5.1	—	2/12	一条突帯 (残存部)	
368	椀D	17.8	3.9	—	2/12	一条突帯 (残存部)	
369	椀D	16.4	5.0	—	2/12	一条突帯 (残存部)	
370	椀D	16.6	4.5	—	2/12	一条突帯 (残存部)	
371	椀D	—	—	—	1/12	一条突帯 (残存部)	
372	椀D	—	—	—	1/12	一条突帯 (残存部)	
373	壺	9.2	3.3	—	3/12		口縁部の破片
374	壺	9.2	3.2	—	6/12		口縁部の破片
375	壺	9.0	4.5	—	9/12		口縁部の破片
376	壺	10.2	4.5	—	9/12		口縁部の破片
377	壺	—	—	—	—		耳部の破片
378	壺	—	—	—	—		耳部の破片
379	壺	12.3	5.9	—	3/12		口縁部の破片
380	壺	13.0	7.1	—	11/12		口縁部の破片
381	壺	13.4	6.4	—	4/12		口縁部の破片
382	壺	14.0	6.8	—	6/12		口縁部の破片
383	壺	15.0	3.6	—	6/12		口縁部の破片
384	壺	14.1	8.2	—	11/12		口縁部の破片
385	壺	13.4	5.6	—	2/12		口縁部の破片
386	壺B	13.3	13.9	—	10/12	一条突帯・一条沈線・耳貼り付け	
387	壺B	—	6.7	—	3/12	一条突帯・一条沈線・耳貼り付け	胴部の破片
388	壺B	15.5	19.3	—	6/12	二条沈線・耳貼り付け	
389	壺	16.0	2.7	—	4/12		口縁部の破片
390	壺	17.2	19.1	—	4/12		口縁部の破片
391	壺	16.2	8.0	—	2/12		口縁部の破片
392	壺	16.8	4.8	—	3/12		口縁部の破片
393	壺	17.3	9.9	—	3/12		口縁部の破片
394	壺	17.8	10.2	7.4	2/12		口縁部の破片
395	壺B	—	14.1	—	4/12	二条突帯貼り付け後、耳貼り付け	胴部の破片

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
396	壺B	—	6.4	—	5/12	二条突帯貼り付け後、耳貼り付け	胴部の破片
397	壺B	15.5	5.1	7.3	6/12	二条突帯貼り付け後、耳貼り付け	胴部の破片
398	壺B	15.7	5.4	7.4	6/12	二条突帯貼り付け後、耳貼り付け	胴部の破片
399	壺	15.5	5.0	6.8	2/12	二条突帯貼り付け後、耳貼り付け	口縁部の破片
400	壺	18.2	10.0	—	3/12		口縁部の破片
401	壺	18.9	8.8	—	2/12		口縁部の破片
402	壺	19.4	10.6	—	4/12		口縁部の破片
403	壺	19.7	11.7	—	8/12		口縁部の破片
404	壺B	—	28.5	13.7	6/12	二条突帯貼り付け後、耳貼り付け	
405	壺B	—	30.7	17.3	6/12	一条突帯貼り付け後、耳貼り付け	
406	壺	20.0	8.6	—	3/12		
407	壺	20.0	10.5	—	3/12		
408	壺	20.0	11.0	—	2/12		
409	壺	20.6	6.4	—	2/12		
410	壺	20.4	8.7	—	3/12		
411	壺	20.0	15.7	—	2/12	1条突帯貼り付け	
412	壺B	22.3	23.8	—	3/12	2条突帯貼り付け後、耳貼り付け	
413	壺B	—	24.1	—	6/12	2条突帯貼り付け後	
414	壺B	—	7.2	—	2/12	2条突帯貼り付け後、耳貼り付け	
415	壺B	—	12.9	—	1/12	2条突帯貼り付け後、耳貼り付け	スのへら書
416	壺B	10.7	17.2	15.3	12/12	沈線施文後、耳貼り付け	
417	甕	13.6	7.7	—	2/12	へら切り機高舎貼り付け 外面平行タタキ、内面ハケ目	
418	甕	16.8	16.2	—	3/12	外面平行タタキ、内面ハケ目	
419	甕	15.3	6.3	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
420	甕	15.0	6.0	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
421	甕	17.8	6.5	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
422	甕	16.0	9.6	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円	
423	甕	15.0	11.5	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円	
424	甕	16.2	9.0	17.3	3/12	外面平行タタキ・内面同心円	
425	甕	18.2	12.1	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
426	甕	16.6	8.3	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円	
427	甕	16.9	3.5	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
428	甕	24.1	6.0	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
429	甕	23.0	6.1	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
430	甕	30.3	14.5	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円	
431	甕	31.8	5.8	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
432	甕	33.8	6.7	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
433	甕	34.1	9.4	—	4/12	外面平行タタキ・内面同心円	
434	甕	39.0	9.6	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
435	甕	35.9	9.5	—	6/12	外面平行タタキ・内面同心円	
436	甕	42.2	18.8	—	1/12	外面平行タタキ・内面同心円	
437	甕	35.4	8.2	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
438	甕	34.7	8.2	—	10/12	外面平行タタキ・内面同心円	
439	甕	45.6	8.1	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
440	甕	35.6	36.2	—	8/12	外面平行タタキ・内面同心円	
441	羽釜	24.1	10.0	—	2/12	鈔貼り付け	
442	羽釜	24.6	13.2	—	2/12	鈔貼り付け	
443	羽釜	24.2	15.3	—	3/12	鈔貼り付け	
444	羽釜	24.8	16.8	—	3/12	鈔貼り付け	
445	羽釜	25.2	7.2	—	2/12	鈔貼り付け	
446	羽釜	25.2	11.7	—	2/12	鈔貼り付け・内面同心円	
447	羽釜	25.3	12.6	—	2/12	鈔貼り付け	
448	羽釜	23.2	25.3	—	12/12	鈔貼り付け	
449	羽釜	23.9	10.2	—	3/12	鈔貼り付け	
450	羽釜	24.0	13.8	—	3/12	鈔貼り付け	
451	羽釜	24.0	11.0	—	2/12	鈔貼り付け	
452	羽釜	24.2	24.6	—	4/12	鈔貼り付け	
453	羽釜	25.2	12.1	—	3/12	鈔貼り付け	
454	羽釜	24.6	14.5	—	5/12	鈔貼り付け	
455	羽釜	23.8	13.5	—	3/12	鈔貼り付け	
456	羽釜	30.4	14.9	—	2/12	鈔貼り付け	
457	羽釜	24.2	12.8	—	4/12	鈔貼り付け	
458	羽釜	25.4	10.3	—	6/12	鈔貼り付け	
459	羽釜	23.6	10.1	—	8/12	鈔貼り付け	
460	羽釜	22.0	16.5	—	6/12	鈔貼り付け	
461	不明	—	—	—	—	—	へら書
462	鉢	18.7	3.0	—	2/12		
463	鉢	22.2	2.9	—	1/12		
464	鉢	37.4	8.3	—	3/12		
465	鉢	40.0	6.5	—	2/12		
466	壺C	11.7	8.9	—	4/12		
467	甕	—	3.6	18.2	7/12		高台の破片
468	碗	9.6	6.2	—	10/12		二面碗

第3節 古城2号窯跡の調査

1. 位置 (図版53、挿図62・63)

古城2号窯跡は三山市西相野字古城に所在する。同窯は古城1号窯跡と同じ支谷斜面の深部に立地し、1号窯跡との距離は約90mの位置関係にある。谷底から尾根頂上部までは40mの比高差があるが、窯本体は確認調査の結果や電磁気探査測定の結果から斜面のかなり上方に位置すると予想された。

窯跡が立地する谷は古城池から南に分岐する支谷で幅約20m、長さ100mと幅が狭く直線的に伸びている。

須恵器の採取された位置は小さな尾根の張り出す場所に立地しており、窯体は谷に対して直交しないしは開口部に角度を振って設けている可能性がよい。

2. 方法と経緯

古城1号窯跡調査中に同窯跡の谷奥部で須恵器片が採取され、地形なども考え合わせると、窯が付近に立地すると判断された。また、須恵器片が採取された地点は近畿自動車道舞鶴線の残上の置場として埋め立てられる予定地内にあった。このため急遽残土置場部分について確認調査を実施することになった。

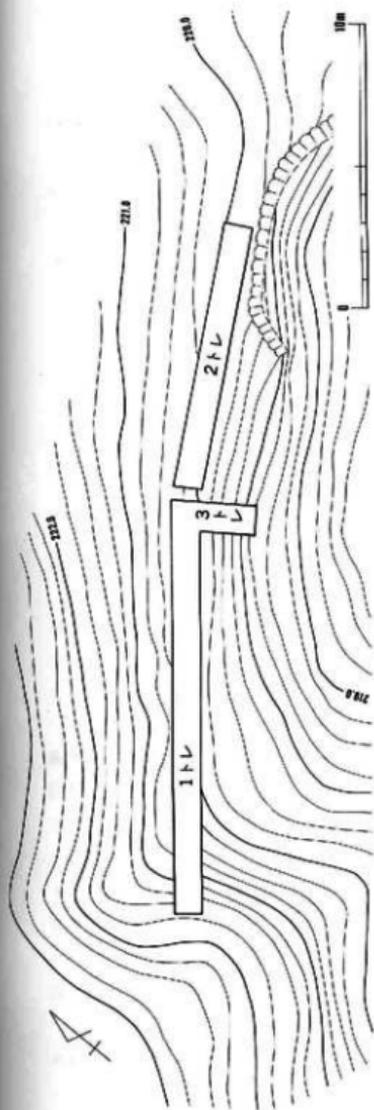
古城2号窯跡の確認調査は第1トレンチが15m×1m、第2トレンチ10m×1m、第3トレンチが2m×1mの合計3本のトレンチを設定して進めた。トレンチは第1・第2トレンチが標高219～220m前後のコンターに沿って、第3トレンチはこれに直交して斜面の傾斜方向に設定した。調査面積は27㎡、期間は昭和61年11月27日～11月28日の2日間であった。調査は岡崎正雄・山上雅弘が担当した。

3. 調査の成果 (図版53、挿図96)

(1) トレンチ

調査の結果、表土下0.4m前後で地山を検出した。基本層序は表土・黄色土ないしは黄灰色土層・地山の順であった。この内、黄灰色土層には須恵器や炭・灰を包含していた。同層は第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチの間にまたがって堆積するもので、第1トレンチ側に4.7m、第2トレンチ側に3.3mの合わせて約8.0mの範囲で、第3トレンチには傾斜方向に約1m堆積していた。最大の厚さは0.3m前後である。

黄灰色土層には須恵器の他、少量の炭・灰を包含しているが、いずれも稀薄なものである。従って、灰層といえるほどのものではなく、上方(残土置場用地外)に存在する灰層から流された土砂が堆積したものと考えられた。また、電磁気探査測定の結果からも、斜面のかなり上



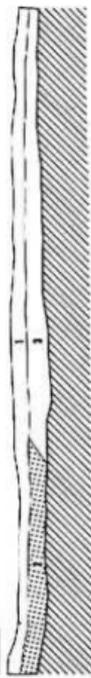
1トレ東壁



3トレ北壁

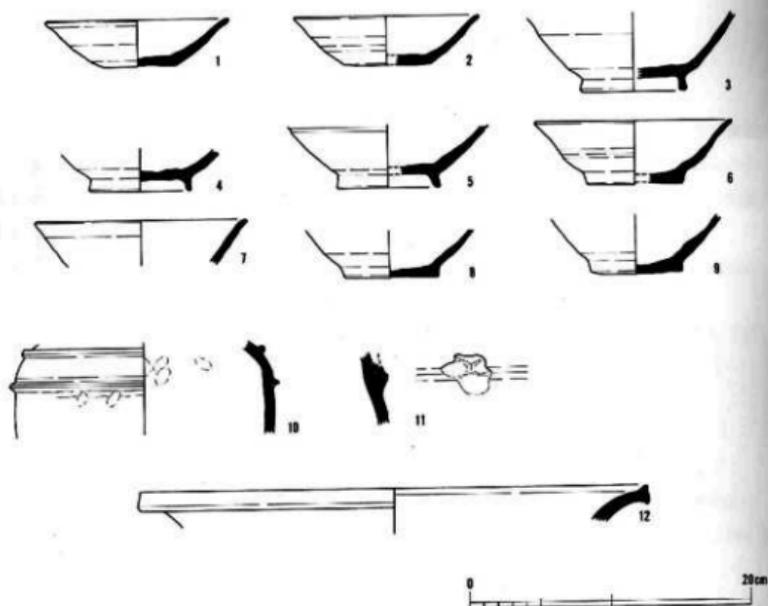


2トレ東壁



1. 黄土
2. 黄灰色土(炭・土器混り)
3. 黄色土
4. 淡黄色土
5. 淡褐色土

神岡66 石塚中2号土器堆積状況図



挿図97 古城2号窯跡出土須恵器

方と予想される結果がえられている。

(2) 出土遺物 (図版54、挿図97)

古城2号窯跡の遺物は調査地点が灰層からの流失土に含まれた土器群である。このため遺物量は少量であり、かつ細片が多い。従って、今回の遺物が全体の様相を把握しているとは言いがたい。出土した遺物はコンテナにして1箱分であった。

遺物には杯・甕・碗A・碗B・壺・甕がある。この内、実測できたものは12点である。

出土した遺物の量は充分とはいえないが、隣接する古城1号窯跡と比較すると、碗D・羽釜・鉢などの遺物が欠落している。しかし、色調は暗灰色および暗褐色の遺物が多く胎土と共に類似する点が多い。杯・碗などの法量も古城1号窯跡に類似するものである。さらに糸切り底のものや、皿・杯蓋が無いなどの点も古城1号窯跡に類似している可能性があり、時期的にも近いと考えられる。

杯A (挿図97 1・2) 体部が直線的に立ち上がり、口縁部をすんなりとおわる。底部はヘラによる切り離しである。

椀（挿図97 7）口縁部の破片である。体部は直線的に立ち上がる個体で、口縁部で外反する。口径13.1cmを測る。

椀A（挿図97 3・4）何れも体部から下の破片である。3は直立する高台で体部が、直線的に立ち上がる個体である。

椀B（挿図97 6・8・9）6は口径13.9cm前後の個体で、ロクロの引上げ痕跡が明瞭に残る。内面底部の段は意識している。

椀C（挿図97 5）体部下半の個体である。沈線がかろうじて観察できる。体部は直線的に立ち上がり、高台が「ハ」の字に開くものである。

壺（挿図97 10・11）胴部の破片である。二重貼り付け突帯を肩部に持つ個体で、耳を貼り付けた痕跡があるので双耳壺と推定される。

甕（挿図97 12）口縁部の小片である。口縁端部を上下に肥厚させて、外面に面を持つ。

第4節 古城3・4号窯跡の調査

1. 概要（図版31、挿図62）

古城1号窯跡調査中に、2号窯跡の他に分布調査で須恵器が採取できる地点が2か所認められた。このためこれを古城3・4号窯跡とした。所在地は三田市西相野字古城である。

両窯は古城窯跡群の中で最も東に位置し、同じ尾根を挟んで向上・古城窯跡群とは表裏の関係にある。窯の立地する周辺は、古城池から南東に分岐する支谷の最奥部にあたる。この支谷は両窯が立地する手前で、さらに2又に分岐しており、この西側の谷の東斜面に古城3号窯跡が、東側の谷の西斜面に古城4号窯跡が位置する。須恵器が採取できた場所の標高は217m前後である。窯体は採取した付近の地形や、電磁気探査測定の結果などから採取地点の斜面を登った周辺に位置すると思われる。しかし、残念ながら窯の場所を特定することはできなかった。

同地点付近は近畿自動車道舞鶴線の建設予定地からは離れているが、道路建設にあたって、残土置場として予定された付近であった。このため、窯跡発見後日本道路公団と協議を行い、この部分が開発範囲に入るかどうかについて確認した。この結果、両窯は残土置場予定地からさらに谷奥に入ることが判明した。このため、今回両窯については調査を実施していない。従って、窯跡は現在も同地点に遺存している。

2. 古城3号窯跡遺物（図版54、挿図98 1～4）

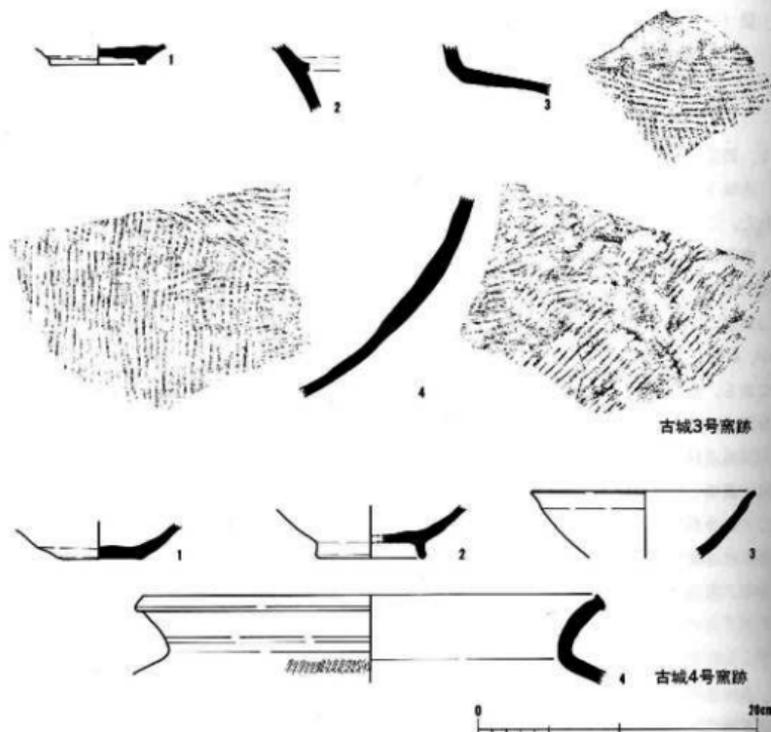
表採遺物で4点が辛うじて図化できた。器種は杯B・壺・甕がある。少量であるため、窯跡の遺物の詳細な様相を知ることはできない。

杯Bは底部の破片である。高台は低く、台形を呈するものである。2は壺の突帯の破片であ

る。突帯の稜がやや上の方にくるものである。3・4は甕の破片である。3は肩部の破片、4は底部付近の破片と考えられる。外面は平行叩き、内面は叩き成形後板ナデによって調整している。

3. 古城4号窯跡遺物 (挿図98 1~4)

古城3号窯跡同様表採資料である。やはり4点が図化できた。器種は杯A・椀A・椀・甕である。1は杯Aの底部片である。ヘラによって切り離すもので、底部と体部の境はナデ調整している。2は椀Aの底部片である。やや閉きぎみの貼り付け高台を持つ。3は椀の口縁部片であるが底部の詳細が不明なため細分はできない。口縁部をナデてやや外反させている。4は甕の口縁部片で、口縁部を上下に拡張して外面に面を作る。



挿図98 古城3・4号窯跡出土須恵器

表7 古城2号窯跡 出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
1	杯A	12.8	3.2	5.1	1/12	底部へら切り	
2	杯A	13.0	3.4	6.2	1/12	底部へら切り	
3	杯A	—	5.2	7.5	4/12	底部へら切り・高台貼り付け	
4	碗A	—	2.6	7.2	3/12	底部へら切り・高台貼り付け	
5	碗C	—	4.3	7.2	2/12	底部へら切り・高台貼り付け	
6	碗B	13.9	4.4	6.6	2/12	底部へら切り	
7	碗	15.0	3.2	—	1/12		
8	碗B	—	3.2	6.7	12/12	突帯と耳貼り付け	
9	碗B	—	4.1	6.4	12/12	鏡切り後底部高台貼り付け	
10	壺B	—	4.1	6.4	1/12	二条の突帯貼り付け	胴部の破片
11	壺	—	3.4	6.7	1/12	突帯と耳貼り付け	耳部の破片
12	甕	36.2	2.5	—	1/12		口縁部の破片

表8 古城3号窯跡 出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
1	杯B	—	1.2	6.7	1/12	底部へら切り後高台貼り付け	
2	壺	—	—	—	1/12		胴部の破片
3	甕	—	—	—	1/12	内面同心円文・外面平行タタキ	肩部の破片
4	甕	—	—	—	1/12	外面平行タタキ	底部の破片

表9 古城4号窯跡 出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
1	杯A	—	2.2	6.0	12/12	底部へら切り	底部の破片
2	碗A	—	3.5	7.7	3/12	へら切り後高台貼り付け	底部の破片
3	碗	16.0	4.7	—	2/12		口縁部の破片
4	甕	33.2	5.5	—	2/12	外面平行タタキ	口縁部の破片

第5節 古城5号窯跡の調査

1. 調査の方法 (図版55、挿図62・99・100)

(1) 位置 (挿図62) 古城5号窯跡は三田市西相野字古城に所在する。この場所は古城窯跡群が分布する谷の起点にあたり、開口部までは50mである。付近には古城1号窯跡が東90mに位置する。窯本体及び灰原は古城池の中に立地し、焚口付近の標高は204mである。窯跡は古城池の北東寄りにあって南向きに立地していたと考えられる。窯跡周辺は池が開削されたことで地形が大きく変化していると考えられる。また前面の北西から池中に流れる小さい谷も当時の地形を分かりにくくしている。これらのことから、窯跡の立地や方向、周囲の地形については詳細を明らかにすることはできなかった。

(2) 方法と経緯 (挿図99・100) この窯跡は古城1号窯跡調査中に、古城池の水が減少したため偶然発見された窯跡である。このため急速分布調査を実施し、窯跡の範囲を調査した。この結果、池中に須恵器を包含する灰原が観察でき、範囲も掴めることがわかった。一方、古城池は、近畿自動車道路建設に関連して、貯水量確保のために改修する計画が予定されていた。開発は特に、池周辺の緑を大きく削平するもので、窯本体及び灰原と想定される部分が確実に範囲内に含まれると判断された。このため日本道路公団と協議の上、全面調査を実施することとなった。調査は昭和61年11月18日～11月26日の期間に行い、調査範囲は225㎡である。調査は岡崎正雄・山上雅弘が担当した。

全面調査に際しては、遺物散布状況から推定される窯跡の方向を基準線として、調査区を設定した。挿図100のように3本のセクションを縦横に設けて調査を実施した。表土掘削の際には遺物をセクションで区画された範囲ごとに採り上げて調査を進めた。なお、調査に際しては池の水を抜くことが困難であったため、灰原の末端については、一部未調査になった所がある。

2. 遺構の調査 (図版56、挿図100・101)

(1) 概要 本窯跡は古城池内の北斜面に立地する。調査は窯体(窯体は炭・焼土によって赤変した痕跡によって観察された)と灰原の大部分について行った。窯跡は西北側から流下する谷の開口部に築窯するもので、灰原はこの谷を埋めて堆積している。窯体の主軸方向は谷に対して直交するものと考えられる。灰原は調査区の西端から東に向かって堆積するもので、末端は古城池の中に広がっていた。

灰原は黒色土が堆積し、須恵器の他に窯体片・炭・焼土を大量に含んでいた。

(2) 窯体 (挿図100) 窯跡の本体および周溝などの周辺施設は、既に池の開削によって削平されていた。しかし、灰原の起点から上方に、赤く焼け、炭が顕著に分布する場所が観察できた。

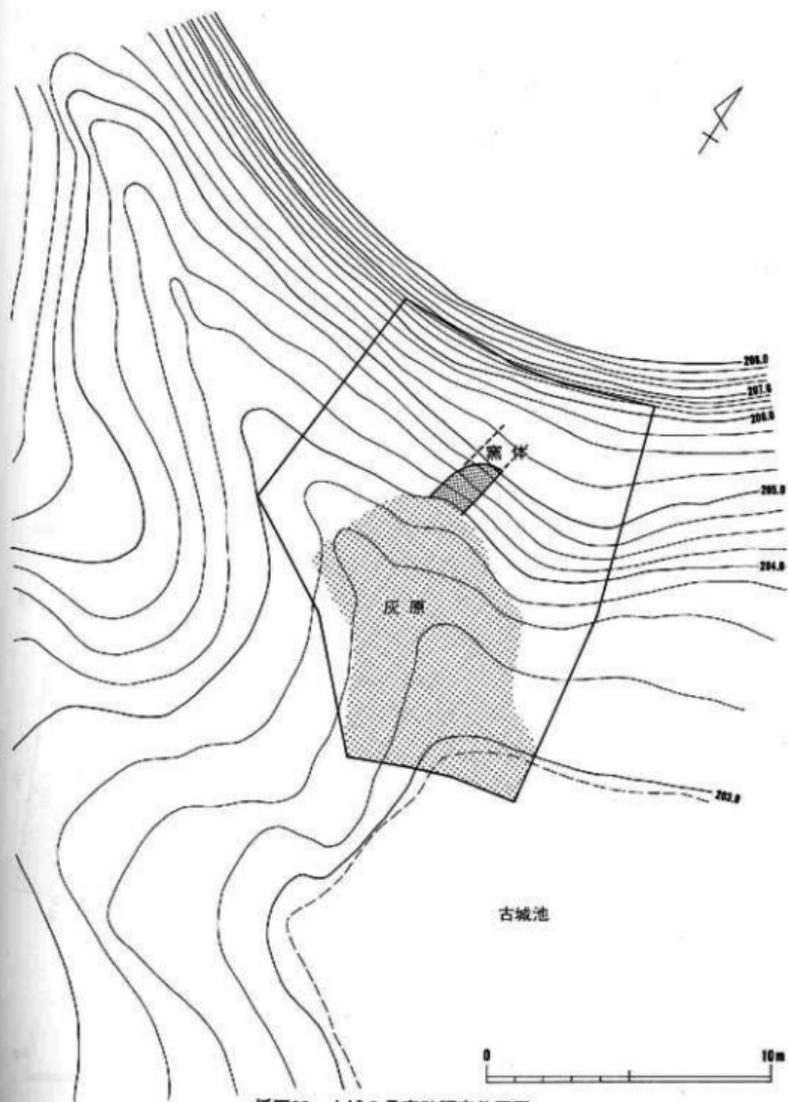
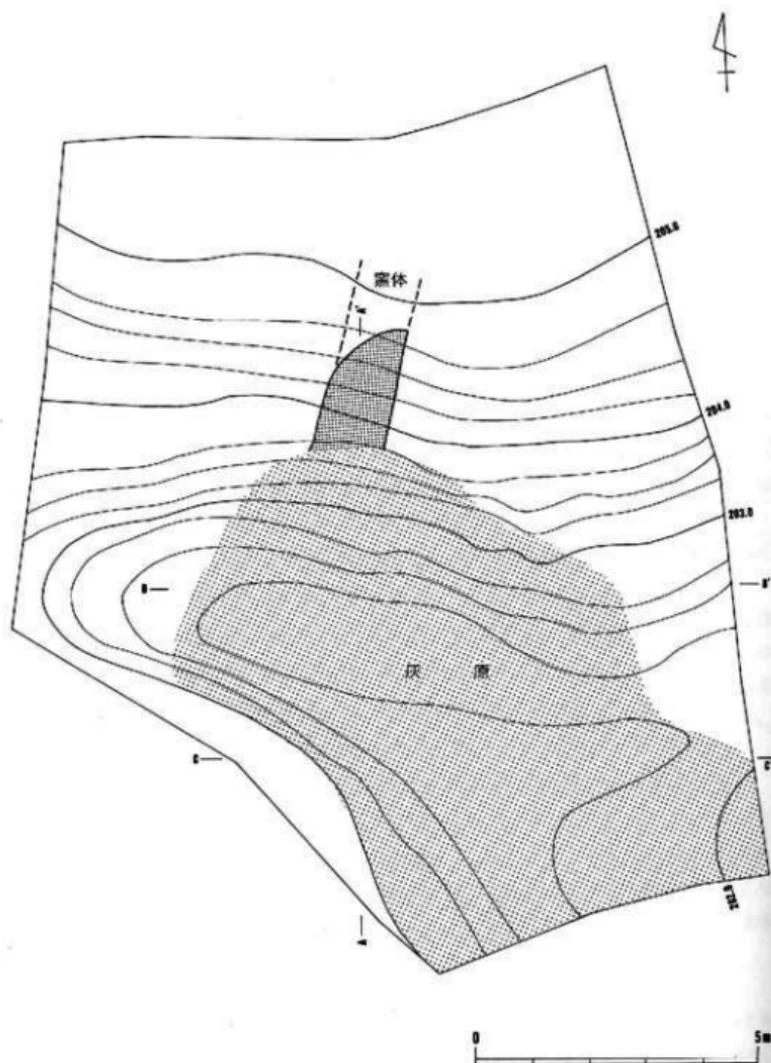


插图99 古城5号窑址调查位置图



挿図100 古城5号窯跡 窯体と灰原遺構図